投

388
98

388-98

# 山陽詩鈔註釋

大正
8. 9. 8
內交

# 序

詩文之盛衰、亦氣運也已、其自盛而衰、因循陵夷、人不之覺焉、及才學絶特之士一出、其間奮勵揮霍、洗除舊習、天下耳目於是乎一新、如師老而得名將、疾痼而遇良醫、然後其衰者復興而盛矣、士之出不出、雖亦氣運、使然抑其人奮勵揮霍之功、能使在人者不墜于地也、其任今在吾友賴子成乎、且就詩論之、元和偃武之後、

詩風淳朴未開、率學宋而鄙粗、及元祿享保而明風大行其宏麗肥美有可觀者而詩始盛矣、其流弊摸擬緣飾、神骨消亡而詩乃衰矣、及天明寛政間、稍覺其可厭、而未得其人、乃競新爭奇、人々自喜、論密而藝疎、說高而語卑、萎靡不振、以至于今日焉、子成乃有慨乎此、以曠世之才、逞雄偉之詞、體兼古今、調無唐宋、畧應酬之常套、而發咏懷之蓄念、合典故於和漢、寓議論於風雅、摻縱在手、細大無遺、能使覽者壯氣憤



然、扼腕切齒、欲與彼、韓蘇諸公相馳驅焉、故每一二章出、人爭傳寫、無脛而走千里、後進之士往々有所擩染而今己不安於詹々、十年之外、四方採風、其必有改觀者矣、昔者齊梁之委靡、有若陳拾遺、而後李杜輩出、宋季之瑣屑、有若元遺山、而後揚虞嗣興、雖有繼子成而興者、子成倡首之功不可掩也、子成之詩、其傳于世、而不可磨滅也、如此而其門人某等、欲抄其集而刊行之、必非子成之意、吾以其有關天下詩風

之盛衰也、乃亦氣運盛衰之所繫也、慫慂其事而爲之序、至於文則其功有倍於詩者、待他日全集出、而論之未晚也、雖然子成豈獨欲以詩文傳世者乎哉

天保三年壬辰冬十月

友人　篠崎弼撰并書

## 凡例

一、山陽の詩は由來難解を以て稱せらる、殊に山陽の眞面目は詩文の末にあらざりしが故に、彼の詩文を通して彼の眞面目を窺ふことは、字句難解の上に重加されたる讀者の負擔なるのみならず、字句以外常に彼の眞面目を窺ふことは彼の詩文に對する讀者の態度として最も重要なる要件なりとす。

一、山陽詩鈔の註解は世或はこれあらんも余の此を註解するに當りては世間何等の參考書なく專ら王父講誦の際に筆錄せしものを再錄したるに止まりたれば、隨つて粗漏の箇所無しとも保す可らず、其等は再版の時を待ちて增補するに吝ならざるべし。讀者之を諒せよ。

一、書中載する處の注意は、努めて詩句を現代的に解釋せんと欲して余の附加したるものに係る、素より小册子のことなれば意餘りありて言葉足らず、僅に讀者の思想に一轉機を與へんことを努めたるに過ぎざりしは、止むを得ざりしこととは言へ、余の遺憾に堪えざる處なりとす。

柳莊識



# 目次


一、卷之一（山陽十四歲より三十四歲に至る迄の詩を錄す）……自一至五三頁
二、卷之二（山陽卅五歲より三十八歲に至る迄の詩を錄す）……自五五頁至一〇六頁
三、卷之三（山陽三十九歲、西遊中の詩を錄す）……自一〇七頁至一五五頁
四、卷之四（同ぐく西遊中の詩を錄す歸途母を奉じて京に入る）……自一五六頁至二三〇頁
五、卷之五（山陽四十歲より四十一歲に至る迄の詩を錄す、此時母を奉じて芳野に遊ぶ）……自二三一頁至二七六頁
六、卷之六（山陽四十二歲より四十三歲に至る間の詩を錄す）……自二七七頁至三三六頁
七、卷之七（山陽四十四歲より四十六歲に至る迄の詩を錄す、此時新居帖成る）……自三三七頁至三八五頁
八、卷之八（山陽四十五歲より四十六歲に至る迄の詩を錄す、歿年五十三歲）……自三八七頁至四七三頁
（附錄）索引

古陵松柏吼天颯、山寺尋春春寂寥、
眉雪老僧時輟帚、落花深處説南朝。
（藤井竹外）

厭聽點滴井邊桐、起看空濛一望中、
横着東山三十里、眞珠簾外翠屏風、
（楊誠齋）



# 山陽詩鈔卷之一

頼襄子成著
蜂谷柳莊註

## 〇癸丑歳偶作

十有三春秋逝者已如水。天地無始終。人生有死。安得類古人。千歳列青史。

**讀方** 十有三春秋、逝く者已に水の如し、天地始終無く、人生々死有り、安んぞ古人に類して千歳青史に列するを得ん。

## 〇甲宙首春作時懐家君在東邸

黄鳥喈々日載陽。辛盤遥拜向東方。霞關應侍春風座、曾否回頭憶故郷。

**註** 逝者已如水 孔子逝水を見嘆じて曰く逝者夫れ此の如きか晝夜を舍てず

山陽時に年十有三、此時仰いで悠々たる宇宙を横觀し、俯して須臾の人生を縱觀し去り、遂に古人と共に名を後昆に垂れんと期する處、彼か幼時の志操を見るべく、又自然の搖籃中に始めて眠を覺したる文豪の俤を想ふべし。

**註** 黄鳥喈々 詩經に黄鳥于に飛んで其の鳴くこと喈々たり、と、喈々は和聲遠く聞ゆるなり 向

東方―山陽年甫めて十四父翁春水此の時江戸に在り

霞關往昔淺野邸は辛盤風俗霞ヶ關にあり記に楚人元日に五辛菜を盤に上し之を食ひて以て五臟の氣を養ふ

註 青龍蟠梅樹地に蟠まれる形なり養ニ孤芳ニ衆芳に先ちて孤り花を開くを云ふ

評 管茶山曰く風土の詩一誦すれば恍として其の境を歷るが如し

黄鳥喈々日載に陽なり、辛盤遙に拜して東方に向ふ、霞關應に侍すべし春風の座、曾て頭を回らして故郷を憶ふや否や

○咏梅

一株臨水靜龍蟠擬養孤芳傲歲寒自有松篁足相伴休過墻去索人看

評 一株水に臨んで靜龍蟠まる、孤芳を養うて歲寒に傲らんと擬す、自から松篁相伴ふに足るあり、墻を過ぎ去つて人の看るを索むるを休めよ。

○石州路上

雨過泉聲逾喧木落山骨尤瘠。今朝杖底千岩昨日天邊寸碧。

評 雨過ぎて泉聲逾よ喧なり、木落ちて山骨尤も





瘠す、今朝杖底の千岩は昨日天邊の寸碧。

○甑坂

行覺溪雲脚下生。危巖夾水一橋横。登々峽路天將黑。聞斷溪童搗紙聲。

評 行ゆく覺ゆ溪雲脚下に生ずるを、危巖水を夾さんで一橋横ふ、登々峽路天將に黑らんとす、聞斷す溪童紙を搗くの聲。

○夜坐

一穗燈花落復生。火紅茶鼎似蟬鳴。窓邊知有芭蕉樹。夜久時聞墜露聲。

評 一穗の燈花落ちて復た生ず、火紅茶鼎蟬鳴に似たり、窓邊知りぬ芭蕉の樹あるを、夜久しうして時に聞く墜露の聲。

註 登々登り登る聞斷絶え絶えに聞こゆ

註 燈花燈心結んで花となるを云ふ火紅炭火似蟬鳴茶を煮る湯の音芭蕉樹維摩經に是の身芭蕉樹の如く堅固ならず、とあり又、芭蕉林の字あり

註丁巳東遊　子成時に年十八杏坪翁に從うて東遊す　畿甸　畿は王の居る處、甸は王の田也國語にこれあり、又王城より五百里以内を畿と稱し千里以内を甸服といふ　蟠踞　寰宇記に蟠龍虎鋸は帝王の居なりとあり　尙山河　國滅びて山河あり城春にして草木深し、詩經一愛んで見えず首を搔いて踟躕す、とあり、蓋し何れに之くを知らざる貌　搔首　地を好む造語、沈確、蓋し神之茶山曰く李北子成少き日李北子を學ぶ者と自ら別なり、亨保の諸人後七

註百揆　舜典に見ゆ百官事を揆るをいふ　簪　詩經簪は頭髮に挿す物纓は冠の紐をいふ　駿奔　詩經

○丁巳東遊六首

畿甸風光吾始過。東來地勢迴坡陀。淡洲蟠踞當郊樹。淀水蒼茫接海波。楠子孤墳、長涕淚。豐家遺業、尙山河。悠々今古供搔首。欲說興亡奈獨何。

讀方　畿甸の風尤吾始めて過ぐ、東に來つて地勢迴かに坡陀たり、淡洲播踞して郊樹に富り、淀水蒼茫として海渡に接す、楠子の孤墳長へに涕淚、豐家の遺業尙ほ山河、悠々たる今古搔首に供す、興亡を說かんと欲するも獨なるを奈何。

百揆簪纓尙駿奔。觀光足識帝王尊。雲餘五色紫宸殿。日上三竿朱雀門。寶器由來





周頌に駿奔走して廟にありとあり　雲餘五色　杜子美の宣知殿退朝と題する詩に「雲は蓬萊に近いて常に五色」　紫宸殿　承明門内にあり俗に南殿といふ　朱雀門　王城南面の正門也　郟鄏　周の成王鼎を郟鄏に定む、とあり　溫原　周の哀王土田を晉文公、樊溫原等に賜ふと國語に見ゆ　赤縣　支那を指す史記に中國名け赤縣神州といふとあり　如傳舍　前漢書に富貴常なく忽にして人を易ふ此れ傳舍の如し　天諶　書經咸有一德に、天諶とあり、諶は信也　難しとあり、諶は信也

註控海東　詩經の註に控は引なりとあり意察すべし　故關　逢坂の關趾をいふ　路岐通　路岐れて八方津に在り流に通ずること　峙河流れ山

存郟鄏土田不必問溫原。西方赤縣如傳舍。孰若天諶眷萬孫。

讀方　百揆簪纓尙ほ駿奔、觀光議るに足る帝王の尊きを、雲は餘す五色紫宸殿、日は上る三竿朱雀門、寶器由來郟鄏に存し、土田必ずしも溫原を問はず、西方の赤縣傳舍の如し、天諶に萬孫を眷むと孰若ぞ。

五十三亭控海東。故關右折路岐通湖南。草樹春雲碧。畿內峯巒夕日紅。流峙依然此形勝。興亡已閱幾英雄。分明攻守千年勢。著論誰追賈誼風。

讀方　五十三亭海東を控ゆ、故關右折して路岐通ず。

峰つ賈誼 唐の人詩文に長ず

【評】茶山曰く、後來の著者蓋し此に胚胎す

【註】大刀頭 古樂府に「何ぞ當らん大刀頭」と註に刀頭に釪あり、釪と還と音相通ず、蓋し隱語なり、故に此句「思鄕何ぞ隱るを問はん」の意味なり 層嶺重なり合つた重關重なり合ひ驩嶺なり たる關所 驩虞孟子に霸者の民は驩虞如たり、とあり自得の貌也 基趾根抵のあること 居然大なる貌 金甌梁の武帝曰く、我國家は金甌の缺けたるところ無きが如しと

【註】鐵馬武裝せる馬なり 虎符漢書に文帝二年銅虎符を爲つて郡守に與へ各其の半を分つ、右は京師に留め左は以て郡守に與ふ、とあり 蛛網經邦萬章普くして萬人を網羅し盡すをいふ 八洲大八洲をいふ

湖南の草樹春雲碧く、畿内の峯巒夕日紅ぬなり
流時依然だり此の形勝、興亡已に閲す幾英雄、分明
なり攻守千年の勢、著論誰か追ふ賈誼の風。

思鄕何問大刀頭。書劒今來未倦遊。年少
吾將事觀國。時平誰復索封侯。天邊層嶺
連三越、雲裡重關入八州。堪識驩虞有基
趾。居然十世舊金甌

【讀方】思鄕何ぞ問はん大刀頭、書劒今來つて未だ遊に倦まず、年少うして吾將に觀國を事とす、時平かにして誰か復た封侯を求めん、天邊の層嶺三越に連り雲裡の重關八州に入る、識るに堪へたり驩虞基趾あるを、居然たる十世舊金甌。

鐵馬當年撥戰塵。遙思天正壯圖新。虎符據險驅群牧。蛛網經邦籠萬人。戈戟霜寒百蠻氣。節旄風暖八洲春。吾行亦知蒙恩澤。東海山陽如比隣。





【註】泱々左傳に泱は宏大なり 雲虹阿房宮賦中の字にして雲や虹なり 睥睨城上の垣なり 終古太古なり 閶闔閶は市垣を云ふ、闔は市門を云ふ 肩摩轂擊蘇秦齊王に說いて曰く臨淄の途

【讀方】鐵馬當年戰塵を撥す、遙に思ふ天正壯圖新なるを、虎符險に據つて群牧を驅り、蛛網邦を經て萬人を籠む、戈戟霜寒し百蠻の氣、節旄風暖、かに八洲の春、吾行ゆく亦た知る恩澤を蒙るを、東海山陽比隣の如し。

霸氣泱々負海開。雲虹簇立總樓臺。樹梢
睥睨雙城聳。空際芙蓉八朶來。終古草茅
迎白月。即今閶闔起紅埃。肩摩轂擊家々
給。管晏何過諸子才。

たる車、轂を擊ち人、肩を摩す、と家々給家富裕なるをいふ漢書に管晏管子家給し人足るとあり晏子支那の經世家也

評 茶山曰く、起手凡ならず

註 海壖海岸の地小鬼大鬼左傳中赤旂赤旗なり旗の未だに見ゆ垂れざるものを旂と云麗麗卓子藻沐に峯頭の巉巖を云澎湃波相戻るを甸服王城より五百里以内の地をいふ唾手其の容易なるをいふ也要害我ことを要ありて敵には害ある地躭視易經に虎視躭々とあり註に視ざるの貌一身渾是膽蜀の趙雲

讀方 霸氣決々海を負うて開く、雲虹簇り立つ總樓臺、樹梢の睥睨雙城聳え、空際の芙蓉八朶來る、終古の草茅白月を迎へ、即今の闤闠紅埃を起す、肩摩轂擊家々給す、管晏何ぞ過ぎん諸子の才。

○過一谷懷平源興亡事作歌

播之首。攝之尾。吾視其地何雄偉。山勢北來迫海壖。松柏露根亂蘆葦。怒潮淘沙出白骨。啼小鬼兮哭大鬼。聞說平氏曾簇赤旂。麗麗爲城澎湃爲溝。左控王畿右甸服。舊業自期唾手收。何料東人有機智。要害早已被躭視。九郎一身渾是膽。伏旗仆鼓出不意。蜀道雖難不用氈。懸崖絕壁如平





數十騎を以て魏の大軍に當る先主曰く子龍一身渾て是れ膽、と出不意孫子に出づ蜀道雖難不用氈魏の鄧艾蜀を攻むるや山を鑿ち路を通じ氈を以て自ら裹み搖轉して下る。蓋し蜀の地山嶽重疊道險を極む組練左傳に組甲三百皆練を被るとあり劃刀を以て物を斫るをいふ蹄間三尋眞是鹿日本外史に義經鷲尾經春に問うて曰く鵯越如何答へて曰く太だ險なり人馬行る可からず唯鹿のみ能く之を踰ゆと義經曰く鹿四足馬四足等しきのみ又蹄間三尋は一躍三間をいふ秦宮殿宇項羽咸湯に入つて秦の宮室を焚く義經亦火宮室を縱つてこれを打つ晉人爭舟指可掬左傳に晉と楚と邲に戰ふ晉軍令して曰く先づ濟る者賞あらんと

地組練劃山訝懸瀑蹄間三尋眞是鹿。秦宮殿宇從一炬。晉人爭舟指可掬。桓伊弄笛終貽禽劉混。嘯歌亦遭戮。勝敗有機少人知。繪畫徒傳娛。童兒一自貂蟬出。介冑上下文恬及武。熙豈知養虎自遺患。羽翼既成猶守雌。敢忘越人殺其父。白旄一出誰能支。宛如翡翠遇飢鷹。不怪毛血紛離披。獨有武州能捐軀。婦人群中見丈夫。吁乎諸君皆學之子。不將寶劒附天吳。

讀方 播の首、攝の尾、吾其地を視るに何ぞ雄偉なる、山勢北より來つて海壖に迫り、松柏根を露して蘆葦を亂す、怒潮沙を淘うて白骨を出し、小鬼は啼き大鬼は哭

中軍下軍舟を爭ふ舟中の指爲に掬すべし、とあり、一谷の敗戰には平軍舟を爭ひて逃れ、斷臂滿つ舟に 桓伊弄笛 晉の桓伊は笛の上手なり蓋し敦盛を指すなり 劉混嘯歌 劉混亦笛の名手なり前同斷 貂蟬 貂蟬は冠の飾にして其の材料を貂蟬より取るを以て名づく 文恬武熙 恬は安也熙は嬉に同じ天下太平を云 豈知養虎自遺患 漢書に張良漢王に謂つて曰く今楚を釋して擊たずんば是れ虎を養うて自ら患を遺すものなりと蓋し清盛の賴朝を放ちたるに比すべし 守雌 老子より出づ暫く雌服する 敢忘越人殺其父 呉王夫差讐を復せんと志すや出入人をして呼ばしめて曰く夫差越人の汝が父を殺せるを忘れたるか、と平家は源家が不倶戴天す、」聞說平氏曾て此に赤旂を簇むと、屋廐城を爲し澎湃溝を爲す、左に王畿を控え右には甸服、舊業自から期して手に唾し收むべし、」何ぞ料らん東人機智あり、要害早く已に眈視を被る、九郎の一身渾て是れ膽、旗を伏せ鼓を仆して不意に出づ、蜀道難しと雖も氈を用ぬず、懸崖絕壁平地の如し、」組綵山を劃して懸瀑か、と訝る、蹄間三尋眞に是れ鹿、秦宮の殿宇一炬に從ひ晉人舟を爭うて指掬す可し、桓伊笛を弄して終に禽を貽し、劉混嘯歌して亦戮に遭ふ、」勝敗機あり人の知る少なり、繪畫徒に傳へて童兒を娛ましむ。一たび貂蟬介冑を出してより、上下交恬乂武熙なり、豈知らんや虎を養うて自ら患を遺すを、羽翼已に成つて猶ほ雌を守るも、敢て忘れんや越人其の父を殺すを、白旄一たび出でゝ誰れか能く支へん、宛も翡翠飢鷹に遇ふが如





の仇なり。 離披 分散の貌 武州 武藏守平知章を云ふ平知盛の子なり一谷の敗に知盛敵の窮追する所となるや知章代つて之れに死す時に十七 婦人 宋の胡詮が語に「擧朝皆婦人」の語あり 天吳 山海經に天吳は水神にして虎身人面なり

【評】 茶山曰く、子成此の時十八九歲のみ命意用筆已に自ら獨り生面を開けるを此の如し、怪まず毛血紛として離披するを、獨り武州能く軀を捐つるあり、婦人群中丈夫を見る、吁乎諸君皆能く之の子に擧べ、寶劒を將つて天吳に附せず。

【註】 東海大魚 聖德太子讖文中の語北條高時を指す 鼇辰 屏風の如きもの天子諸侯を引見する時之を後にし立つ 鬼虺 虺は蛇に似て小なるもの也 妖氛 凶氣を氛といひ吉氣を祥といふ 哮闞 虎に似たるもの詩經に出づ、哮は大呼也

揮戈擬東海大魚奪鼇尾。蹴起黑波汗鼇辰。隱島風雲重慘毒。六十餘州總鬼虺。誰將隻手排妖氛。身當百萬哮闞群。揮戈擬回虞淵日。執弔同劉卽黑雲。關西自有男子在。東向寧爲降將軍。旋乾轉坤荅直遇。洒掃肇道迎鑾輅。論功雎陽最有力。謾稱李郭安天步。出將入相位未班。前狼後虎事復難。獻策帝闈不得達。決志軍務豈生還。且餘

回虞淵日　淮南子に魯陽公弓を援つて日を揮く日これが爲に反へること三舍、虞淵は日の沒する處なり

執弔同剿卽黑雲　齊の樂毅七十餘城を下す唯莒と卽墨と下らず、卽黑城中田單を推して將軍と爲す田單版弔を執つて士卒と功を分つ

關西自有男子在。東向寧爲降將軍　韋叔裕字は孝寬周に任へて驃騎將軍となる、齊の神武山東の衆を傾けて西に入らんと圖る、玉壁(地名)を以て衝と爲し先づ命じてこれを攻む(中略)孝寬曰く孝寬は關西男子なり必ず降將軍と爲らざるなり神武苦戰すること六旬

旋乾轉坤　宋の司馬光政の旋乾轉坤の功あるを稱す

輦道　宮中の道を輦道といふ

鑾輅　天子の乘御すべき大車なり輅音路

睢陽兒輩繼微志。全家血肉殲王事。非有南柯存舊根。偏安北闕向何地。攝山逶迤海水碧。吾來下馬兵庫驛。想見訣兒呼弟來戰此。刀折矢盡臣事畢。北向再拜天日陰。七生人間滅此賊。碧血痕化五百歲。茫々春蕪長大麥。君不見君臣相圖骨肉相呑。九葉十三世。何所存。何如忠臣孝子萃一門。萬世之下一片石。留無數英雄之淚痕。

(自註)東魏高歡大舉西下韋孝緩守玉壁禦之曰孝緩、關西男子決不爲降將軍也　古雖畿甸對東國則稱曰關西　公初策北條亦以東西智勇立論故用





唐の張延睢陽を守る食盡きて馬を食ふ四萬人僅に四百を餘す終に反する者なし　李郭李光弼並に郭子儀を云ふ唐室中興の功臣なり、蓋し新田足利二氏を指す

天步　詩經に天步艱難とあり

出將入相　唐の李逢吉出でゝは將入つては相たること二十四年なり

位未班　班は分也次也位未だ至らざるをいふ

前狼後虎　前門虎を拒ぎ後門狼を進む　朱舜水が楠子の墓碑にも此の語あり

帝閽　禮記に閽は門を守るの賤者　正字通には凡そ吏民闕に至つて自ら訴ふる者これを閽を叩くと云ふ、とあり帝閽の字は楊雄が甘泉の賦に出づ

決志軍務　杜子美の孔明詩中より出でたり

北向再拜　天祥刑に臨んで南を拜して死す、照應妙也

九

東海の大魚鬣尾を奮ふ、黑波を蹴起して齷齪を汙す、隱島の風雲重れて慘毒、六十餘州總て鬼怪、誰か隻手を將つて妖氛を排せん、身は當る百萬哮闞の群、戈を揮うて回さんと擬す虞淵の日、弔を執つて同じく剿つ卽墨の雲、關西自ら男子の在る有り、東向寧んぞ降將軍とならんや、」乾を旋し坤を轉じて直遇に答ふ、輦道を洒掃して鑾輅を迎ふ、功を論ずる睢陽最も力あり、謾に稱す李郭天步を安んずと、」出ては將入つては相位未だ班ならず、前狼後虎事復た難し、策を帝閽に獻じて達するを得ず、志を軍務に決ずる豈生還せんや、」且く兒輩を餘して微志を繼ぎ、全家の血肉王事に殲す、南柯舊根を存するあるに非ずんば、北闕を偏安して何の地に向はん。」攝の山逶迤として海水碧し、吾來つて下る兵庫の驛、想見す兒に訣れ弟を

葉十三冊 北條足利二氏を云

評 茶山曰く、余讀んで此に至り其の抑揚太だ過ぐるを言ふ、蓋其意は終に不レ服也

評 茶山曰く、讀み去つて自ら能く人を動かす

註 先王父 爾雅にいふ親父の考を王父と爲し父の母を王母といふ王者の如く之を尊ぶ也と 直系の祖父をいふ 彤日 祭日なり禮記に出づ 臘醉 祭酒をいふ也 金蘭 易經中の文字也親交ある友をいふ

呼び來つて此に戰ふを、刀折れ矢盡きて臣が事畢る、北に向ひ再拜すれば天日陰し、七たび人間に生れて此の賊を滅さん、碧血痕化す五百歳、茫々たる春蕪大麥より長し、」君見ずや君臣相圖り骨肉相呑むを、九葉十三世何の存する所ぞ、何ぞ如ん忠臣孝子一門に萃り、萬世の下一片の石、無數英雄の涙痕を留むるに。

○丁卯二月先王父彤日侍家翁會諸舊知言志

臘醉寒氣薄。春燭雨聲多。金蘭同几席。桑梓邈山河。祖風賴無墜。父執亦匪他。侍飲何吾忘。其如宵短何

讀方 臘醉寒氣薄く、春燭雨聲多し、金蘭几席を





桑梓 字典に桑梓は父の樹うる所也と 詩經に維れ桑維れ梓、必ず恭敬にして止むと、故郷の地をいふ

註 丁卯書事 文化四年露西亞人蝦夷地方を掠む、初め露西亞の使節長崎に來つて通商を乞ふ許されず使節レサノフトこれを憤り自殺す其の從者ボシトウ怒つて蝦夷地方を擾す 水潦 水たまり 宣房誰識福將殃 漢武帝元光元年、河、瓠子に決潰す天子河に臨んで玉璧を沈め群臣薪を負うて河を塞ぎ宮を其上に築いで宣房と名け瓠子の歌なるものを作つて曰く、宣房塞がつて萬福來る。と、文化丁卯江戸の永代橋墜落して溺死者數百名を出す 玉關符節謝西域 漢の光武帝符節を發し玉關を閉

同うし、桑梓山河邈かなり、祖風賴に墜すなく、父執亦他に匪ず、侍飲して吾倦を忘る、其宵短を如何せん

○丁卯書事

淫雨連旬水潦漲。宣房誰識福將殃。玉關符節謝西域。紫塞版圖通朔方。已睹夷吾羅價平。還聞吉甫啓戎行。幾家閨婦遲邊報。唯願不追薇蕨剛。

讀方 淫雨連旬水潦漲る、宣房誰か知らん福將に殃ならんとするを、玉關の符節西域を謝し、紫塞の版圖朔方に通ず、已に睹る夷吾羅價を平かにするを還た聞く吉甫戎行を啓くを、幾家の閨婦邊報を遲とす、唯願ふ薇蕨の剛に追ばざるを。

ぢて西域を謝す。鎖國攘夷をいふ　紫塞版圖通朔方　紫塞は支那北方の地名、蓋し蝦夷開墾のことをいふなり　已睹夷吾平糴價　管子に見ゆ、凡そ國君の穀を蓄ふ餘りあらば之を輕うし民足れば之を重う〻米價をして常に平かならしむ蓋し當時の執政亦此の事ありしをいふ　還聞吉甫啓戎行　周の宣王吉甫にたしむ、時人六月章なるものを作つて之を美めて曰く「元戎十乘以て先つ行を啓く」と、蓋し間宮倫宗の輩を指せるものなり　唯願不逆薇蕨剛　文王の時西、昆夷の患あり北、玁狁の難あり此時北征に就くものを遣るに菜薇の歌を以てす

評　茶山曰く、十二首題して小日本史といふべし胸に全史を羅するものに非ずんば誰か能くこれを爲さん、他日刪修の基已に此に成る。

註　鞏爵　左傳鄭伯の故事より出づ　鞏は鑑を以て飾と爲せる帶なり、爵は飲酒の器なり、蓋し此一句武臣を見ること艸芥の如く功あるも賞を行はざるをいふ也　棣蕚　詩經に出づ　黍離同上　江左衣冠誰仲父　晉の相彝亂を避けて江を過ぐ元帝の微弱なるを見之を憂ふ既にして王導に見え曰く江左に夷吾あり吾憂ふる所なしと　河陽弓矢幾文公　晉文公曾て城濮に在るや周王此に幸して彤弓を賜ふ、我國應永年中後小松院足利氏の第に幸し、後陽成帝豐臣氏の聚樂第に幸する　姬姜　晉と周とは共に姬姓也の類を指す　而して齊は姜姓也即ち齊と晉と

## ○詠史十二首

### 其一

鞏爵匆々酬武功。戰塵數到紫宸宮。一從棣蕚衰周德。終使黍離入國風。江左衣冠誰仲父。河陽弓矢幾文公。姬姜迭起還陳迹。到底韓梁交競雄。

讀方　鞏爵匆々武功に酬ゆ、戰塵數しば到る紫宸宮一たび棣蕚周德を衰へしめてより、終に黍離をして國風に入らしむ、江左の衣冠誰か仲父、河陽の弓矢幾文公、姬姜迭に起つて還陳迹、到底韓梁交も雄を競ふ



### 其二

復讐九世亦徒爲。業就磨崖未勒碑。衰職豈無周仲甫。簧言獨患晉驪姬。蠅叢半壁開天日。劒璽三朝離國時。不憾陳生謬順逆。紫蠅夙有彥威知。

讀方　復讐九世亦徒爲、業就つて磨崖功未だ碑に勒せず、衰職豈周の仲甫なからんや、簧言獨り患ふ晉の驪姬、蠅叢半壁天を開くの日、劒璽三朝國を離るるの時、憾みず陳生順逆を謬るを、紫蠅夙に彥知の知るあり。

### 其三

白旄拔拂九重雲。初見武人爲大君。修怨能除僧相國。貽謀豈料尼將軍。五蛇求穴艱虞定。三馬同槽威柄分。休道荀生扶二

を以て源平韓梁韓は趙を、梁は魏をいふ趙魏晋を三分して諸侯と爲る盖し織田朝倉の類也

評 茶山曰く、此種の詩今の時に在つて和する者誰か在らん謂ゆる時に英雄なく豎子をして名を成さしむる者なり

註 復讐九世齊の襄公祀を滅して九世の仇を復す磨崖唐の肅宗安祿山の亂を平け碑を磨崖に立て以て中興の功を記す盖し建武の中興に比すべし衰職豈無周仲甫衰職に闕あらば仲山甫これを補ふ衰職は天子の職をいふなり簧言獨患晋驪姬詩の小雅にいふ巧言簧の如し、と簧は笙中の舌也、晋の驪姫は献公の寵を得て太子申生を潛殺

姓削平誰得競元勳。

讀方 白旄披拂す九重の雲、初めて見る武人大君と爲るを、怨を修めて能く除く僧相國、謀を貽して豈料らんや尼將軍、五蛇穴を求めて艱虞定り、三馬槽を同うして威柄分る、道を休めよ苟生二姓を扶くるを、削平誰か元勳に競ふを得ん。

## 其四

戢翼翻然飽且颺。分明後虎與前狼。曹袁跋扈終無漢。朱李爭衡豈爲唐。要路盡歸三管領。中原暫見兩天王。堪知繁實披枝幹。大樹何能棲鳳凰。

讀方 翼を戢めて翻然飽き且つ颺る、分明す後虎と前





す、盖し藤原三位妃、大蠶叢成都記に蠶叢は蜀の始祖をいふ盖し北朝を指す三朝後村上帝、長慶帝、後龜山帝をいふ、此句北朝と和して神器を北朝に傳へたるをいふ也陳生陳壽三國志を作つて魏を以て正統と爲す紫蠅夙有彥威知蠅は繩の誤字なり紫色繩聲の熟字にして律呂の音に中らざる聲也、盖し北朝の正統ならざるをいふ又彥威は晋漢春秋なるものを作つて以て蜀漢を正統と爲せり。盖し源親房卿を指せるもの

注意 南朝を詠ぜるなり

註 武人爲大君易の語也字義分明盖し覇府の創設を指せるもの也五蛇求穴晋文公亡命より歸るに及んで從亡者狐偃外三人の者を賞して介狐と、曹猿跋扈して終に漢無く、朱李爭衡す豈唐の爲ならんや、要路盡く歸す三管領、中原暫く見る兩天王、知るべし繁實枝幹を披くを、大樹何ぞ能く鳳凰を棲ましめん。

## 其五

左將忠貞天地知。曾沈寶劍感憑夷。軍中一范驚賊膽。河北二顏連義旗。誰道晋藩無亞子。人傳楚帳有虞姬。太原遺孽雖凋落。華冑遙々久益滋。

讀方 左將の忠貞天地知る、曾て寶劍を沈めて憑夷を感ぜしむ、軍中の一范賊膽を驚かし、河北の二顏義旗を連ぬ 誰か道ふ晋藩亞子無しと、人は傳ふ楚帳虞

子推に及ばず、子推の從者書を宮門に懸けて曰く「龍天に上らんと欲し、五蛇輔けを爲す、龍已に天に上つて四蛇名其の字に入る」と、蓋し三浦、北條、和田、佐々木土肥の徒をいふ

三馬 魏志にいふ魏武三馬一槽に食むと夢みそれを惡む、と、蓋し時政義時、泰時をいふ也 荀生 荀文若は素と漢臣にして曹操の謀主と爲る。大江廣元、王室の臣にして賴朝を輔くるをいふ也

**注意** 源氏を咏ぜる也

**註** 戢翼翻然飽旦颺 呂布傳の語也、蓋し尊氏禍心を藏して暫く王事に盡し且つ人心收攬に努めて終に事を擧げたるをいふ也 曹猿 曹操及び袁紹を云 跋扈 はびこりはびこるをいふ猶ほ跳梁の如し

朱李 朱全忠、李克用をいふ朱全忠は元と黄巢の將なり

姬ありと、太原の遺孽凋落すと雖も、華胄遙々久しく益ます滋る。

## 其六

霸庭綱弛四輿戎。便見人豪起海東。地按故資撫背脊。書諳上略攬英雄。八州驍尻歸兵籍。五世咆濡繩祖功。末路尙知士心屬孤城半歲費環攻。

**讀方** 霸庭綱弛んで四に戎を輿す、便ち見る人豪海東に起るを、地は故資を按じて背脊を撫し、書は上略を諳じて英雄を攬る、八州の驍尻兵籍に歸し、五世の咆濡祖功を繩ぐ、末路尙ほ知る士心の屬するを、孤城半歲環攻を費す。





しも唐に降つて大に賞を被る事頗る足利高氏と相以たり、蓋し朱李は足利新田二氏を指す 爭衡 衡は車上の横木にして相對せり蓋し足利新田の相下らざるを指し且つ王室の爲ならざるをいふ 三管領 義滿の定むる所にして斯波、細川、畠山三氏也 繁實披枝幹 史記范雎傳に「木實繁なる者其の枝を披く其の枝を披くもの其の心を傷ふ、其の都を大にするも其の國を危うし、其の臣を尊ぶも其の主を卑うす」と、蓋し足利氏の麾下冨强にして遂に尾大不掉の禍を致すを云

**注意** 足利氏を咏す

**註** 曾沈寶劒感憑夷 憑夷は水神也、義貞（左近衛中將）稻村ヶ崎に至り刀を海に投じて龍神に祈る、是の夕潮退くこと數里なり 軍中

## 其七

兵機在握制常蛇。衛輒雄豪勝阿爺。弛備蔡城乘夜雪。壓軍楚陣辨晨霞。誰屠豚犬塗肝腦。共苦豺狼橫吻牙。蕭老一生甘殺戮。捨身卻怪著袈裟。

**讀方** 兵機握に在り常蛇を制す、衛輒の雄豪阿爺に勝る、備を弛めて蔡城夜雪に乘じ、軍を壓して楚陣晨霞を辨ず、誰か豚犬を屠つて肝腦塗れん、共に苦む豺狼吻牙を橫ふを、蕭老一生殺戮を甘んず、捨身却つて怪む袈裟を着するを。

## 其八

不怪兵鋒獨出群。夙將韜略代瓊葷。碧蹄

一 范 宋の范中淹攻び韓埼、西夏を防ぐ 人謠うて曰く「軍中一韓あり、西賊これを聞いて心膽寒し、軍中一范あり西賊これを聞いて膽を驚破す」と、河北二顏 顏眞卿 顏果卿をいふ 亞子 晉王李克用の子、存勗の小字を亞子といふ、日本外史の論贊に曰く「新田足利の兵爭は李朱の唐季に於けるが如し、義貞の忠勇克用に勝つて義興等の英邁存勗に讓らず」と 楚帳有虞姬 楚の項羽璧姬虞姬を蓄ふ、義貞に亦勾當內侍あり 太原遺孽 李亞子梁の兵を三乘岡に破る朱全忠慚憤して曰く「我天下を經營すること三十年意はざりき太原の遺孽更に昌熾なること此の如し」と孽は俗にいふひこばえなり。 遙々華胄 梁の河昌寓の故事より出づ、蓋し德川氏を指す、德川は親田の蹂躪八州草。白羽指揮三越雲。橫槊繁霜秋滿陣。銜枚大霧曉藏軍。稜々俠骨高千古。老賊齊名長惜君。

**讀方** 怪まず兵鋒獨り群を出るを、夙に韜畧を將て糧葦に代ふ、碧蹄蹂躪す八州の草、白羽指揮す三越の雲、槊を橫へて繁霜秋陣に滿ち、枚を銜んで大霧曉に軍を藏す、稜々たる俠骨千古に高し、老賊名を齊うして長く君を惜む。

其九

果識名門出。俊英。十州豪傑避。旗旌。憑雲。樓櫓懸。高鳥。破浪戈鋋斬。老鯨。千里覇圖同。大帝。二兒將略竝長城。可憐孫皓不量。





一族なることいふまでもなし

**註** 覇庭綱弛 庭は廷也、綱は綱の繩也、足利氏の威勢地に落ち綱紀弛みたるをいふ 人豪 陳餘傳に曰く「此の時に在つて封侯の業を成さゞるものは人豪に非ざる也」と、後北條氏關東に起りたるをいふ 地按 地山を被り河を帶ぶ、四塞以て固し、卒然として急あらば百萬の衆具すべき也周の故資に因つて甚だ美に、此の處天府といふべき也」と、又「此れ天下の胸を扼して其の背を撫する也」と蓋し資は材資也 書譜上略 按は據なり

攬英雄 北條早雲曾て一儒士を召して黃石公の三略を說かしむ、其の首に言へるあり「主將の法務めて英雄の心を攬るに在り」と、早雲これを聽いて曰く「止めよ、吾既に之れ力欲向中原謀抗衡。

**讀方** 果して識る名門俊英を出すを、十州の豪傑旗旌を避く、雲に憑る樓櫓高鳥懸り、浪を破る戈鋋老鯨を斬る、千里の覇圖大帝に同じく、二兒の將畧長城に竝ぶ、憐むべし孫皓力を量らず、中原に向つて抗衡を謀らんと欲す。

其十

蚌鷸竟歸漁父收。屠牛順理識才優。久聞帶甲滿天地。始見衣冠拜冕旒。齊國規模開後覇。陳王將師盡諸侯。不終志業知誰罪。遺恨君無忘射鉤。

**讀方** 蚌鷸竟に歸す漁父の收むるに、屠牛理に順うて

を得たり」と、外史に見ゆ。**五世**長氏、氏綱、氏康、氏政、氏直の五世凡そ九十餘年也。**呴濡**莊子天運篇に曰く「魚相ひ呴濡して以て濕す」と。呴は吐沫なり、蓋し相倚り相助くる也。**繩祖功**詩經に「其の祖武を繩ぐ」と、註に繩は約なりとあり。**孤城半歲費環攻**「孟子の字也、外史の論贊に「豊臣太閤不世出の略を以て往いて其の罪を問ふや其の勢力以て天地を震撼するに足る而して合圍半歲にして能くこれを舉ぐるもの父祖の人心を收攬し固結解く可らざるものあるに非ざらんや云々」と、あり

**註** **常蛇**常山の蛇なり。ふ孫子に出づ。**衛輙**衛の蒯聵南子を殺さんと欲す果さずして出奔す靈公終に聵の子輙を立つ、蒯聵歸る、輙父を拒む、父子相攻むること廿年、信玄其父信虎を逐ふ事と相似たり

才の優れたるを識る、久しく聞く帶甲天地に滿つるを始めて見る衣冠晃旒を拜するを、齊國の規模後霸を開き、陳王の將師盡く諸侯、志業を終らざる知る誰の罪ぞ、遺恨君射鉤を忘るゝ無れ。

## 其十一

蜻洲在手打爲丸黃鉞東西試錯蟠漢將猶存奴僕面楚人誰道沐猴冠亂窮草莽英雄起志大夷蠻肝膽寒二世休嗤秦業短混同六國太艱難

**讀方** 蜻洲手に在り打つて丸と爲す、黃鉞東西錯蟠に試む、漢將猶ほ存す奴僕の面、楚人誰れか道ふ沐猴の冠、亂窮草莽英雄起り志大にして





**蔡城**唐の李愬雪夜に乘じて蔡城を拔く、蓋し信玄海口城の役に比す。**豚犬**信長勝賴を殺せるに比す。ふ曹操曰く「劉景升の兒子は豚天耳」と。**豺狼**信玄今川氏眞の國を奪はんと欲す北條氏政これを聞き怒つて曰く「信玄利を視て親か滅すこれ豺狼なり」と、**蕭老**梁武帝晩年佛道に溺れて凡そ三たび身を捨つ

**注意** 武田信玄を詠す

**註** **韜略**六韜三略 **羶葷**羶は羊の臭也葷は蔥等の葷類也 謙信佛を信じ終身戒律を持せるをいふなり **橫槊**謙信七尾城を拔き詩を作る中に「霜は陣營に滿ちて秋氣清し」の歌字あり **曉蘸**軍川中島の役大霧の中に軍を藏して遂に信玄を破りこれを傷く **俠骨**謙信村上義清、上杉憲政等を庇ひたるは彼の俠に出でたり

夷蠻肝膽寒し、二世嗤ふな休めよ秦業の短きを、六國を混同するは太だ艱難。

## 其十二

群雄逐鹿設爭先。誰識驅除開大賢。晉國霸圖一戰。漢家號令出三壇。建纛基跡橫槊，地。拜胙違顏咫尺天。奕葉驩虞寧有限。金城春暖鬱祥烟。

**讀方** 群雄鹿を逐うて設に先を爭ふ、誰か知らん驅除大賢を開くを、晉國の霸圖一戰に由り、漢家の號令三壇に出づ、建纛跡を基にす尋常の地、拜胙顏を違る咫尺の天、奕葉驩虞寧んぞ限有らんや、金城の春暖祥烟鬱たり。

註 十州 周、長、石、二備、藝、因、雲、伯、隱の十ケ國也 憑雲樓 櫓雲州富田城の事をいふ、雲は雲州也 縣高島 高島は大敵をいふ也韓信傳に「高島盡く良弓を藏す」とあり 破浪戈鋋 斬老鯨 陶晴賢を嚴島に滅し單、小矛をいふ、老鯨は兇賊をいふ左傳に見えたり 大帝吳の孫堅をいふ也 二兒 小早川隆景 吉川春元 竝長城 宋の檀道濟の語也雄偉なるをいふ 孫皓不量力 孫皓は孫堅の子 毛利輝元を指す、尙ほ中原に向つて織田氏と爭ひ、關ケ原の役石田に左袒して封を削られたるをいふ

註 蚌鷸 戰國策に出づ何人も熟知すればこれを省く 順理 骨節を避くるをいふ、信長の經國に比す

庚午 三十一歲出寓備後

○始寓廉塾二首

誰道功名與志違。蕭然行李人黃薇。好爵難摩蒲柳質。閑身學製萍蘿衣。南郡青衿新麗澤。青山白雲舊恩輝。獨有庭闈最關意。夕陽凝望斷雲飛。

讀方 誰か道ふ功名志と違ふと、蕭然として行李黃薇に入る、好爵摩し難し蒲柳の質、閑身製を學ぶ萍蘿の衣、南郡の青衿新麗澤、青山の白雲舊恩輝、獨り庭闈最も意に關するあり、夕陽望を凝せば斷雲飛ぶ。

萬里江湖宿志存。身如病鶴脫籠樊。回頭





帶甲滿天地 杜甫の句 衣冠拜冕旒 王維の句なり 齊國規模開後覇 齊桓公周室を翼戴し令を諸侯に下す後覇これに倣ふ說文に規模は法也と 陳王 陳涉傳に曰く陳涉已に死すと雖も置く所の侯王將相を遣はし秦を滅す蓋し織田氏を以て陳涉に比し豐德二氏を以て楚漢に比す 射鉤 管仲桓公を射て鉤に中つ鉤は帶鉤也、管仲桓公に謂つて曰く「願くば君鉤を射るを忘るゝ勿れ、臣は檻車を忘るゝなけん」と、

註 黃鉞 書經牧誓に曰く左に黃鉞を杖つくと、蓋し斧の一種也 錯蟠 錯節蟠根をいふなり 漢將猶存奴僕面 前漢の衛青字は仲卿嘗て從うて甘泉に至る一鉗徒あり青を相して曰く貴人也官封侯に至らんと、青笑うて曰く人奴の生鞭

故國白雲下。寄迹夕陽黃葉村。絃誦幾時從父執。煙霞到處總君恩。廿年無事酬溫飽。深愧相知嗤犬豚。

讀方 萬里江湖宿志存す、身は病鶴の籠樊を脫せるが如し、頭を回す故國白雲の下、迹を寄す夕陽黃葉の村、絃誦幾時か父執に從はん、煙霞到る處總て君恩、廿年事の溫飽に酬ゆるなし、深く愧づ相知犬豚を嗤ふを。

○畫龜

既無神異智。豈近廟廊尊。曳尾吾生足。深泥亦國恩。

讀方 既に神異智なし、豈廟廊の尊に近かんや、尾を曳

罵さる無きを得ば足れり、安んぞ封侯の事を得んや、と元光六年車騎將軍となる楚人誰道沐猴冠項羽傳中の語也豐公の猿面冠者なりしをいふ混同統一の意味也

註 逐鹿漢書に曰ふ秦其の鹿を失ひて天下共に逐ふ、と鹿は帝位也晉國覇圖由一戰一圖は謀略也晉文城濮の役に關ヶ原の一戰して天下に覇たり以て役に喩ふ漢家號令出三嬗漢家五年の間號令三嬗を爲す嬗は禪と同じ而して亦三嬗を爲せるに喩ふ建櫜干戈を包むに虎皮を以てする者を建櫜といふ織田、豐臣、德川とこれ

注意 德川氏を詠す

註 廉塾菅茶山翁の私塾備後に在り好爵いて吾が生足る、深泥亦國恩。

○畫鶴

解籠知君意乘軒非我榮雖隨野雲住猶和在陰聲。

讀方 籠を解き君が意を知る、軒に乘ずるは我が榮に非ず、野雲に隨うて住すと雖も、猶ほ陰に在るの聲に和す。

○畫蘭

頑石足吾朋深林得吾所怕附君子腰周旋觸尊俎。

讀方 頑君子の腰に附して、周旋尊俎に觸るゝを怕る。吾が朋とするに足る、深林吾が所を得たり





易に「我に好爵あり」とあり爵位なり茶山翁嘗て山陽を福山侯に薦む山陽書を作つてこれを辭す南郡青衿漢馬融傳に曰く「南郡の大守と爲り從つて學ぶ者甚だ多し」と、青衿は青領にして書生の服也麗澤朋友相講習するを麗澤といふ易に見ゆ

註 宿志存多年の志にして此の處天下漫遊の志を多年抱持せるをいふなり籠樊樊は籠也籠愛の籠より脫し夕陽黃葉村廉塾所在たること茶山翁の名づけたる者、の村に茶山翁の詩集「夕陽黃陽村舍詩集」あり犬豚前に出づ不肖の兒をいふ

註 神異智莊子に出づ「龜の異知七十二鑽を能くして遺策なく刳腸の患を避くる能はず」と

註 乘軒左傳に衛の懿公鶴を好む鶴軒に乘ずる

○讀鄭延平傳

九土茫々誰丈夫何圖萬火出東隅公卿爭下穹廬拜節義翻歸鱗介徒孤島魚鹽新版籍一家冠帶舊唐虞英魂千載游桑梓可問楠公父子無。 鱗介徒王士正斥我邦人語

讀方 九土茫々誰か丈夫、何ぞ圖らん萬火東隅に出づるを、公卿爭うて下ろ穹廬の拜、節義翻つて歸すれば、孤島の魚鹽新版籍、一家の冠帶舊唐虞、鱗介の徒、英魂千載桑梓に游び、楠公父子を問ふ可きや無や。

○龍谷五百年周忌僧意戒爲索題詠至余以二十字塞責

ものあり、軒は車也　野雲僧貫休の鐵鏐に答ふる語に「閑雲孤鶴何れの天ぞ在陰易飛ぶ可らざん」と、云ふ「鳴鶴陰に在り其子これに和す」と

註 君子腰 楚辭に秋蘭を組み以て佩と爲す

評 茶山曰く、傑作

註 鄭延平 鄭成功父は鄭芝龍明末の人亂を避けて我平戸に在るや邦人某の女を娶つて成功を產む、生れて穎異才氣人に絕す後明に歸り恢腹を圖りしも大功果さず臺灣に據る 九土茫々 左傳に「茫々たる禹跡畫して九州と爲る」 萬火 延平傳に曰く成功生るゝの夕島中萬火明かなり」と 穹廬 匈奴傳註に云ふ穹廬は旃帳なり其の形穹廬故に穹廬と云、穹廬拜の三字は胡濟庵の上書中

鎌倉付麋鹿。室府委灰塵。一姓優婆塞。還傳五百春。

讀方 鎌倉麋鹿に付し、室府灰塵に委す、一姓の優婆塞、還て傳ふ五百春。

○題社日圖

社鼓聲喧戰鼓收。枌榆不復佩耕牛。幾家子弟齊扶醉。若箇當年曲逆侯。

讀方 社鼓聲喧うして戰鼓收る、枌榆復た耕牛を佩びず、幾家の子弟齊しく醉を扶く、若箇か當年の曲逆侯。

○林逋圖

澶淵萬馬鬪塵埃。埃點何曾到我梅。愛個





に見ゆ 孤島 臺灣島をいふ 一家冠帶舊唐虞 明亡んで後全國辮髮に變ぜしも鄭一家は冠服を改めず 楠公父子 成功の子孫一門の忠勇楠公父子に似たり

註 龍谷 大谷、僧親鸞の墓地あり意戒は讃岐の人なり 付麋鹿 伍子胥の吳王を諫むるの語也 優婆塞 俗に在りて佛門に入れる男子をいふ

注意 一向宗を以て優婆塞に比す嘲笑の意味ふべし

註 枌榆 漢の高祖少時枌榆の社を祭る後新豐に移して亦これを立つ枌榆は鄉名也 曲逆侯 陳平傳に曰く里中社の宰と爲り肉を割くこと甚だ均し後陳平曲逆侯に封ぜらる

評 茶山曰く、此れ自ら子成の勝れる處然れども數ば見て

落梅香滿地。也勝燭淚積成堆。

讀方 澶淵の萬馬塵埃鬪し、埃點何ぞ曾て我が梅に到らん、愛す個の落梅香地に滿つるを、也た勝る燭淚積んで堆を成すに。

○題李白醉圖

盧嶽雲松未可攀。桃花何處問仙寰。長安市上一杯裡。別有天地非人間。

讀方 盧嶽雲松未だ攀づべからず、桃花何の處か仙寰を問はん、長安市上一杯の裡、別に天地人間に非ざるあり。

○廉塾雜詩

紙上功名添足蛇。漫追老圃學桑麻。野橋

人或は以て恒と爲さん

**註** 林逋 宋、眞宗の時の人林和靖名は逋榮利を好まず廬を西湖の孤山に結び梅三百株を植う 澶淵 萬馬宋眞宗の時契丹入寇し中外震駭す寇準親征の議を定めて帝に勸む帝河を渡つて澶州に至り北城に登り黃幟を張り諸軍萬歲を呼ぶ契丹氣奪はる 也勝燭淚 積成堆 歸田錄に云ふ寇準少うして油を點ぜず厠溷の間と雖も燭淚堆を成す、と

**註** 林和靖と寇準の優劣論と見て可なり

**註** 廬嶽雲松未可攀 李白廬山に起臥するや永王燐迫つて之を叛に誘ふ燐敗れ白も亦坐して獄に繫がれて夜郎に流さる 桃花何處問仙寰 李白の詩に曰ふ桃花流水杳然と分徑斜通市村塾臨流別作家讀授兒童遇生字行沿離落見狂花笑吾故態終無已時復談兵畫白沙

**讀方** 紙上の功名足蛇を添へ、漫に老圃を追うて桑麻を學ぶ、野橋徑を分つて斜に市に通じ、村塾流に臨んで別に家を作す、讀んで兒童に授けて生字に遇ひ、行ゆく離落に沿うて狂花を見る、笑ふ吾が故態終に已む無きを、時に復た兵を談じて白沙に畫く。

辛未以下皆入京後作

○書懷

青雲夙識路程通萬里翻思破浪風非是胡驄待銜勒誰敎野鶴苦樊籠辱知難副





して去る、別に天地人間に非ざるあり」と、

**註** 添足蛇 戰國策に曰く、蛇本足無し蛇を作つて足を畫く」と 老圃論語の字 狂花桃李冬に開くを狂花といふと東坡の詩註に見ゆ

**註** 山陽時に三十二歲なり

**評** 茶山曰く、此を捨て彼を取る亦凡人に非ず

**註** 破浪風 宋懿曰く「願くは長風に乘じて萬里の浪を破らん」と 胡驄 胡青驄をいふ杜甫の詩に安西の都護胡青驄」と、註に馬は大宛の產を以て良と爲す故に胡青驄と、且つ馬は青白也 孔融薦 稱衡始め弱冠なりし時孔融其の才を愛して上表これを薦む、茶山の山陽を薦めたるは前記の如し

孔融薦。去國聊期王蠋忠。絕粒鳴珂兩未遂。人間無地吐長虹。

**讀方** 青雲夙に識る路程の通ずるを、萬里翻つて思ふ破浪の風、是れ胡驄銜勒を待つに非ず、誰か野鶴をして樊籠に苦しむる、辱知副ひ難し孔融の薦去國聊か期す王蠋の忠、絕粒鳴珂兩ながら未だ遂げずんば、人間地に長虹を吐く無れ。

○集唐句送木村生入京時余亦將追遊

毎依北斗望京華。獨自狂夫不憶家。他日期君何處是。宮前楊柳寺前花。

**讀方** 毎に北斗に依つて京華を望む、獨自の狂夫家を

王蠋忠 史記燕人齊に入る將に王蠋を封ず、蠋曰く「忠臣二君に仕へず烈婦二夫に見えず」云々 鳴珂 珂は佩玉也唐詩に「鳴珂明庭に奉ず」と 長虹 長虹は豪氣を吐いて長虹の如きをいふ也

註 每依北斗望京華
獨自狂夫不憶家 劉禹錫の詩句 他日期君何處是 盧同の句 宮前楊柳寺前花 王建の句

注意 唐句を集めて絶句を作したるものなり

註 瓢蓬 風に漂ふ蓬の如く所定めぬ旅をいふ

註 歌神詞 明石に在る人丸神社をいふ

解 茶山曰く好竹枝

憶はず、他日君に期す何の處か是なる、宮前の楊柳寺前の花。

○播州

自寓三薇歲已周、瓢蓬又作五畿遊。行行自覺鄉關遠、背指無山不播州。

讀方 三薇に寓してより歲已に周る、瓢蓬又た五畿の遊を作す、行行自ら覺ゆ鄉關の遠きを、背指すれば山として播州ならざるは無し。

○又

歌神祠外起朝烟。舞妓灣頭酒如泉。借問行人何有急、欲乘兵庫一番船。

讀方 歌神祠外朝烟起る、舞妓灣頭酒泉の如し、





註 青溪 苔の生じたる溪 迢々 廣く遙なる貌也

註 女伴 女連れの客

借問す行人何の急あつて、乘らんと欲す兵庫一番船

○遊嵐山二首

青溪一曲水迢迢。夾水櫻花影亦嬌。桂楫誰家貴公子。落紅深處坐吹簫。

讀方 青溪一曲水迢迢、水を夾さんで櫻花影亦嬌たり、桂楫誰が家の貴公子ぞ、落紅深き處坐して簫を吹く。

春風吹雨過西溪。溪上遊人路欲迷。女伴相呼聯袂去。紅裙半濕落花泥。

讀方 春風雨を吹いて西溪を過ぐ、溪上の遊人路迷はんと欲す、女伴相呼び袂を聯れて去る、紅裙半ば濕ふ落花の泥。

茶山曰く、亦好竹枝

註 姚魏 西京雜記に曰く、花の奇なる者姚家に黄牡丹あり魏家に紫牡丹あり 霜縑 白の絹地

第二橋東雨後泥。村園門巷路東西。遇人休問南禪寺。一帶青松路不迷。

○遊南禪寺

讀方 第二橋東雨後の泥、村園門巷路東西、人に遇うて問ふを休めよ南禪寺、一帶の青松路迷はず。

京洛春風常掩關。不從姚魏醉彫欄。秋燈半壁蕭齋夜。翻向霜縑看牡丹。

○題畫牡丹

讀方 京洛の春風常に關を掩ふ、姚魏に從うて彫欄に醉はず、秋燈半壁蕭齋の夜、翻つて霜縑に向つて牡丹を看る。

○書懷





註 吳吟 陳軫の故事、戰國策より出づ 蒼茫 蒼茫に種々の義あり杜甫北征の詩に「杜子將に北征せんとす。蒼茫家屋を問ふ」とあり、註に蒼茫は倉皇の貌と記されたる其の一例 鵬程 莊子逍遙遊篇に鵬の南溟に移るや水擊三千里扶搖を擊つて上ること九萬里、去つて六月を以て息ふものなり、 馬骨 戰國策に出づ郭隗燕の昭王とありに見えたる時の語なり 結草 左傳魏顆の故事暫つて恩を報ずるをいふ

病夫誰爲作吳吟。陋巷秋風蓬藋深。孤燈依約思鄉夢。一劍蒼茫報國心。謾道鵬程休六月。詎論馬骨直千金。聊取文章當結草。効身未必在華簪。

讀方 病夫誰が爲に吳吟を作らん、陋巷の秋風蓬藋深し、孤燈依約思鄉の夢、一劍蒼茫報國の心、漫に道ふ鵬程六月に休むと、詎ぞ論ぜん馬骨千金を直すと聊か文章を取つて結草に當つ、身を効す未だ必しも華簪に在らず。

○歲暮

一出鄉關歲再除。慈親消息定如何。京城風雪無人伴。獨剔寒燈夜讀書。

注意　山陽時に三十三歳なり

註　朝正　左傳に昔諸侯正に王に朝す、とあり註に朝して其の政教を受くるなり、と　席門　陳平傳に席を以て門と爲す

註　雄飛　後漢張温の語也　碧條絲

讀方　一たび鄉關を出で、歳再び除なり、慈親の消息定めて如何、京城の風雪人の伴ふ無し、獨り寒燈を剔つて夜る書を讀む。

壬申

○元日

九街雞鳴瑞氣新。簪笏朝正簇紫宸。誰識席門高臥士。木綿衾裡亦生春。

讀方　九街の雞鳴瑞氣新なり、簪笏正に朝して紫宸に簇る、誰か識らん席門高臥の士、木綿衾裡亦春を生ずるを。

○畫鷹

秋空那處不雄飛。食有霜禽棲有枝。何事侯門謀一飽。託身三尺碧條絲。





青色の紐なり

註　梅兒　梅若の塚　翠幰　盧照隣の長安古意「遙々たる翠幰金堤に沒す」とあり、註に金堤は堅きこと金の如きを言ひ、幰は車の幌也、とあり

讀方　秋空に枝あり、何事ぞ侯門一飽を謀つて、身を託す三尺の碧條絲。

○題墨水冶春圖

梅兒塚外綺羅多。細雨輕塵半是花。別有紅粧圍翠幰。金堤擁出一團霞。

讀方　梅兒塚外綺羅多し、細雨輕塵半ば是れ花、別に紅粧翠幰を圍むあり、金堤擁出す一團の霞。

註　東征　小田原の役を指す、蓋し豐家の盛此の時

○伏水桃山

萬樹桃花映碧流。豐家誰認舊金甌。春風

に至つて極まる　放牛　周の武王殷を滅すや牛を桃林の野に放ち天下に武を用ゐざるを示す　舊金甌前に記せり

註　嬌紅媚綠　紅花綠葉なり、人の來嫵むを待つと也

註　絡繹　人馬の連續織るが如きをいふ

曾返東征旆。遺恨無人敎放牛。

讀方　萬樹の桃花碧流に映ず、豐家誰か認む舊金甌、春風曾て返す東征の旆、遺恨人をして牛を放たしむる無れ。

○題自畫枯木竹石時三月下旬也

羅綺輕塵漲九衢。嬌紅媚綠待嬉娛。先生閉戶閑磨墨。却畫寒林枯木圖。

讀方　羅綺輕塵九衢に漲る、嬌紅媚綠嬉娛を待つ、先生戶を閉ち閑に墨を磨し、却て畫く寒林枯木の圖。

○梅雨憶鄉

滿巷深泥雨乍晴。輪蹄絡繹過門行。故園





註　群馬蕭々跡欲無　晉の姓司馬隆安義熙の際に至り國運大に衰ふ宋の劉裕微賤より起つて禪を受く　寄奴　劉裕の小字寄奴又草名

讀方　淵明は晉の臣なるを以て宋に仕へず、彼の荒園掌大の地こそ晉、版圖なれといふの意味なり、又　元の劉因の詩に淵明豪氣昔未レ除、翹ニ翔八表ニ凌ニ天衢ニ歸來荒徑手自鋤、草中恐生ニ劉寄奴ニ とあり、山陽これより換骨脫胎し來る。

昔日西窓底。臥數黃梅墜地聲。

讀方　滿巷の深泥雨乍ち晴る、輪蹄絡繹門を過ぎ行く、故園昔日西窓の底、臥し數ふ黃梅地に墜つるの聲。

○陶淵明圖

群馬蕭々跡欲無。寄奴鞭策捲荊吳。荒園掌大容松菊。猶是前朝舊版圖。

讀方　群馬蕭々跡無からんと欲す、寄奴の鞭策荊吳を捲く、荒園掌大松菊を容る、猶ほ是れ前朝の舊版圖。

○播州即目

亂松相映白沙明。隔水青山對晚晴。鷗背

注意 山陽の詩の印象明瞭なること此詩に見るも明かなり

無風細波靜。遠帆如座近帆行。

讀方 亂松相映じて白沙明なり、水を隔つる青山晩晴に對す、鳴背風無く細波靜なり、遠帆坐するが如く近帆は行く。

○野馬圖

鐵蹄曾擬躪居延。野性終難任絡纏。今日寧思槽豆味。春陂水暖草如煙。

讀方 鐵蹄曾て居延を躪まんと擬す、野性遂に絡纏に任へ難し、今日寧んぞ思はん槽豆の味、春陂水暖に草煙の如し。

○題不識菴擊機山圖

鞭聲肅々夜渡河。曉見千兵擁大牙。遺恨十年磨一劒。流星光底逸長蛇。

註 居延 居延は匈奴中の地名也王維の詩に曰く「將軍を逐うて古賢を取らんと欲す沙場馬を走らして居延に向ふ」と

註 大牙 將軍の旗を牙といふ其の國の爪牙たるより取れる名なり 逸長蛇 逸は奔也長蛇は强敵也 左傳に見ゆ





注意 山陽時に三十四歲なり

註 雞晨 元旦なり 喝道 道上の人馬を拂ふ聲也

十年磨一劒。流星光底逸長蛇。

讀方 鞭聲肅々夜河を渡る、曉に見る千兵の大牙を擁するを、遺恨十年一劒を磨す、流星の光底に蛇を逸す。

癸酉

○元日

曉來誰喚我。今日是雞晨。應有賀客來。衣帶出屈伸。先生不遽起。坐食且擁衾。所貴於隱者。臥起縱其身。手足與眼耳。用當由己心。姑看膝上書。好謝門前賓。過門聞喝道。不知何官人。

讀方 曉來誰か我を喚ぶ、今日是れ雞晨、應に賀客

**注釋** 簡易生活の餘、情に流るるは厭ふべし　さあれ煩鎖を省くは簡易生活の訣たらずんば非ず

**語** 定省　定期に父母を省する也　靦然　詩經に「靦面目有り」とあり靦は慚也　安頓　止宿也　桂玉　戰國策に薪貴きこと桂の如く食貴きこと玉の如しとあり　菟道　字治なり　澳川　は淀川也　隨跟　釋名に足後跟といふ脚のかがと也

の來る有るべし、衣帶出でゝ屈伸す、先生遽起せず、坐食且つ衾を擁す、隱者に貴ぶ所、臥起其の身を縱にし、手足と眼耳と、用ゆる當に己の心に由るべし、姑く膝上の書を看、好んで門前の賓を謝す、門を過ぐる喝道を聞く、知らず何の官人なるを。

## ○家君告暇東遊拉兒協來娛侍

旬餘送至西宮別後賦此志之

父執遣吾東京城住五年西悲闕定省空望白雲懸養痾雖有辭負恩終靦然何料父東遊孫隨未及肩豫得父執報上國謀團圓驚喜迎溯水安頓借一廛桂玉猶甘旨徒弟足周旋探勝每負劍隨跟扶仆顛





**注釋** 笈を負うて遠く學ぶ者必ずや時に此の感あるべし、山陽の實情を叙するに巧みなる一讀數多の遊子をして撫然たらしむるものあり

買輿趨菟道儵舟下澳川暫侍衾枕側送到兜鍪山兒泣結吾韈父呵勿留連泣呵情無二回頭海山烟

**讀方** 父執吾をして東せしむ、京城住すること五年、西悲定省を闕き、空しく白雲の懸るを望む、痾を養ふ辭ありと雖も、恩に負いて終に靦然、何ぞ料らん父東遊し、孫隨うて未だ肩に及ばず、豫め父執の報を得て上國團圓を謀る、驚喜迎へて水を溯り、安頓一廛を借る、桂玉猶ほ甘旨、徒弟周旋足る、勝を探る毎に負劍、跟に隨うて朴顛を扶け、輿を買うて菟道を趨り、舟を儵うて澳川を下る、暫く衾枕の側に侍して送つて兜鍪山に到る、兒泣いて吾が韈を結び、父呵して留連を勿む、泣呵情二無し、頭を回せば海山煙る。

註 茫然ぼんやりと夢の樣なること 阿爺俗語父を呼んで阿爺といひ母を呼んで阿孃といふ

註 穿楊技楊由の箭克く飛揚を穿つ

評 茶山曰く巧なる者却つて失す

○奉別家君後上難波橋

歡娛回首已茫然。獨倚長橋望海天。日落山低歸鳥沒。阿爺今夕宿何邊。

讀方 歡娛首を回らせば已に茫然、獨り長橋に倚つて海天を望む、日落ち山低うして歸鳥沒す、阿爺今夕何の邊にか宿す。

○題鎮西八郎圖

一箭曾期定八州。豈圖失路老荒陬。剩將當日穿楊技。弋獲琉球葉大州。

讀方 一箭曾て期す八州を定めんと、豈圖らんや失路荒陬に老いんとは、剩さへ當日穿楊の技を將て、弋獲す流球葉大州。





註 黃花菊の花也 別巵別れの盃 孤鶴閑雲孤鶴の語あり

註 赤阪三河寶飯郡に在り 原田毎々左傳中の字也毎々は草の盛なるをいふ也 韉鞅馬具背にあるを韉と云ひ腹に在るを鞅といふ 甘棠詩經にあり「蔽芾たる甘棠伐ること勿れ打つこと勿れ召伯の憩

○壬申遊播癸酉遊濃皆以秋月戲賦

去歲黃花照別巵。今年黃葉映征衣。閑身自笑似孤鶴。每見秋風輙愛飛。

讀方 去歲黃花別巵を照し、今年黃葉征衣に映す、閑身自ら笑ふ孤鶴に似たるを、秋風を見る毎に輙ち飛を愛む。

○赤坂觀東照公營

原田毎々繞高岡。想見觀師備韉鞅。行覺芒鞋無着處。滿山草棘總甘棠。鞅拾良反

讀方 原田毎々高岡を繞る、想見す觀師韉鞅を備ふを、行ゆく覺ゆ芒鞋着する處なきを、滿山の草

へる所」とあり、凡て歴史あり由緒あるを以て草棘と雖も徒に蹂躙し難きをいふ

註 奚囊 詩を得るに隨つて投入すべき囊をいふ也

端研 端溪より出づる研也色深紫にして潤澤あり

程家寶墨 程君房製する所の墨をいふ

遯々 莊子齊物篇に「昔莊周夢に胡蝶と爲る、俄にして覺むれば遯々然として莊周也」と、蓋し遯々は自得の貌也

棘總て甘棠。

○遊北濃

奚囊尋勝百峰間。落日回頭不破關。不識北行深幾里。林端忽得賀州山。

讀方 奚囊勝を尋ぬ百峰の間、落日頭を回らせば不破の關、識らず北行深さ幾里なるを、林端忽ち得たり賀州の山。

○善應寺訪禪智師

端研呵水試玉質。程家寶墨不滯筆。探索寫詩與君看。燈明方丈夜促膝。出京三旬無此娛。半夕仙境夢遯々。明朝上舟前灘去。回首霜林聞粥魚。





粥魚 木魚のこと

註 韻人風流の行藏、之れ嘘て簡易生活の體を得たるもの也

註 逞霸心 織田信長清州城下に爭ひたるを指す 甘耕耨 農に在ること

讀方 端研水を呵して玉質を試む、程家の寶墨筆とどこほらず、索を探り詩を寫して君と與に見る燈明に夜膝を促む」、京を出で〻三旬此の娛無し。半夕仙境夢遯々たり、明朝舟に上り前灘を去る、首を回らせば霜林粥魚を聞く。

○清洲早川氏庭有藤花一架因號藤陰其家自天正年間世爲鄉長索我詩。

七道縱横逞霸心。遺墟徒見棘蓁深。輸他十世甘耕耨。長占藤花半畝陰。

讀方 七道縱横に霸心を逞うす、遺墟徒に見る棘蓁の深きを、輸他十世耕耨に甘んじ、長に占

む藤花半畝の陰。

○舟發大垣赴桑名

蘇水遙遙入海流。櫓聲雁語帶鄉愁。獨在天涯年欲暮。一蓬風雪下濃州。

【訓方】蘇水遙遙海に入つて流る、櫓聲雁語鄉愁を帶ぶ獨り天涯に在つて年暮れんと欲す、一蓬の風雪濃州を下る。

○倦繡詞 倣東坡四時詞體

繡歇雙蛾重於山。停針聞盡漏聲殘。殘絨睡窓窓漸暗。羅衣春瘦怯晚寒。脈脈柔情向誰語。下簾怕見初月吐。不分東隣小狸奴。瑞香花底來呼侶。

【註】蘇水 木曾川の帶水流也 鄉愁 故鄉の方を望んで覺ゆる愁なり

【註】雙蛾 雙蛾眉なり 漏聲 說文にいふ漏は銅壺に水を受けて晝夜を刻せる水時計也 脈々 絶えざる貌也 狸奴 猫を云ふ 瑞香花 牡丹の花 不分 不分に諸說あり、杜詩の註に不分は分辨丁る能はざるなり」とあり邵康節も亦同樣に解すと雖も蕉中師の詩語解には「愁に堪えざるなり」とあり、伊





藤東涯の秉燭談には「不分は自ら其分を知らざるをいふ」とあり、「六如上人の葛原詩話には「愁に堪えざる」意味の方に式祖したり

【注意】山陽亦能く此綺語を爲す、徒に山陽を以て豪意氣の詩人とのみ爲す勿れ

【註】蘭煤 燈なり 衣篝 籠を以て火を覆ひ衣に香を燒き籠むる道具 貪睡了鬢呼不起 唐皮日休の詩にいふ「酒渴きて漫に茶を思ふ、山童呼べども沈香を起たず」 沈いふ

【訓方】繡歇んで雙蛾山よりも重し、針を停めて聞盡すれば漏聲殘す、殘絨窓に睡して窓漸く暗く、羅衣春瘦晩寒を怯る、脈々たる柔情誰に向つて語らんと欲す、下簾初月の吐くを見るを怕る、不分東隣の小狸奴、瑞香花底來つて侶を呼ぶ。

○睡起詞 同上

臙脂半褪鬢髻沙。枕痕橫頰斂雙蛾。瞢騰不獨春宵短。曩歡總自夢裡過。蘭煤影盡衾如水。一聲曉鶯綺窓紫。衣篝欲添海南沈。貪睡了鬢呼不起。

【訓方】臙脂半ば褪せて鬢髻沙、枕痕頰に橫ほつて雙蛾を斂む、瞢騰獨り春宵の短のみならず、曩歡總て

夢裡より過ぐ、闌燦影盡さて衾水の如く、一聲の曉鶯
綺窓紫なり、衣篝添へんと欲す海南の沈、睡を貪る
了鬟呼べども起たず。

## ○東山春興二首

烟靄軟塵紅欲浮。受風蝶翅弄輕柔。依山
多有花寺。沿水總無酒樓。幾度能聞
天上曲一橋長隔世間愁。唯教行樂如吾
意。何說鳧川不倒流。

**讀方** 烟軟塵を靄んで紅浮ばんと欲す、風を受けて蝶翅輕柔を弄す、山に依つて多く花有るの寺有り、水に沿うて總て酒無きの樓無し、幾度か能く聞く天上の曲、一橋長く隔つ世間の愁、唯行樂をして吾が意の





**註** 幾度能聞天上曲 杜甫花卿に贈るの詩に「此の曲祇應に天上に在るべし、人間能幾回か聞くを得たる」と

**註** 後白河法皇嘗て嘆じて宣く、朕の世に意の如くならざるもの三、曰く、叡山の僧、曰く双六の賽、曰く鴨川の水と

**註** 巴竹 藝苑名言にいふ竹枝詞本と巴渝に出づ。劉禹錫阮湘に在るや、俚歌を以て辭九章を作る 江花常見李龜年 李龜年は唐の善歌者也、杜甫の龜年に與ふる詩に「正に是れ江南の好風景、落花の時節又君に逢ふ」と

如くならしめば、何ぞ說かん鳧川倒流せざるを

鶯語丁寧雜管絃。綺羅叢裡酒如泉。香脂
寫出一川水。翠黛凝成千樹烟。巴竹未逢
劉禹錫。江花常見李龜年。長安今豈登科
地。走馬東風唯自顚。

**讀方** 鶯語丁寧管絃に雜はる、綺羅叢裡酒泉の如し、香脂寫し出す一川の水、翠黛凝り成す千樹の煙、巴竹未だ逢はず劉禹錫、江花常に見る李龜年、長安今豈登科の地ならんや、馬を東風に走らして唯自ら顚ず。

【卷之一終】

# 山陽詩鈔卷之二

賴襄子成著
蜂谷柳莊註

甲戌

○同武景文細香遊嵐山宿旗亭

山色稍暝花尚明綺羅分路各歸城詩人故擬落人後呼燭溪亭聽水聲

**讀方** 山色稍や暝く花尚ほ明なり、綺羅路を分つて各々城に歸る、詩人故に擬して人後に落ち、燭を呼んで溪亭水聲を聽く。

**注意** 山陽時に三十五歲に達せり

**注意** 上林看花の客滿つるに及んで春を賞するは詩人の事に非ず、之を見る方に柳嫩鵝黃の新春に非ずんば綺羅去つて暮色漸く迫る山紫水明の時に在り

○題雲龍圖贈喝蘭譯官末永生

生嘗遭遇事變被擢今職

註 嶄然 嶄は高峻にして群峯を抜けるをいふ韓文公の詩に「嶄然頭角を見す」とあり 點額歸 三秦記にいふ「大鯉魚龍門に登り化して龍と爲る登らざる者額を點し腮を暴す」と

曾遇雷驚電擊時。嶄然頭角忽雄飛。還從雲表閑回顧。幾個同儕點額歸。

讀方 曾て雷驚電擊の時に遇ひ、嶄然たる頭角忽ち雄飛す、還雲表より閑に回顧すれば、幾個の同儕點額して歸る。

○通天橋

註 玉龍背 橋の形龍背の如きよりいふ 紅錦雲 紅葉雲の如く簇れるをいふ

注意 玉龍と紅雲との照應に注意すべし

橋底停車酒半醺。仰看霜樹離紛紛。豪來却上玉龍背。踏過一溪紅錦雲。

讀方 橋底車を停むれば酒半ば醺ず、仰ぎ看る霜樹離れて紛々たるを、豪來却上る玉龍の背、踏み過ぐ一溪紅錦の雲。

○紅林





註 夜如何 夜更けたるや否や如何といふ意 金波 月影の漂ふ波

貪涼不問夜如何。人散溪聲漸覺多。知是林端月已上。樹陰缺處碎金波。

讀方 涼を貪つて問はず夜如何、人散じて溪聲漸く多きを覺ゆ、知る是れ林端月已に上るを、樹陰缺ぐる處金波碎く。

○歸省至尾道志喜

註 操鄉音 方言を操つること 故人門 友人の家なり

注意 鄉音の二字を點出して一篇ローカル、カラーを帶び來る、想ふに山陽は又鄉土文學者としても頗る價値ある詩人にして、赤關竹枝、長崎歌謠の如きは固より、內海數度の往返に拈出されたる詩句の

籃輿衝暗夜過嶺。不知身入故國境。忽聞人語操鄉音。萬瓦蹙海浮月影。熟路敲得故人門。鮮鱗上盤酒漲尊。滿岸夜潮搖柔櫓。明朝應當到竹原。頻推船窓眠不得。夾舟江山皆舊識。

讀方 籃輿暗を衝いて夜嶺を過ぐ、知らず身は故國の

盡く地方色を帶べるが如き、優に讀者をして關西てふ概念を把捉せしむるに足る、要するに山陽の文學の多くは直に之れ關西文學なりといふも妨げざるものあり

註 鄉州 故鄉の國也 短堠 小さき城 宵々夢 毎夜々々の夢なり 窮山 險阻なる山なり

境に入るを、忽ち聞く人語鄉音を、萬瓦海に蹙つて月影浮ぶ」熟路敲き得たり故人の門、鮮鱗盤に上り酒尊に漲る、滿岸の夜潮柔櫓を搖す、明朝應に當に竹原に到るべし、一類に船窓を推して眠得ず舟を夾む江山皆舊識。

○踰松子山

路人鄉州奈險何。長亭短堠萬坡陀。怪來客裡宵々夢。如此窮山容易過。

讀方 路は鄉州に入つて險なるを奈何、長亭短堠萬坡陀たり、怪み來る客裡宵々の夢、此の如き窮山容易に過ぐるかな。

○到家





註 惜分陰 晉陶侃曰く、「大禹聖人は寸陰を惜む、凡俗に至つては當に分陰を惜しむべし」と

註 遙見送者自厓返 莊子山木篇に曰く「君其に江を涉つて海に浮ぶ、之を望んで其の厓りを見ず、愈々往いて其の窮る處を知らず」君を送る者皆還る、孤枕曾て勞す千里の夢、一燈初て話す五年の心、筠籠朋贈る魚蝦の美、園圃親誇る松菊の深を、復東轅行李を理んと欲す、團欒能く分陰を惜まざらんや。

飄々蹤跡隔雲岑。倦鳥時知還故林。孤枕曾勞千里夢。一燈初話五年心。筠籠朋贈魚蝦美。園圃親誇松菊深。復欲東轅理行李。團欒能不惜分陰

讀方 飄飄の蹤跡雲岑を隔つ、倦鳥時に知る故林に還る、孤枕曾て勞す千里の夢、一燈初て話す五年の心、筠籠朋贈る魚蝦の美、園圃親誇る松菊の深を、復東轅行李を理んと欲す、團欒能く分陰を惜まざらんや。

○發廣島奉別家君

匆匆盡杯酒。遲々出門閭。回首語諸弟。侍養煩代予。舟進洲移城。漸遠遙見送者自厓返。一株如蓋立。薄暮猶認爺家對門樹。

厓より返る」と

**注意** 演飾なく街辭なし眞情流露の所、宛も詩經燕々の章を讀むが如し

**註** 暗戸 音戸の瀨戸 蓬窓 舟の窓を ふい平公塔 音戸の瀨戸に在る平相國の塔なり

**註** 西野 市川寛齋の別號也 奚囊 李賀の故事にして詩を入れる囊のことなり 彭脹 膨脹なり充ち滿てる也

**讀方** 匆々杯酒を盡し、遲々門閭を出づ、首を回して諸弟に語り、侍養予に代らしむ、舟進み洲移つて城漸く遠し、遙に見る送者厓より返るを、一株蓋の如く薄暮に立つ、猶ほ認む爺家對門の樹。

○舟宿暗門憶曾隨家君泊此今十一年矣

蓬窓月暗樹如煙拍岸波聲驚客眠默數浮沈十年事平公塔下兩維船。

**讀方** 蓬窓月暗く樹煙の如し、岸を拍つ波聲客眠を驚かす、默し數ふ浮沈十年の事、平公塔下兩び船を維ぐ。

○江戸西野老人歸自長崎余遇之兼塾賦贈





**註** 孤島 仙醉島なり 靷を去ること五六町の間に在 分背 袂を分つこと、舟なれば此く云

集中欠載海西山。天遺吟翁一出關。堪想奚囊太彭脹。貯將幾樣紫嵐還。

**讀方** 集中載を欠く海西の山、天吟翁をして一たび關を出でしむ、想ふに堪えたり奚囊太だ彭脹せるを、幾樣の紫嵐を貯へ將つて還る。

○發靷菅徵卿諸人送至仙醉山而別

大舟載我去。小舟送我來。合纜擊孤島。與君傾別杯。兩舟終分背。擧手互相呼。共入水煙裡。櫓聲半有無。

**讀方** 大舟我を載せ去り、小舟我を送り來る、纜を

合して孤島に繫ぎ、君と別杯を傾く、」兩舟終に分背し、手を擧げて互に相呼び、共に水煙の裡に入る、櫓聲半ば有無。

○舟中寄懷笠岡小寺帶刀

幾簇海灣魚稻鄉、蘆潮粉壁閃殘陽。故人家在何邊岸。頻喚柁師問笠岡。

讀方 幾簇の海灣魚稻鄉、潮に蘆す粉壁殘陽に閃く、故人の家何の邊の岸にか在る、頻に柁師を呼んで笠岡を問ふ。

○八幡公 以下十三首盡係題畫

結髮從軍弓箭雄。八州草木識威風。白旗不動兵營靜。立馬邊城看亂鴻。

註 魚稻鄉 漁磯農村をいふ 柁師 船頭なり

註 八幡公 源義家八幡祠前に冠す因つて名づく 結髮 古へ匈奴と戰ふに髮を結ぶ 亂鴻 義家





武衡を征して金澤に至り亂鴻雁を望んで曰く是れ伏あるなり、と

評 萊山曰く、以下十數首是れ子成の長技

註 源廷尉 義經、前漢書百官表の註に曰、廷は平也、獄を治する平なるが貴ぶ故に以て號す、と 貝錦歸鄉忽斐蕤 詩經に曰く、蕤斐是に貝錦を爲す、と、註に蕤斐は小文の貌、貝は介虫文彩あつて錦の如し、蓋し此の一句人の小過を以つて大罪に飾成するをいふなり 肥家 禮運曰く、兄弟睦じきは家の肥ゆるなり と牝雞 牝雞の晨するは家の禍也。政子を指す

註 特筆 挺立するを特といふ 特筆は之を特書する也 一腔 明王相、虜と戰ふ、胸間創を被る或人これを

讀方 結髮軍に從ふ弓箭の雄、八州の草木威風を知る、白旗動かず兵營靜なり、馬を立てゝ邊城亂鴻を看る。

○源廷尉

寶刀跨海斬鯨鯢。貝錦歸鄉忽斐蕤。阿兄不識肥家策。煮同根養牝雞。

讀方 寶刀海を跨つて鯨鯢を斬る、貝錦鄉に歸つて忽ち斐蕤、阿兄識らず肥家の策、同根を煮て牝雞を養ふ。

○楠公別子圖

海甸陰風草木腥。史編特筆姓名馨。一腔熱血存餘瀝。分與兒曹灑賊庭。

囮む、相曰く「此の一腔の血を以て君恩に報ずるなり」と

註 **龍虎撑腸** 太公六韜に龍韜虎韜の篇あり「唐人の詩に腸を撑へ腹を柱ふ文字五千卷」の句あり、共に合して其の意を知るべし **王孫** 漂母の韓信を呼ぶの語猶ほ公子と云ふが如し

註 **韓世忠** 宋韓世忠字は良臣延安の人、風骨虎岸驚猛人に絶す、年十八敢勇を以て募に應じ麾金の兵を破

讀方 海甸の陰風草木腥し、史編特筆して姓名馨し、一腔の熱血餘瀝を存し、兒曹に分與して賊庭に漉ぐ。

○漂母飯韓信圖

龍虎撑腸久失靈此間不復博藜羹誰投一飯王孫腹幾粒蒸爲百萬兵

讀方 龍虎腸を撑へて久しく靈を失す、此の間復た藜羹を博せず、誰か一飯を投ぜん王孫の腹、幾粒蒸して百萬の兵と爲る。

○韓世忠

曾被卿々認虎鬚功成歸臥夢俱安笑他老范摟西子何似君家結髮歡





り岳飛と名を齊うす **卿々** 妻也世說に見ゆ **虎鬚** 鶴林玉露にいふ、世忠の夫人は京の口倡也嘗て府に入り忽ち廊柱の下に一虎蹲臥し鼻息鼾々然たるを見る 詳にこれを見れば一卒也因つてこれを蹴り姓名を問ふ乃ち韓世忠也 **歸臥** 世忠、宋金の和議を喜ばず檜の抑止する所となる上表して骸骨を乞ひ罷めて醴泉觀使と爲る、此れより門を閉ぢ客を謝し口を絶ちて兵を言はず時に驢に跨り酒を携へ溪童を從へて西湖に遊び以て自ら樂む **老范** 吳越春秋に曰ふ、范蠡吳を滅し西施を携へ五湖に遊ぶ

註 **岳飛** 字は鵬舉相州湯陰の人、沈厚寡言且つ射を能し神力あり屢々寡兵を以て衆敵を破る、金人大に之を恐れ呼んで岳爺と爲す **燕雲** 晉の石敬塘燕雲十八州の地を契

讀方 曾て卿々に虎鬚を認めらる、功成つて歸臥夢共に安し、笑ふ他の老范西子を摟くを。何ぞ君家結髮の觀に似ん。

○岳飛

唾手燕雲志已空兩河百郡虜塵重西湖贏得墳三尺留與遊人認宋封

讀方 唾手燕雲志已に空しく、兩河百郡虜塵重し、西湖贏ち得たり墳三尺、遊人に留與して宋封を認む。

○東山春遊圖

酒光漲幄鬱紅霞醉餞徂春日已斜絶愛雪兒知我意故開歌扇受飛花

丹に與へ宋の世に及んで之を復すること能はず、岳飛の上疏に「功を西河に收め手に唾し燕雲終に讐を復せんと欲して國に報ず」の語あり 西湖 岳飛の墳は西湖に在り蘇小の墳と相隣す

註 幄は帳なり 雪兒 雪兒は藝妓なり李密賓朋の文章綺麗ならば雪兒をして之を歌はしむ

評 茶山曰く、釵影横の三字神を傳ふ

讀方 酒光幄に濺り紅霞鬱たり、醉うて徂春に錢すれば日已に斜なり、絕愛の雪兒我が意を知る、故に歌扇を開いて飛花を受く。

## ○美人獨坐圖

獨倚銀屏釵影横。酒醒燈冷此時情。芳心一點向誰語。付與隣樓絃索聲。

讀方 獨り銀屏に依つて釵影横ふ、酒醒め燈冷かに此時の情、芳心一點誰に向つて語らん、付與す隣樓絃索の聲。

## ○四條橋圖

笑靨顰眉幾送迎。一橋個處太多情。軟沙細石春流駛裙影匆々碎復生。





註 左顧 晉の孔諭途龜を見買うて溪に放つ中流に至り左顧すること數回、侯印に鑄るに及んで印龜左顧すること三度なり 金章 漢の官儀二千石以上銀印龜紐、金印は其の上位に在り

註 兩頰芙蓉 西京雜記にいふ、卓文君の臉芙蓉の如し 當壚 卓文公臨邛に至り酒を賣る土を累れて以て酒壺を置く 高陽 高陽の酒徒なり

讀方 笑靨顰眉幾送迎。一橋個の處太だ多情、軟沙細石春流駛る、裙影匆々碎けて復た生ず。

## ○放龜圖

春塘泥暖水芹香。曳尾應歸舊樂鄉。叱叱此間休左顧。平生無夢到金章。

讀方 春塘泥暖に水芹香し、尾を曳いて應に歸るべし舊樂鄉、叱叱此の間左顧するを止めよ、平生夢の金章に到る無し。

## ○卓文公

兩頰芙蓉凝露香。當壚醉殺幾高陽。借來夫壻彫蟲筆。畫得雙蛾似個長。

讀方 兩頰の芙蓉露香を凝す、壚に當つて醉殺す幾

彫蟲 楊子に彫蟲篆刻は壯夫之れを爲さず、の語あり

雙蛾 眉毛前に記せり

註 東坡笠屐 貴耳錄にいふ東坡僧耳に在るや書の讀むべき無し、聚子の家に柳文數册あり盡日玩誦す一日雨に遇ひ笠屐を借つて歸る、後世の人之を畫いて圖となす

白魚 蠹魚なり 蓮燭送歸院 坡東翰林に在るや嘗て禁中に宿直す帝茶を賜ひ御前の金蓮燭を取つて翰林院に歸るを送らる

註 郭汾陽 郭子儀八子七婿皆顯れ諸孫の數十八、子孫安を問ふ毎に之を辨する能はず唯頷くのみ 螽斯 詩經に出づ蝗螽の類にして一度に八十一子を生む 綵嬉 老萊子綵衣を著けて親前に舞ふ 虎狼 安祿山、史思明の徒を指す

註 父執 父の友を父執と云 草卒 狼狽の體を云ふ 耆宿 周章老夫子老先生などの意、後漢書に、耆宿大賢多く廢棄を見る、とあり 加餐 滋養ある食物を用ゐて養生することなり

高陽、夫壻彫蟲の筆を借來り、蛾を畫き得て個の似く長し。

○東坡笠屐圖

幾帙殘篇掃白魚。還衝泥濘過村墟。憶廐蓮燭送歸院。坐讀玉堂森寶書。

讀方 幾帙の殘篇白魚を掃ふ、還泥濘を衝いて村墟を過ぐ、憶や廐や蓮燭送つて院に歸り、坐し讀む玉堂寶書森たるを。

○郭汾陽聚兒孫圖

令公孫子似螽斯。何獨膝前群綵嬉。曾逐虎狼全海宇。生靈誰不郭家兒。

讀方 令公の孫子螽斯に似たり 何ぞ獨り膝前の群綵嬉のみならん、曾て虎狼を逐ひ海宇を全うす、生靈誰か郭家の兒ならざる。





○岡山訪姫井翁

懷刺問父執。深巷路屈盤。開門問誰歟。聞名迎且歡。草卒吹爐火。俄頃羅杯盤。呼兒訂舊誼。又見儒衣冠。風俗日頹敝。耆宿歲凋殘。後輩何所望。願君强加餐。

讀方 刺を懷にして父執を問ふ、深巷路屈盤す、門を開いて誰なる歟を問ふ、名を聞き迎へ且つ歡ぶ、草卒爐火を吹き、俄頃杯盤を羅ぬ、兒を呼んで舊誼を訂す、又見る儒衣冠、風俗日に頹敝し、耆宿歲に凋殘す、後輩何の望む所ぞ、願くば君强て餐を加へよ。

註 馬肝 漢の武帝の時數次馬肝石を進む、以て硯と爲す 鳳眸 東坡の詩に「蘇子一見して鳳眸と名づく」とあり 紫端 端溪より出づる石、以て硯と爲す 蒼歙 韵端に曰く、歙硯は龍尾溪より出づ 鐵櫪 タカ及サンの類なり、とあり、書經金縢の註に金縢は緘之を櫃に藏し之を緘するに金を以てす、之を開く東坡筆に曰、欲せざる也、と 細眼 錄に曰、端硯に鶴眼黃白相間るあり、眼内に在るを活眼といひ四傍浸漬して其だ晴明ならざるを淚眼と謂ひ形體略具はつて内外皆白き之を死眼といひ、綠絲點ずる之を細眼といふ、とあり 脫贈 唐詩に寶劍直千金、手を分ちて脫し相ひ贈る、と

君不見文士有硯猶英雄有劍終始相伴成功名獲一畢生意屬匱不學富兒務收羅。馬肝鳳眸競華豔。嗟我廿年筆爲食未得一石能發墨紫端蒼歙多贋造塗澤誤人認玉色君亭無記徵於吾文思窮竭筆欲枯潤以一片紫雲腴古錦爲囊鐵櫪蓋啓縢黝光流玉膚側視黃紋簇且散時有細眼點綠絲神龍跳出墨池裡洪波蕩漾溢四隅得此摩挲不釋手却顧蕪辭愧顏厚何異懦夫佩莫耶一揮難酬脫贈友從

○紫石硯歌 謝小野樵翁





あり 跋血 卓氏藻林にいふ人を殺して流血滂沱たるを跋血といふ とあり 顧盻 顧みて斜に視る也後漢書馬援の傳に「鞍に據つて顧盻す、以て用ゆべきを見る」と 維翰 鐵 維翰、鐵硯を鑄以て示して曰く硯弊れば業を改む、と

注意 山陽の硯を愛する武人の刀劍に於けるが如く全く其の精神を此に宿す、世の骨董者流と趣を異にするは固より莫耶の劍を得て益々奮勵努力を誓ふ處、豈之れ武士の精神にして又山陽の精神にあらざるなからんや、玩物喪心の徒と異なる所以也

今磨礪伴堅節會向文陣試蹀血驅濤湧雲隨顧盻縱橫百戰無缺折誓志欲追維翰鐵。

讀方 君見ずや文士硯ある猶ほ英雄劍あるがごとし、終始相伴うて功名を成す、一を獲て生を畢る意屬匱す、學ばずして富兒收羅に務め、馬肝鳳眸華豔を競ふ、「嗟我廿年筆食を爲す、未だ一石能く墨を發するを得ず、紫端蒼歙贋造多く、塗澤人を誤つて玉色を認む、」君が亭記無く吾に徵ず、文思窮竭筆枯れんと欲す、潤すに一片紫雲の腴を以てす、古錦囊を爲して鐵櫪蓋ふ、縢を啓けば黝光玉膚に流れ、側視すれば黃紋簇り且つ散ず、時に細眼綠珠を點するあり神龍跳出す墨池の裡、洪波蕩漾して四隅に溢る、」

注意　山陽時に三十六歲也

註　碧紗　青い窓掛なり　折簡　書簡なり

これを得て摩挲手より釋かず、却つて蕪辭を顧みて顏厚を覺ゆ、何ぞ異まん懦夫莫耶を帶び、一揮脫瞻の友に酬い難きを、」今より磨礪堅節を伴ひ、會たま文陣に向つて蹀血を試み、濤を驅り雲を湧かして願眄に隨ばん、縱橫百戰缺折する無く、志を誓ひ迫んと欲す維翰の鐵。

## 乙亥

### ○登々莽誘看梅於梅宮嵯峨

曉窓眠起鳥聲多。嫩日暉暉透碧紗。便有吟朋折簡喚。喚吾西郭看梅花。

讀方　曉窓眠起さて鳥聲多し、嫩日暉々として碧紗を透す、便ち吟朋折簡の喚より　吾を呼び西郭梅花を看る。





註　嬌影　瓶花の艷なる影なり　寶釵斜　花を美人に譬へて宛も玉の簪を斜に挿したる樣なるをいふ

注意　山陽家君の病を聞くや時宛も莊子を諸弟子に講ず、忽ち書を投じて直に結束歸程に上り、京洛より廣島まで僅に五日にして至る、然れども父の生前に遇はず、山陽終生の恨事を成す、爾後再び莊子を講ぜず

### ○絕句

閑移殘燭照瓶花。愛看嬌影在窓紗。忽記東山觀舞日。銀屏光射寶釵斜。

讀方　閑に殘燭を移して瓶花を照す、愛し看る嬌影窓紗に在るを。忽ち記す東山觀舞の日、銀屏光射て寶釵斜なるを。

### ○聞家君病歸省舟中作

播山過盡備山青。十幅征帆二日程。歸思猶嫌風力軟。篷窓穿眼廣州城

讀方　播山過ぎ盡して備山青し　十幅の征帆二日程、歸思猶嫌ふ風力の軟なるを、篷窓眼を穿つ廣州城。

註 鮒鮐は鼻息なり 肷行囊 廣韵にいふは正韵に肷は發也 莊子に筐を肷き囊を探るの盜とあり、

註 麥浪 麥の浪の如く風に漂へるを 綠漫漫 綠葉海の如くヒロビロとして連れるをいふ

又

滿船鮒鮐雜波聲。獨有愁人眠不成。强肷行囊覓書讀。舟燈一盞剔還明。

讀方 滿船の鮒鮐波聲に雜る、獨り愁人の眠成らざるあり、强て行囊を肷き書を覓めて讀む、舟燈一盞剔つて還明なり。

○自鞆上陸

麥浪埋人礙遠山。籃輿穿過綠漫漫。風吹時見峰尖露。猶似船窓昨日看。

讀方 麥浪人を埋め遠山を礙ぐ、籃輿穿ち過ぐ綠漫漫、風吹き時に見る峰尖の露るゝを、猶船窓昨日の看に似たり。





註 天鷄 爾雅釋鳥に大さ鶚雀の如く色は鶉に似たり江東之を名けて天鷄といふ俗の告天鳥なり 暄涼節 三四月の時候をいふ 袂衣 袷衣を云

註 黃栗留 鶯のこなり 愛日 楊子に孝子日を愛むと 新賒 新に買入れたるを 阿孃 母を指して俗に阿孃といふ 貓頭 能く肥えたる筍をいふ

又

麥氣薰人黃菜稀。天鷄相和帶聲飛。旅裝難定暄涼節。午著單衣晚袂衣。

讀方 麥氣人を薰して黃菜稀なり、天鷄相和して聲を帶び飛ぶ、旅裝定め難し暄涼の節、午には單衣を著し晚には袂衣。

○侍家君同賦依菅劉二翁唱和之韻

麥寒猶未脫綿裘。柳外時聞黃栗留。遊子寸心尤愛日。老親短鬢又添秋。新賒書卷堆支架。舊記花梢高過樓。多謝阿孃諳食性。手烹園筍斸貓頭。

註 伶傍零落した啼鶴鴿ること七十七頁を見よ池塘池の堤なり、唐詩に、青草池塘處々の蛙、とあり

註 撥刺魚の勢よく跳躍するをいふ

讀方 麥寒猶未だ綿裘を脱せず、柳外時に聞く黄栗留、遊子の寸心尤も日を愛み、老親の短鬢又た秋を添ふ、新賒の書卷堆く架を支へ、舊記の花楮高く樓を過ぐ、多謝す阿孃食性を諳ずるを、手から園筆を烹て貓頭を斷つ。

○哭弟新甫

曉原顧影太伶傍千里孤飛啼鶴鴿往事不堪春夢短池塘依舊草青青。

讀方 曉原影を顧みて太だ伶傍、千里孤飛鶴鴿鳴く往事堪えず春夢の短きに、池塘舊に依つて草青青。

○東上與佐藤虞臣同舟至尾道

孤島維舟治午餐鮮鱗撥刺割登盤岸頭





註 鶺鴒原兄弟互に親む義、成語考に「兄弟鶺鴒の相親むに似たり、患難相顧みること、鶺鴒の原に在るに似たり」と、素と詩經より出づ廣陵散晉康會て廣陵散の曲を學ぶ誓つて人に傳へず刑に臨んで琴を索め之を撫ず、後三年の役義光が暫く足柄山に足を駐め後より追うて至れる時秋に砂曲大食調を傳へたると相似たり

註 新尹新任官吏をいふ喧闐かまびす

花發無名草。折挿船窓帶醉看。

讀方 狐島舟を維いで午餐を治む、鮮鱗撥刺割いて盤に登す、岸頭花發く無名草、折つて船窓に挿し醉を帶びて看る。

○題新羅三郎吹笙足柄山圖

鶺鴒原遠月孤明。欲出關門且駐行。應惜平生廣陵散。鐵衣風露夜吹笙。

讀方 鶺鴒原遠くして月孤り明なり、關門を出でんと欲して且く行を駐む、應に平生廣陵散を惜しむなるべし、鐵衣風露夜笙を吹く。

○雜詩

新尹東來舊尹還。過門車馬日喧闐。諸公

しく騷しきこと　企足眠　足を伸して安眠するをいふ

評　茶山曰く、本色の語此の卷を壓すべし

註　午餉　午飯なり　田頭　田の邊といふが如し

評　茶山曰く、石湖集中に入るべし

注意　此詩、若し米のウヰリヤム、ベンジャミン、リーダーをして畫かしめば正に好箇の畫圖を爲すべし

註　茅檐　藁屋の軒也　雁來紅　葉鷄

鞅掌勤王事成就吾儕企足眠

讀方　新尹東より來り舊尹還る、門を過ぐ車馬日に喧闐、諸公鞅掌王事に勤め、成就して吾儕企足し眠る。

○春日田園

午餉溫香恰療飢田頭曝背日遲遲童孫不肯從翁睡野菜花邊促蝶兒

讀方　午餉溫香恰も飢を療し、田頭背を曝して日遲々たり、童孫肯て翁に隨ひ睡らず、野菜花邊蝶兒を捉ふ。

○秋日田園

茅檐斷續夕陽中打稻聲聲亂晚風隨分農家還好事縛籬護得雁來紅

讀方　茅檐斷續す夕陽の中、打稻聲々晚風に亂る分に隨ふ農家還事を好む、籬を縛し護り得たり雁來紅。





頭をいふ

注意　田園の光景茲に全く詩化さる、范石湖亦三舍を避くべし

註　爺孃　俗に父を稱して爺といひ母を呼んで孃と　いふ古樂府に「爺孃汝を呼ぶの聲を聞かず」とあり

注意　山陽此の時三十七歲

○除夕

客京城五錢年雪聲燈影兩依然爺孃白髮應添白說著吾儂共不眠

讀方　客と爲つて京城五たび年を錢る、雪聲燈影兩ながら依然たり、爺孃の白髮應に白を添ふべし、吾儂に說著して共に眠らず。

丙子

○客恨

註 客恨 客愁と同じ他郷に在りて感ずる恨也 平蕪 草等の廣く連れるをいふ 銅駝橋 支那洛陽の都に銅駝街の名あり 舊條 舊き枝也

註 孱顏 山をいふ 雲意 雲の搖く模樣也

註 一綱 二個の義也 弓鞋 婦人の鞋 無着處 蹈入れる處無しとの意

客恨逢春不解消、平蕪斷靄路迢迢、銅駝橋外千絲柳、五見東風上舊條。

讀方 客恨春に逢うて消し解せず、平蕪斷靄路迢迢、銅駝橋外千絲の柳、五たび見て東風舊條に上る、

○題夏山驟雨圖

晴虹一帶界孱顏、夕照斜明蒼翠間、雲意猶留餘興在、載將殘雨過佗山。

讀方 晴虹一帶孱顏に界す、夕照斜明蒼翠の間、雲意猶餘興を留め在り、殘雨を載せ將つて佗山を過ぐ、

○春草

燒痕烟暖日侵尋、綠映裙腰遠益深、一綱弓鞋無著處、可憐寸寸總春心。





註 槿籬の籬 竹落 竹ある村落をいふ 稀疎 稀なること

註 參梅 參梅の參は參禪の參也 茗椀 茶椀酒杯なり牡牧の時に船船「一棹百分空し」の事也、船 船船「一棹百分空しく、十幾の春光君に負かず」とあり

讀方 燒痕煙暖に日侵尋す、綠裙腰に映じて遠く益す深し、一綱の弓鞋着するに處なし、憐むべし寸寸總て春心。

○訪東郊僧庵看梅

槿籬竹落一邨邨、人語稀疎鳥語喧、聞說君家個中住、有梅花處便敲門。

讀方 槿籬竹落一邨々、人語稀疎として鳥語喧し、聞說君が家個中に住すと、梅花有る處便ち門を敲く。

禪榻參梅頓爽然、欲將茗椀換觥船、冰心可恨相知晚、紅紫叢中過十年。

讀方 禪榻梅に參して頓に爽然たり、茗椀を將つて觥

**注意** 山陽咏物の詩に於ても卓越せると此の如し、何ぞ獨り咏史歌行の類のみに於て然りといはんや。

**註** 延壽 西京雜記に曰く、漢帝の後宮多くして常に見るを得ず、乃ち畫工をして形を畫かしめ、帝其圖を按じて之れに幸す。後匈奴入朝して美人を求め圖を按じて昭君を伴ひ去る、去るに及んで帝昭君を召し其の貌を見るに後宮第一なり帝之れを悔ゆ、畫工毛延壽等爲めに市に棄てらる 天下の履 玉烏 魚鑰 魚の形せる錠也魚眼夜眠らず故に夜を守るの義に取る 三十六宮 西都賦に離宮別館三十六所とあり 蘧然 莊子より出づ、夢の覺めたる貌

**注意** 詩人到底情の人たるを免れず、山陽一度明妃の事に筆を染むるや、情緒綿々、長恨深愁を寫し得て此の如きものあり、豈之れ情に非ずといはんや。

**註** 翠光 竹の翠色を云ふ

船に換へんと欲す、冰心恨むべし相知る晚きを、紅紫叢中十年を過ぐ。

## ○寄題家大人紙帳

冰紋四壁想輕明。擁護老眠應有情。囑汝莫遮思子夢。放教容易到京城。

**講方** 冰紋四壁輕明を想ふ、老眠を擁護して應に情有るべし、汝に囑す子を思ふの夢を遮る莫れ、放ちて容易に京城に到らしめよ。

## ○明妃夢歸漢倣李長吉體

延壽妖血已爲碧。苔斑凝暈侵玉烏。魚鑰沈々夜不銷。三十六宮春月白。君王龍顏霜上髭。迎吾一咲歸何遲。塞塵吹老春風面。方似當初畫圖時。俯首不知寶叙罩。





觸銀燭高花墮。蘧然氈帳曉色明。帳外河冰裂有聲。

**講方** 延壽の妖血已に碧と爲る、苔斑暈を凝して玉烏を侵す、魚鑰沈々夜銷さず、三十六宮春月白し」君王龍顏霜髭に上る、吾を迎へて一咲歸ること何ぞ遲き、塞塵吹き老ゆ春風の面、方に當初畫圖の時に似たり、」首を伏して知らず寶釵の罩るゝを、銀燭に觸して高花墮つ、」蘧然氈帳曉色明なり、帳外の河冰裂けて聲あり。

## ○梅庵小集咏竹主人愛楊誠齋詩因戲擬其體

雨催新竹幾番生。養就翠光旋滿庭。到得

千竿蔽空日。却將雨點一齊青。

讀方　雨新竹を催して幾番生ず、翠光を養ひ就して旋て庭に滿つ、千竿空を蔽ふの日に到り得て、却た雨點を將て一齊に青し。

傍窓栽竹幾竿横。夜靜時爲撼々鳴。不問是風將是雨。愛渠常和煮茶聲。

讀方　窓に傍ひ竹を栽ゑて幾竿横ふ、夜靜にして時に撼々の鳴を爲す、問はず是の風と是の雨とを、愛す渠の常に煮茶の聲に和するを。

○咏櫻花二首

註　撼々　落葉の聲をいふ

注意　山陽は竹聲煮茶の聲に和するを愛すれど、余は寧ろ山陽の風流を愛す。

註　霞綺　謝靈運の詩に「餘霞散じて綺と爲る」とあり

注意　櫻花桃李と妍を爭ふに





懶しと爲す、丈夫の自重自愛亦此の如くならざる可らず。

註　蜀樹　海棠花をいふ　洛花　牡丹花をいふ

碧雞　陸放翁の詩に「奇を搜り勝を選んで日夜忙はし、惟た燕京碧鷄坊のみならず、暮歸奚童錦囊を負ふ、路人爭ひ見る放翁の狂」蓋し町名なり

層層霞綺襯仙綃。每怕春風相動搖。豐艶尤宜銀燭照。輕狂時向錦茵瓢。氷肌新浴粉猶膩。玉頰微醺紅欲潮。獨立東方長擅美。懶從桃李競芳標。

讀方　層層たる霞綺仙綃に襯く、毎に怕る春風相動搖するを、豐艶尤も銀燭の照すに宜しく、輕狂時に錦茵に向つて瓢へろ、氷肌新に浴して粉猶に膩し、玉頰微に醺して紅潮せんと欲す、獨立して東方長く美を擅にし、桃李と芳標を競ふに懶し。

豐肌弱骨好容光。管領春風長擅場。蜀樹心甘來作婢。洛花顏厚却稱王。帳圍嬌影春雲暖。燭照殘粧晴雪香。一朶如教放翁見。碧雞當悔狂顛狂。

讀方　豐肌弱骨好容光、春風を管領して長く

場に擅にす、獨樹心甘んじ來つて婢と爲り、洛花顏厚く却つて王を稱す、帳嬌影を圍んで春雲暖かに燭殘粧を照して晴雪香し、一朶如し放翁をして見せしめば、碧鷄當に悔ゆべし狂せしを。

○咏牽牛花

幾朶瑠璃露欲流。曉風微動弄輕柔。黃花應約爲兄弟。讓與東籬末上秋。

讀方 幾朶の瑠璃露流れんと欲す、曉風微動して輕柔を弄す、黃花應に約して兄弟と爲るべし、讓與す東籬末上の秋。

偷得天孫碧玉巵。銀灣宴罷曉初回。知也宿醉困無力。爲借節枝扶起來。

註 黃花菊の花なり 東籬陶淵明菊を東籬に栽ゑて以て觀賞す

註 宿醉二日醉ひなり

注意 牽牛花の楚々と籬に倚り竹に纏れるを見て牽牛の宿醉困して力なきに譬ふ、酒仙の好比喩。





注意 此一首菅茶山寫實の詩風に酷似す、今日の寫實を稱するもの果して顏色ありや否や。

註 參差雜ばり交る貌をいふ 鵝溪鵝溪絹は梓州鹽亭縣より出づ尤も良也

注意 是れ詩人の善謔なり

讀方 天孫碧玉巵を偷み得て、銀灣宴罷み曉初に回る、知る也宿醉困して力無きを、爲に節枝を借りて扶起し來る。

○題石山旗亭

湖樓坐看雨如絲。獵獵風蒲拂釣磯。認得跳珠千點裡。高跳幾點是魚飛。

讀方 湖樓坐看すれば雨絲の如し、獵獵たる風蒲釣磯を拂ふ、認め得たり跳珠千點の裡、高跳幾點是れ魚飛なるを。

○墨竹

君家窓竹玉參差。愛護寧容俗眼窺。何物畫工偷樣去。鵝溪絹上著橫枝。

讀方 吾家の窓竹玉參差たり、愛護寧ぞ容さん俗眼

の親ふを、何物の畫工ぞ樣を偷み去る、鷄溪絹上橫枝を着す。

○盆荷

風搖翠蓋雨跳珠、幾點嫣紅賦玉膚、剪取天機雲錦片、瓦盆數尺小西湖。

讀方　風翠蓋を搖して雨珠を跳らす、幾點の嫣紅玉膚に賦る、剪取す天機雲錦の片、瓦盆數尺小西湖。

○欲遊北山雨不果小酌齋中題

檐聲簌々意踟躕、欲出還嫌泥路迂、棄向西窓賒小醉、臥看一幅雨山圖。

註　翠蓋　蓮を指す　西湖　西湖支那に在り風景絶佳也湖中蓮あり

註　簌々　雨の澤山に落つる音なり

注意　詩人は適意を尚ぶ、必すしも郊外と窓前とを問はず





特に況んや雨聲蕭々の裡酒を行りつゝ一幅雨山の圖を展ぶるに於てをや。

註　紅塵堆裡　俗世間の人事繁忙の裡といふ意

注意　何等の好詩ぞ

註　岸蘆　岸邊の葦なり

注意　山陽亦放浪生活の趣味

讀方　檐聲簌々意踟躕す、出でんと欲して還た嫌ふ泥路の迂なるを、棄てゝ西窓に向つて小醉を賒ひ、臥し看る一幅雨山の圖。

○題畫山水爲小石國手

紅塵堆裡得閑難、且寄幽心圖畫間、香爐茶殘客初散、小窓明處看春山。

讀方　紅塵堆裡閑を得ること難し、且く幽心を寄す圖畫の間、香爐茶殘して客初めて散じ、小窓明なる處春山を看る。

○漁歌子二闋

釣罷秋風鳴岸蘆、蓼花影外夕陽餘、兒暖酒婦亨魚繫舟是處是吾廬。

を喫し得たり。

註 魚梶 魚を漁る道具なり 蟹簾 アジロを いふ

注意 漁夫の淡生活正に此の一篇に盡く。

註 棋伴 圍棋の伴をいふ、 楸枰 碁盤なり

注意 此亦實景實狀也、而して又簡易生活の體を得たるもの也。

讀方 釣罷んで秋風岸蘆に鳴る、蓼花影外夕陽餘ろ、兒酒を暖め、婦魚を烹る、舟を繫ぐ是の處是れ吾廬。

買酒歸來路欲迷。秋潮帶雨已平堤。魚梶沒蟹簾低。釣舟移繫荻州西。

讀方 酒を買うて歸來すれば路迷はんと欲す、秋潮雨を帶びて已に堤に平なり、魚梶沒し、蟹簾低し、釣舟移し繫ぐ荻州の西。

○題畫

山窻雨過歇蟬聲。瓦鼎猶爲蚯蚓鳴。林日已斜棋伴散。一簾樹影到楸枰。

讀方 山窻雨過ぎて蟬聲歇む、瓦鼎猶ほ蚯蚓の鳴を爲す、林日已に斜にして棋伴散じ、一簾の樹影楸枰に到る。





註 介石 紀州の畫人名は野呂隆、山水を能す 皴染 芥子園に淡く鋭筆を以て横に臥せ惹いて之を取るを皴といふ、と要するに畫法也 倪迂 元の倪瓚畫人也能く古意を含む潔癖あり人呼んで倪迂といふ 范緩 宋の范緩畫人也、性溫厚大度あり、名は中正、字は仲立 粉本 畫稿なり此にては モデルの意味也

註 咿唔 讀書の聲 檐樹 軒端に在る樹

注意 此亦シシブル、ライフの好タイプなり。

○題介石居士畫山

石翁皴染貌孱顏。品在倪迂范緩間。南海由來多秀絕。不知粉本是何山。

讀方 石翁の皴染孱顏たる貌づくろ、品は倪迂范緩の間に在り、南海由來秀絕多し、知らず粉本是れ何の山なるを。

○題畫

溪聲作意和咿唔。檐樹禽棲日落初。欲趁餘明了閑課。倚軒擊起讀殘書。

讀方 溪聲作意咿唔に和す、檐樹禽棲むは日沒するの初、餘明を趁うて閑課を了せんと欲す、軒に倚って擊起す讀殘の書。

註 漆園 莊子の號にして莊子曾て漆園の吏となり胡蝶を夢む 一尺黃花 高き菊の花也

注意 詩題既に西歐詩中のもの隨つて想亦西歐詩人の如くならざるを得ず、而かも一片簡約の文字盡し得て餘すなき處、西歐詩人の比に非ず。

註 髻鬟 山の形恰も髻鬟を束れたるが如きなり 渺茫 廣大模糊なるをいふ

注意 詩人多く奇想の神來を信ず、山陽亦これに洩れずといふべし。

○秋蝶

漆園夢覩已秋霜、雙翅誰憐褪粉光。一尺、黃花飛不到、曾追春色過隣墻。

讀方 漆園夢覩むれば已に秋霜、雙翅誰か憐む紛光褪せたるを、一尺の黃花飛べども到らず、曾て春色を追うて隣墻を過ぐ。

○題自畫山水

分明昨夜夢青山。幾朶、峰容束髻鬟晨起呼童急磨墨寫來半墮渺茫間。

讀方 分明昨夜青山を夢む、幾朶の峰容髻鬟を束ぬ、晨起童を呼んで急に墨を磨す、寫し來つて半ば墮つ渺茫の間。





註 研坳 硯なり 餘瀋 餘滴といふが如し

注意 山陽此時歳三十八

○又

客窓作字墨頻乾。自咲閑身終未閑。晩際研坳餘瀋在。又將渴筆寫秋山。

注意 客窓字を作つて墨頻に乾く、自ら笑ふ閑身終に未だ閑ならざるを、晩際研坳餘瀋在り、又渴筆を將つて秋山を寫す。

丁丑

○余愛東山、秀色毎日行飯上銅駝橋望之一日忽得東山如熟友、數見不相厭、句歸家足之成

十六韵

註 青澂 澂は澄也清かに澄めるをいふ 偃

東山如熟友。數見不相厭。晨氣喜青澂。暮

臥嵐雪の句に布團着て寢たる姿や東山とあり　前後襜論語に衣の前後襜如たりと襜とは正しき貌なり　情岸通鑑に宋玉岸幘跣足とあり註に額を露すを岸といひ、髮布を幘といふ、とあり　巾塾郭林宗雨に遇ひ巾一角を折る、時人之に倣うて折角巾を作る　生鄙吝世說に三日黃叔度を見ざれば鄙吝の心復た生ずとあり　雲雨杜甫の詩に「手を翻せば雲と爲り覆へせば雨と爲る」とあり、人情の反覆常なきをいふ　久要論語に久要平生の言を忘れず、とあり、註に久要は久約也とあり　丈人行漢書匈奴傳に漢天子我丈人行、とあり註に丈人は老を尊ぶの稱、行は猶ほ輩行と謂ふが如し、とあり　歉五車韵端に食滿たざる也とあり　又不足の貌也

姿愛紫艶端莊含温和綠玉無微玷誰比
偃臥頹吾視前後襜晴日其快暢如醉酒
味醨雨時是恙疾似覩眉宇斂晴雨俱理
笻幘岸又巾塾疎濶生鄙吝對晤當鍼砭
唯恨居城市離隔每相念有時屋宇間瞥
然見半面雲雨手翻覆久要獨可驗於我
丈人行俯就眞愧忝相逢便一咲欲別又
相眷吾行山亦行有如負且劒吾來餐秀
色七歲未屬饜作詩薄相貽淺語君莫歉

**訓方**　東山塾友の如く、數ば見て相厭かず、晨氣青澂を喜び、暮姿紫艶を愛す、端莊溫和を含み、綠玉微玷無し、誰か比ず偃臥し頹ると　吾は視る前後の襜





**注意**　山陽、東山を見ること知己の如く、美酒の如く、情婦の如し。隨つて東山の山陽に與へたる影響感化なるものありとせば、其は蓋し彼が詩才の圓滿なること其の一にして多情多恨は又其の二なるべく、其の他冥々の裡に作用したるもの枚擧に遑あらざるべきや必せり。

**註**　繰車　糸繰の車也　軋　軋車の軋（キシ）る音なり

たるを、晴日には其れ快暢、酒味の醨なるに醉ふが如し、雨時には是れ恙疾、眉宇の斂るを視るに似たり、晴雨俱に節を理め、幘岸又巾塾、疎濶鄙吝を生じ、對晤鍼砭に當る、唯恨む城市に居て、離隔每に相念ふを、時有つて屋宇の間、瞥然半面を看る、雲雨手の翻覆、久要獨り驗すべし、我と丈人行く、俯就眞に愧忝、相逢へば便ち一咲す、別れんと欲して又相ひ眷ひ吾行けば山亦行く、負と劒との如き有り、吾來つて秀色を餐ひ、七歲未だ屬饜せず、詩を作つて淺語君に歉ふ莫れ。

## ○蠶婦詞　王建體

綿繭黃絲繭白小姑揀繭大姑煮繭厚絲長眞可懌繰車軋軋疾於風小姑大姑頭

注意 チャーレス、ワゲ子ル慈母の終日繰車の事に兀々として何等の不安なきを見、蹴然悟る處あり、後シンプル、ライフを公にして世の賞讃を博す、若し夫れ世の讀者にして眼孔能く此詩を讀破し得ばかの人生問題の如き直に氷解し去らんのみ。

註 晨光 曉の光なり 塗鴉 墨を黒々と塗ることなり

注意 詩人無邪氣の態想ふべし、バーンスの如く木根を斷ちて悲まんより、寧ろ一花抽んづるを見て其の喜悅を記すの勝れるに如かず。

如蓬笑他稚女總無幹貪看破繭蛾雌雄。

讀方 綿繭黄に、絲繭白なり、小姑蔗を揀び、大姑は煮る、繭厚く絲長うして眞に懌ぶべし、繰車軋軋風よりも疾く、小姑大姑頭蓬の如し、笑ふ他の稚女總て幹する無く、貪り看る繭を破る蛾の雌雄を。

○齋中書事

窓納晨光簾影斜。汲泉洗硯試塗鴉。朝來喜事無人識。曾養盆蘭抽一花。

讀方 窓晨光を納れて簾影斜なり、泉を汲み硯を洗うて塗鴉を試む、朝來の喜事人の識る無し、曾養の盆蘭一花を抽んづ。

○中秋同武紀二子觀月銅駝橋





註 絲竹 樂器なり

注意 山陽の詩に現るゝ所總て印象明瞭「月滿灘心石可數」の一句の如き蓋し其の一例也。

註 有訣 秘訣あることなり 霞光 日光の作用に

余與二子前後入京闕歲暑同
豆莢秋肥芋魁柔。借牀河亭酒如油。樓臺何處不絲竹。吾曹亦爲觀月遊。同寓京城今幾許。六年無此好中秋。話舊不識夜已午。月滿灘心石可數。

讀方 豆莢秋肥えて芋魁柔なり、牀を借りて河亭酒油の如し、樓臺何の處か絲竹ならざる、吾曹亦た觀月の遊を爲す、同じく京城に寓して今幾許ぞ、六年此の好仲秋なし 舊を話して識らず夜已に午なるを、月は灘心に滿ちて石數ふ可し。

○看月歌

日已沒月未生。霞光褪盡烟氣横。烟沈山

依りて生ずる霞なり、而して日沈み漸く煙氣の横ばるは空氣中の水蒸氣冷ゆると共に霧と爲り露と爲らんとするに因る

注意　劉禹錫の詩に「詩家の清景は新春に在り」と、月を看る亦妙處は初出の際に無かろ可らず、詩人賞春の訣は之れ嚮て詩家看月の祕訣たり。

注意　山陽が風流の起臥想ふべし、之れ亦詩人適意か尊ぶに出づ。

黑月漸吐、稍上數尺便發明看月有訣誰能契。妙處全在初出際。團團玉鏡高逾磨。

南樓北樓盡絃歌。

讀方　日已に沒し、月未だ生ぜず、霞光礎盡して烟氣横ばろ、烟沈み山黑うして月漸く吐く、稍や上ること數尺傾ち明を發す、月を看る訣あり誰か能く契らん妙處全く初出の際に在り、團々たる玉鏡高逾よ磨せば、南樓北樓盡く絃歌。

○夜歸

會散三更歸到家。月搖窓竹影横斜。欲眠旋復披衣起。呼醒山妻對煮茶。

讀方　會散じ三更歸つて家に到る、月窓竹を搖して影横斜、眠らんと欲して復衣を披き起つ、山妻を呼





註　狐裘　狐のカワゴロモをいふ　蝟鬚　蝟の如き鬚　寢皮　左傳に其の肉を食ひ寢れて其皮に處ると也

注意　山陽一流の筆法、悚々人に逼るものあり。

醒し對して茶を煮る。

○題射獵圖

弓挽强箭用長。狐裘蝟鬚馬龍驤。箭纔離箙獸已僵。馬足蹂躪北漠草。兎死鳥盡弓未藏。弓未藏。又逐鹿。中原無人爭利鏃。獲鹿寢皮食其肉。

讀方　弓は强を挽き、箭は長きを用ゆ、弧裘蝟鬚馬龍驤、箭箙を離れて獸已に僵る、馬足蹂躪す北漠の草、兎死し鳥盡きて弓未だ藏せず、弓未だ藏せず、又鹿を逐ふ、中原人の利鏃を爭ふ無し、鹿を獲皮に寢ね其の肉を食ふ。

○竊書所感

註 棣蕚 詩經より出づ兄弟互に睦じき情をいふ

升平 太平なり

註 朱考亭 大學、中庸、論語、孟子を四書と稱す、朱子自ら曰く平生の精力盡して此の書に在りと

韓岳 韓世忠、岳飛

轂 玉篇に弓努を張るとあり

棣蕚爭開執後先龍飛或躍忽天淵。官家不識修何德。坐享升平四十年。

讀方 棣蕚 爭ひ開く 執か後先、龍飛び或は躍つて 忽ち天淵、官家識らず何の德を修むるを、坐して 升平を享く四十年。

○題朱考亭先生像

韓岳驅馳虎嘯風。四書獨費畢生功。一張萬古科場轂。無數英雄墮此中。唐太宗觀進士榜曰天下英雄墮吾轂中

讀方 韓岳驅馳し虎風に嘯く、四書獨り費す畢生の功、一たび萬古科場の轂を張らば、無數の英雄此の中に墮つ。

○詠拒霜座有女弟子細香





註 拒霜 菊花なり

注意 好諷刺

註 封泥 漢書の註に曰く、天子の璽皆紫を以て之を封す

蠕蝀 虹をいふ

飲澗谿 飲酒筆談にいふ「世に傳ふ虹能く澗谿に入つて水を飲む」云々とあり

注意 讀者宜しく前後の照應を味ふべし。

亭亭獨立拒霜威。不怨東風誤嫁期。自有芳姿拋不得。聊和朝露染胭脂。

讀方 亭々獨立して霜威を拒ぐ、怨みず東風嫁期を誤るを、自ら芳姿の拋ち得ざるあり、聊か朝露に和して胭脂を染む。

○以舊藏紫石硏贈世張付以此詩。

吾硯淡紫類封泥。一道赤絲橫其臍。恍訝烟凝暮山西。有蠕蝀截雨低。吾曾著文坐臥携。思渴動思飲澗谿。不如與汝比范綿。出入視之「與吾齊要。見汝吐氣如萬丈彩霓。化向筆底瀉玻瓈。

註 夜餅 夜間の花餅也 暗香疎影 林和靖の詩に「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏」と、

注意 吾硯淡紫封泥に類す、一道の赤絲其の臍に横ばる、恍として訝む煙凝る暮山の西、蟠螭雨を載つて低るゝ有るかと、吾曾て文を著し坐臥に携ふ、思渇して動もすれば澗谿に飲まんと思ふ、加かず汝に與へて范綿に比せんには、出入之を視ること吾と齊うせよ、見んと要む汝氣を吐くこと萬丈の彩霓の如く化して筆底に向つて玻璃を瀉ぐを。

○謝人送梅花

病怯寒威不出門。一枝忽見返春魂。夜餅淺挿伴衾枕。夢繞暗香疎影村。

讀方 病寒威を怯れて門を出でず、一枝忽ち見る春魂を返すを、夜餅淺く挿して衾枕に伴ふ、夢は繞る暗香疎影の村。





註 端研 端溪石にて造りたる硯なり

註 董 宋の董源字は叔達又の字は北苑、山水及び牛虎を善す 巨 釋巨然 宋江寧の人山水を善くし尤も野逸の景に秀づ、董源を祖述して妙理を傳ふ 倪 黄元の黄公望也字は子久其の父九十にして始めて倪黄を生む、一峯と號し又大

○余購得端研一枚賦此與硯賈

文作

玉含芒角紫煙生。養我詞鋒縱又横。誰道墨池如許狹。個中竢視掣長鯨。

讀方 玉芒角を含んで紫煙生ず、我詞鋒を養ふ縱又横、誰か道ふ墨池許の如く狹しと、個中竢ち視よ長鯨を掣するを。

○題自畫山水六首

董巨倪黄眼未看。唯存磊磈自巉岏。胸中粉本依吾樣。休道人間無許山。

讀方 董巨倪黄眼に未だ看ず、唯磊磈を存して自ら巉岏、胸中の粉本吾樣に依る、道を休めよ人間許

痴道人とも號す

註 北苑 芥子園に云ふ北苑の峯巒清深意趣高古多く披麻皴を用ゆ、と北苑は董源の字なり 披麻 披麻は山に畫く皴の名也 南宮 米芾字は元章襄陽の人、世に大米と稱す、其の子米友仁字は元暉、世に小米と呼ぶ又南宮と號す 落茄 茄は痴に通ずカサブタの落ちたる樣な筆點をいふ

註 側筆 芥子園云ふ雲林石は關同に倣ふ然れども同は正鋒を用ゐ倪は側筆を用ゆと

註 王洽 唐の王洽潑墨を善くし山水を畫く故に人之を王の潑墨と稱す。

註 鬆 東涯燭談に「近世種樹の書及筆法の書に多く鬆字を用ゆ、大抵物のヤワラカナルことと見えたり、然れども字書に明解なし、品字箋には髮の亂れたる貌とあり、土のヤワラカにしてホカ〳〵したる處を土鬆といふ」と見えたり

註 鶴樵 元の王蒙字は叔明黄鶴山樵と號す素と畫を好む然れども研を用ゐず惟に筆意を假つて以て天機の妙を露す

山依北苑學披麻。樹倣南宮作落茄。筆筆自知難入格。眼高其奈手低何。

讀方 山は北苑に依つて披麻を學び、樹は南宮を倣うて落茄を作る、筆筆自ら知る格に入り難きを、眼高くして其れ手の低きを奈何せん。

研餘焦墨手方閑。試學倪家側筆山。始信雲林眞面目。本來不在點皴間。

讀方 研焦墨を餘して手方に閑なり、試に學ぶ倪家側筆の山、始めて信ず雲林の眞面目、本來點皴の間にあらず。

墨瀋潑成王洽暈。毫尖掃取董源皴。漫將古法供遊戲。非是舐筆和墨人。

讀方 墨瀋潑し成す王洽の暈、毫尖掃取す董源の皴、漫に古法を將て遊戲に供す、是れ毫を舐り墨を和するの人に非ず。

用墨疎々用筆鬆。畫成皴染淡如空。貌山匹似美人面。眉暈頰渦髣髴中。

讀方 墨を用ゆること疎疎筆を用ゆること鬆なり、畫き成す皴染淡として空の如し、山を貌つて匹似す美人の面、眉暈頰渦髣髴の中。

日射書窓墨半焦。風吹醉面酒差消。滿懷逸氣無舒處。漫倚枯毫學鶴樵。

讀方 日書窓を射て墨半ば焦る、風醉面を吹いて酒差消す、滿懷の逸氣舒ぶるに處無し、漫に枯毫に倚つ

て鵜樵を學ぶ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

子成頃鈔近作絕句寄示於余余知子成、高才不在小詩偶然爲此亦多横空之語入京以來乃爲所謂女郎詩何哉豈求其入時乎抑不覺素衣成緇乎嗚呼此猶彼高觀行酒汗出之時其腹固難測焉。

晉師敬批

【卷之二終】





**注意** 山陽此の時、既に父春水を亡ひ喪に居ること三歲死者に事ふること宛も生者に事ふるが如し、蓋し時人の難しとする處、而して今や餘憂を九州溫暖の地に向つて霽らさんと欲す、詩囊豐富を加ふるは固より、餘憂排し得て筆端更に豪なるものあらん。

# 山陽詩鈔卷之三

賴襄子成著
蜂谷柳莊註

## 西遊稿上

余居憂三歲。戊寅歸展既祥頗覺廓然。遂遊鎭西以吟歌排遣餘憂衝吻溢囊而行筐所齎除手鈔杜韓蘇古詩三卷。詩韵含英一部是以粗率倍常矣今胠槖第錄不甚删潤要存當時興會以供他日憶念而已。山陽外史賴襄識

○下江

註 疎篷（マバラなる舟のトマ也）阿孃（母親）

なり 發程（出立すること）

注意 愈よ程に上る、讀者方に多大の囑望を爲して可なり

註 離緒（別離の情緒）瓜皮（瓜皮船輕快なる舟なり）

評 茶山曰く、題して津口の竹枝と爲す可し。

注意 之れ尋常詩人の道破し得ざる處なり。

撼枕江聲又櫓聲。疎篷漏雪睡難成。阿孃屈指俟吾久。何識今宵初發程。

讀方 枕を撼す江聲又櫓聲、疎篷雪を漏して睡成り難し、阿孃指を屈して吾を俟つこと久し、何ぞ識らん今宵初めて程を發するを。

○發大阪小竹確齋送至尼崎

商船銜尾各停橈。中有瓜皮趁早潮。離緒紛紛難語盡。轉頭已過十餘橋。

讀方 商船尾を銜んで各の橈を停む、中に瓜皮早潮を趁ふあり、離緒紛々語り盡し難し、頭を轉ずれば已に過ぐ十餘橋。

○過岡山宿梅坡家





註 未期程（日に何里と道程を限らざること）

註 瘢痍（後漢註に金瘡を瘢痍といふとあり百戰瘢痍は唐の尉遲恭傳中の語也）未酢功（後三年の役、廷議以て私鬪と爲し其の功を賞せず）龍鍾（唐詩訓解にいし）

ふ、行いて進まざるの貌、一に又竹名衰老の態をいふ、宛も竹の枝葉の搖々として自ら禁持する能はざる貌よりいふ也）白首（陳子昂の詩に「憐むべし聽馬の使、白首誰が爲に雄なる」とあり）

歸心雖急未期程。雨則淹留晴則行。剪燭不辭談徹曉。春星無數繞檐明。

讀方 歸心急なりと雖も未だ程を期せず、雨ふらば淹留し晴るれば行く、燭を剪つて辭せず談曉に徹するを、春星無數檐を繞つて明なり。

○題八幡太郎獻弓鎭夢魔圖

百戰瘢痍未酢功。龍鍾白首爲誰雄。此身不及黑蛇影。得近五雲香暖中。

讀方 百戰瘢痍未だ功に酢いず、龍鍾たる白首誰が爲に雄なる、此の身及ばず黑蛇の影に、近くを得たり五雲香暖の中。

○到鄉從杏坪翁遊其山園翁管

郡務多治績

連鋤强梗稱神明四郡何處不底平却是家園無暇理賤蓬惡竹滿階生

註 神明 漢の班白、定襄の大守と爲るや郡中神明と稱す 鋤强梗 淮南子原道訓に其の强梗を鋤くとあり、字典には梗は音鮫猛也とあり、蓋し杏坪翁曾て郡縣の豪猾を勦し邑人目して雷公といふ又直に賴光ともいふ其の山に入つて豪を捕ふるを以て也、賴光は大江山に入り酒呑童子を平げし人也

註 欲斑 斑白ならんとする事

注意 山陽西遊の途に着く、恰も之れ西歐の詩人が南歐の靈地を巡遊するにさも似たり

○發藝

故紙埋頭頭欲斑裹糧一日出鄉關要收燈底看書眼去閑平生未見山

讀方 故紙頭を埋めて頭斑ならんと欲す、糧を裹んで一日鄉關を出づ、要めて燈底看書の眼を收め、去つて閑す平生未見の山。

○周防道上





註 青始了 杜甫の詩に「宗其れ何如、齊魚(山名)青未だ了らず」未だ山光の沒せざるをいふ 黛光 山色なり

讀方 詩人多く虛を言ふ、然るに此詩を吟誦して感ずるは內海の形勢一讀釋然たることなり、即ち藝薇の沿岸は、犬牙錯綜して四國路の翠巒指呼の間に現はるるも一度び周防に入るや渺茫たる燧灘を中間に橫へて又讃豫の靑巒を見ず、沿岸亦岬角島嶼に乏しく豐前豐後の黛光僅に天際に流るゝを見るのみ。

註 臺道 地名 鴻爪春泥 鴻雁爪を雪泥に印するも雪解け泥乾けば其の跡無し 芝海 東京品川灣の事也

藝薇沿海路紆回常見豫峯雲外堆看到周防青始了豐山代送黛光來

讀方 藝薇海に沿うて路紆回す、常に見る豫峯雲外に堆さを、看て周防に到れば靑始めて了す、豐山代つて靑を送り來る。

○臺道宿上田翁家爲題谷文晁畫芝海圖

東遊回首廿年餘鴻爪春泥跡有無何料周芳千里外忽看芝海曉晴圖

讀方 東遊首を回らせば廿年餘、鴻爪春泥跡有や無や、何ぞ料らん周芳千里の外、忽ち看る芝海曉晴の圖。

註 厚狹市 長州の驛名 赤關 下の關 車螯 大蛤なり

註 長街如帶 馬關の地たる山海に蹙つて市街は長く南北に擴がる、長街帶の如しとは一句能く其の地形を盡し得たるもの也 潮頭 ナミガシラなり

○厚狹市

驛亭煙火太蕭騷。山勢西奔如亂濤。玄海赤關知不遠。行逢商擔賣車螯。

讀方 驛亭の煙火太だ蕭騷、山勢西に奔つて亂濤の如し 玄海赤關知る遠からざるを、行ゆく逢ふ商擔車螯を賣るに。

○赤關雜詩

長街如帶蘸波光。面面青山護萬檣。莫怪潮頭駛於箭。厓門一出是玄洋。

讀方 長街帶の如く波光に蘸す、面面の青山萬檣を護る、怪む莫れ潮頭箭よりも駛きを、厓門一たび出づれば是れ玄洋。





註 文字關 一名門司關なり 水濱 左傳中の文字 輕鷗 輕く飛ぶ鷗のこと

註 桅竿 船のマスト也 夜茫茫 夜暗 彷彿 同意也 依稀 くして目當てもつかざるをいふ 漿 酒也

註 如囊括 囊の口を締めたるが如し 平氏如魚 孟子に淵を爲つて魚を驅つものは獺也とあり 皷聲死 唐の常建が王將軍を吊ふの詩に戰餘落日黃に、軍敗れて皷聲死す」とあり 貂蟬兜鍪と合

文字關頭澹夕暉。彌陀寺畔雨霏霏。水濱欲問前朝事。唯有輕鷗背我飛。

讀方 文字關頭夕暉澹く、彌陀寺畔雨霏霏たり、水濱問はんと欲す前朝の事、唯輕鷗我に背いて飛ぶあり。

幾點漁燈亂月光。桅竿無影夜茫茫。依稀認得泊船處。煙外有人呼賣漿。

讀方 幾點の漁燈月光に亂る、桅竿影無く夜茫茫、依稀認め得たり泊船の處、煙外人有り賣漿を呼ぶ。

○壇浦行

幾旬之山如龍尾。蜿蜒曳海千餘里。直到長門伏復起。隔海豐山呼欲應。帆檣林立北岸市。吾自平安來行循。山勢與之偕驚

して文武をいふ　鬼武源頼朝の小字也　鬼餒子孫祭る者なきをいふ　豚犬子孫のことなり、

**注意**　本來を言へば中國山脈は支那の大陸より東走して九州の北端に上陸し馬海關峽に

看海門潮勢如奔雷。屈曲與山相擊排。南望豫山青一髮。海水漸狹如囊括。想見九郎驅敵來平氏如魚源氏獺。岸蹙水淺誰得脫。海鹿吹波鼓聲死。穉龍出沒狂瀾紫。敗鱗蔽海春風醒。蒼溟變作桃花水。獨有介蟲喚姓平。沙際至今尚横行。兜鍪貂蟬兩一夢。唯見海山蒼蒼連。神京山日落海如墨。何物遮船夜啾唧。吾語寃魂且休哭。汝不聞鬼武之鬼亦不免餒。身後豚犬交相食。

**讀方**　畿甸の山龍尾の如く、蜿延海に曳くこと千餘里直に長門に到つて伏し復た起つ、海を隔つるの豐山呼





伏して復た起ち、更に東方に馳つて琵琶湖の北岸に沒せるものなるも、山陽は畿甸即ち天子の居を以て國の中心としたれば、中國山脈を東より西の方に走りたるものゝ如く思惟したり、蓋し當時に於て至當の見なるのみならず、山河の形勢を一瞥の下に按じ盡して後世の研究と大なる齟齬を見ざるは全く敬服の外なきなり。

べば隱へんと欲す、帆檣林立す北岸の市、「吾平安より來り、行ゆく山勢に循ひ之と偕にす、鶩き看る海門の潮勢奔雷の如きを、屈曲して山と相擊排す、」南豫山を望めば青一髮、海水漸く狹つて囊括する　が如し、想見す九郎敵を驅り來るを、平氏魚の如く源氏は獺、岸蹙り水淺くして誰か脫するを得ん」海鹿波を吹いて鼓聲死し、穉龍出沒して狂瀾紫なり、敗鱗海を蔽つて春風醒く、蒼冥變じて桃花の水と作る、獨り介蟲姓平を喚ぶあり、沙際今に至つて尚ほ横行す、兜鍪貂蟬兩なから一夢、唯見る海山蒼蒼神京に連るを、」山日落ち、海墨の如し、何物ぞ船を遮つて夜啾唧す、吾寃魂に語らん且く哭するを休めよ、汝聞かずや鬼武の鬼亦餒うるを免れず、身後豚犬交こも相食むを。

註 火海肥州の海也 富山富士山

列缺楚辭に「上つて列缺に至り降つて大岳を望む」蓋し雷神なり 蹄涔牛の蹄の跡に水の溜りたるをいふ

注意 山陽此の時尚甚だ酒を嗜まずと雖も、詩囊膨脹するに隨つて酒腸また漸く肥ゆるものあり、且又咏ずる處茶山が所謂女郎詩の類多きを占むるに至りたるは之れ果して何の徴ぞ、李白が酒一斗詩百篇の態を學ぶか、或はまた時世非にして心中の磊塊酒ならずんば澆ぐ能はざるものあるに依るか、後世容易に揣摩するを許さずと雖も、夫れ或は後者にあらんか。

○遇大含師師將東遊上岳賦此爲贈

吾泛火海君富山。相逢握手赤馬關。雖無酒腸海不測。自有詩格山難攀。把醒眼評山海。采眞歸來重盡歡。取吾火海火。融君富山雪。煎君雲華喫七椀。四腋生風凌列缺。與君下視大八洲。海如蹄涔山如垤。

讀方 吾は火海に泛び君は富山、相逢ひ手を握る赤馬關が關、酒腸海の測らざるなしと雖も、自ら詩格山の攀ぢ難きあり、共に醒眼を把つて山海を評し、采眞歸來して重ねて歡を盡さん、「吾が火海の火を取つて君が富山の雪を融き、君が雲華を煎て七椀を喫せん、四腋風を生じて列缺を凌ぎ、君と下視せん大八洲、海蹄涔の如く山垤の如し。





註 筑山筑前筑後の諸山也 豐山豐前豐後の山を いふ 那裡あの中と の意也 半月半ケ月の盈虛に非ず

注意 美酒を戀うて馬關に淹留せる詩人の痴態眞に愛すべきものあり、固より赤馬關には美酒の産する無しと雖も、攝津の船往來頻繁なるを以て灘伊丹の酒には事を缺かざりしと見ゆ。

○赤關醉歌

筑山淡。豐山濃。煙紫雲翠一重重。吾行應須那裡去。飽攬雲煙盪吾胸。赤關半月伴雁鶩。一水如帶却不渡。問吾底事戀此間。豐筑無酒似赤關。

讀方 筑山は淡、豐山は濃、煙紫雲翠一重重、吾行いて應に須らく那裡に去るべし、飽まで雲煙を攬つて吾が胸に盪ばさん、赤關半月雁鶩を伴とし、一水帶の如きも却つて渡らず、「吾に問ふ底事ぞ此間を戀ふ豐筑酒の赤關に似たる無し。

○戲作赤關竹枝八首

註 先皇安德天皇簪笏女子頭髮の裝飾物なり鷺鷀行一隊の紅裙宛も鷺鷀の行くが如きをいふ

註 蹕天子出入毎に警蹕を爲す蹕は行人を止むるなり蛟宮龍宮なり宮娥宮女なり此處にては倡妓を宮女に比す

注意 赤關の倡妓安德天皇を弔ふ爲め阿彌陀寺に詣づる行景を咏じたるもの。

註 疊々重なり合つたる意中人

可ㇾ憐兒女說ㇾ先皇。幾隊紅粧幾瓣香。簪笏滿前人不ㇾ見。金釵猶作ㇾ鷺鷀行。

（自註）毎歲三月諸倡詣ㇾ阿彌陀寺ㇾ稱ㇾ先帝會ㇾ

讀方 憐むべし兒女先皇を說く、幾隊の紅粧幾瓣香し、簪笏滿前人見えず、金釵猶ほ爲す鷺鷀の行。

託ㇾ蹕蛟宮ㇾ歲幾過。水邊猶見舊宮娥至ㇾ今許ㇾ著ㇾ輕羅襪。應ㇾ記朝天凌ㇾ綠波。

（自註）倡著ㇾ襪他處所無云

讀方 蹕ね蛟宮に託して歲幾か過ぐ、水邊猶ほ見る舊宮娥、今に至つて著するを許す輕羅の襪應に記すべし朝天綠波を凌ぐを。

疊疊春帆破ㇾ海煙。意中人到定今年。明眸一樣凝ㇾ秋水。姉望ㇾ丹船ㇾ妹越船。





情夫丹船赤く塗りた る船なり

注意 之れ山陽得意の詩なりと覺しく彼の新居帖にも載せあるを見る。

註 六連島馬關海峽の出口に在る島五洲五島なり紫石山阿彌陀寺の在る地、硯石を出す、一名紅葉山ともいふ鰌海鰌也、其の背數十里、海底に居り、穴に入れば潮退き空を出づれば水、潮す

註 輕舠快速力の舟急櫓急しく使用せる櫓華城大阪日未ㇾ頽日の西に未だ傾かざるを

注意 自註にも見ゆるが如く內海東西の海潮は備中白石島

讀方 疊々たる春帆海煙を破る、意中の人到るは定めし今年明眸一樣秋水を凝らす、姉は丹船を望み妹は越船。

六連島望五洲波。紫石山通玄海霞。誤愛兒郎好身手。捕鰌平戶不ㇾ歸家。

讀方 六連島望めば五洲の波、紫石山通ず玄海の霞、誤り愛す兒郎好身手、鰌を平戶に捕へて家に歸らず。

輕舠急櫓剪ㇾ波堆。想到華城日未ㇾ頽。欲將別淚隨ㇾ潮去。白石洋頭即却回。

（自註）東西海潮至ㇾ備中白石交退

讀方 輕舠急櫓波堆を剪る、想うて華城に到れば日未

の冲に於て再び逆戻りすること地方の傳說に在り。

註 攝酒 攝津の酒 磊落 石等の集れる貌也 其他二三の意義あり 漂酒也

注意 萬錢を腰にし鶴に乘じて楊州歌舞の地に至りたる人の故事に寄せて此くは歌へり

註 醉眼迷醉 ろる眼にチラすること

注意 赤闌竹枝の上乘なるもの故伊藤公の如き春帆樓上幾度か之を愛吟せられたりと聞く。

註 黃玉顆 橙なり 春蔥 美人の纖

年々攝酒附商舟。磊落萬罌堆岸頭。清醥
尤推鶴字號。駕人醉夢上楊州。

讀方 年々攝酒商舟に附す、磊落萬罌岸頭に堆し、清醥尤も推す鶴字號、人の醉夢に駕して楊州に上る

綠酒紅燈醉眼迷。萬檣影裡月高低。醒來
忽覺身爲客。隔水青山是鎭西。

讀方 綠酒紅燈醉眼迷ふ、萬檣影裡月高低、醒め來りて忽ち覺ゆ身客と爲れるを、隔水の青山是れ鎭西。

藏橙戶戶候東風。和得豚羹味不窮。纖指
剖開黃玉顆。愛他香霧噀春蔥。





指春蔥の如きに比したるなり

注意 纖指黃橙を割りて侑むる美人の姿體、宛も眼前に彷彿す。

註 急艣 速力速き舟なり 一葦 一葉の舟なり、赤壁賦に見ゆ 故人意 朋友知己の心をいふ 過海來 山陽の方より來るなり

注意 山陽の赤闌に滯留するや比較的長きに亘る、是れ必ずしも芳醇を戀ふが爲に非ずして、唯依依たる故人の意あつて袂を分ち難かしりが爲ならんのみ

○發赤闌留別廣江父子。

潮聲交急艣。日色動高桅。一葦乘晴日。三
行覆別杯。山陽皆背指。鎭右迎顏開。唯有
故人意。依依過海來。

讀方 潮聲急艣に交り、日色高桅に動く、一葦晴日に乘じ、三行別杯を覆ふ、山陽皆背指、鎭右迎顏開く、唯故人の意あつて、依依海を過ぎ來る。

○入豐前

註 曾寓曾て宿寓せし處 浮漚水に浮いたる泡沫なり

注意 今日尚ほ九州に入るの旅客は沿道の粉壁、山陽の其れよりも稀なるを認むべし、山陽の詩や決して文人の虚談にあらず。

註 岌嶪文選の註にいふ岌嶪は壯大の貌也と、雕題敵國降伏の四大字を刻しある額のこと

注意 今や朝鮮我國の保護國と爲る、敵國降伏の頃字倍々其の光威を加ふといふべし。

回首猶曾寓。維舟忽別州。人煙過海少。樹色傍山稠。故國雖知遠。今吾便欲愁。醉來還自笑。大地本浮漚。

讀方 首を回らせば猶ほ曾寓、舟を維げば忽ち別州、人煙海を過ぎて少に、樹色山に傍うて稠し、故國遠さを知ると雖も、今吾便ち愁へんと欲ず、醉來還自笑す大地本と浮漚なるを。

○箱碕廟題敵國降伏四大字係延喜宸翰

廟門岌嶪面長瀾。仰見雕題照碧灣。長倚神威伏戎敵。新羅高麗指揮間。

讀方 廟門岌嶪長瀾に面す、仰ぎ見る雕題碧灣を照すを、長に神威に倚つて戎狄を伏す、新羅高麗指揮の間。





註 榮公禪僧榮西なり建仁寺の開祖 舊隱舊き隱遁の場所 夜魚木魚なり

注意 夜行くに白きを踏まずとは之れ聖人の教なるも、松間の白沙自ら夜行に便なるものあるは蓋し山陽の始めて道破し得たる所なるべし呵々。

註 雞黍飯等を仕度して人を饗應すること、論語に「子路を止めて宿す、雞を殺し、黍を爲つて之を食ふ」と、盍簪友の相聚るをいふ 醺酴酒なり 積水廣大なる水をいふ 風樹家語に曰ふ「木靜かなの間。

○醉歸過崇福寺前

旗店扶歸不用燈。松間沙路太分明。榮公舊隱知何處。認得夜魚呼粥聲。

讀方 旗店扶歸するに燈を用ひず、松間の沙路太だ分明、榮公の舊隱知る何の處ぞ、認め得たり夜魚粥を呼ぶの聲。

○龜井元鳳招飲賦贈

藝城分手夢空尋。雞黍今朝喜盍簪。四海文章纔屈指。一杯醺酴且論心。高林擁屋鶴巢穩。積水當窓鵬影沈。風樹知君同我感。酒間有淚暗沾襟。

らんと欲して風止まず、子養はんと欲して親在らず」と、

**注意** 山陽親を喪ひてより懷を青山白水に寄せんと欲するも徒に風樹の嘆あるのみか、酒間尚ほ暗涙の催すあるを免れず、山陽亦多情多恨の人たるなり。

**註** 中酒酒に中てら短檠燈れたるなり衣尚熟生衣は夏の麻衣の類にして熟衣は冬の衣服也、即ち此の一句、暑中に拘らず病氣の爲に衣を厚うしたるをいへるなり

**注意** 山陽此の時尚未だ多く酒を嗜まず、時に趙州を烹るの音を愛すること此の如し、彼が酒量を大にしたるは蓋し四遊以後の事に屬す。

**讀方** 藝城手を分ちて夢空しく尋ぐ、雞黍今朝蓋簪を喜ぶ、四海の文章纔に指を屈し、一杯の醽醁且く心を論ず、高林屋を擁して鶴棲隱れ、積水窓に當つて鵬影沈む、風樹知るや君我感に同じきを、酒間涙あり暗に襟を沾す。

○即事似東道松永子登

幾椀新茶陶客情。昨來中酒廢杯觥。蘆簾日薄搖無影。瓦鼎風微沸有聲。暑路養痾衣尚熟。羈窓作字手常生。閑評畫軸消長書。更欲呼童取短檠。

**讀方** 幾椀の新茶客情陶たり、昨來中酒杯觥を廢す、蘆簾日薄く搖いて影無く、瓦鼎風微にして沸く聲あり、暑路痾を養うて衣尚ほ熟し、羈窓字を作つて手常に生く、閑畫軸を評して長晝を消し、更に童を呼んで短檠を取らんと欲す。





**註** 白蛋卵を霸家臺漢人博多を呼ぶに霸家端陽五月節句臺を以てす のこと也

**註** 客蹤旅し來りた跡をいふ盤桓進難く心率わるゝ貌酒暈斑酒の染み跡と振鰭山宣化天皇の時大伴羅を征せしむるや妾佐用姫別を惜んで松浦山に登り領巾を振る

○重五似從行後藤世張

挿檐蒲葉午風香。白蛋青梅薦客觴。與汝同斟赤關酒。霸家臺下作端陽。

**讀方** 檐に挿さむ蒲葉午風香し、白蛋青梅客觴を薦む、汝と同じく斟む赤關の酒、霸家臺下端陽を作す、

○憶家

客蹤乘興輙盤桓。筐裡春衣酒暈斑。遙憶香閨燈下夢。先吾飛過振鰭山。

**讀方** 客蹤興に乘ずるも輙ち盤桓、筐裡の春衣酒暈斑なり、遙に憶ふ香閨燈下の夢、吾に先んじて飛び

遂に立ち乍ら化して石と作る、即ち松浦山をいふ也

評 茶山曰く、子成四十情痴未だ醒めず。

註 海中道 箱崎に在り一帶の青松海中に突出せるを以て名く

註 文苦 苦心して文を作ること

注意 詩も亦一揮に成れるものと云ふべし。

過ぐ振鷺山。

○同元鳳登高望海中道

松林横截大洋潮、萬疊波間碧一條。此景何緣在西僻、直須奴僕命天橋。

讀方 松林横截す太洋の潮 萬疊の波間碧一條、此景何に緣りて西僻に在る、直に須らく奴僕天橋と命すべし。

○過元鳳題其女少琴墨竹

纖指尖邊龍影横、胸中有竹一揮成、匠心何似爺文苦、萬葉千枝逐次生。

讀方 纖指尖邊龍影横はる、胸中竹あり一揮に成る、匠心何ぞ似ん爺の文苦に萬葉千枝逐次に生ず。





註 竹醉天 五月十三日を竹醉といふ此日を以て竹を植うるに好し、然るに十四日とあるは如何の次第にや

注意 四句共に竹字を挿入して一層の巧緻を添ふ

註 收拾雲煙 紙上に雲煙を畫くこと

點染 墨を點じ筆を染むること

注意 畫を描いて畫師と呼ばるゝを厭ふは本領自ら他にあれば也、必ずしも畫師を卑めたるには非ず。

○五月十四日飲于上村太壽宅

把杯竹底意陶然、正是西窓竹醉天。竹已醒時人却醉、竹風呼起醉人眠。

讀方 杯を把つて竹底意陶然、正に是れ西窓竹醉の天、竹已に醒むる時人却つて醉ふ、竹風呼び起す醉人の眠。

○題自畫山水

收拾雲煙寄戲嬉、峰巒滿幅墨淋漓。休嫌點染妍欠麗、免被人呼做畫師。

讀方 雲煙を收拾して戲嬉に寄す、峰巒滿幅墨淋漓、嫌ふを休めよ點染妍麗を欠ぐを、人呼んで畫師と做さるるを免る。

註 都府樓 菅廟の側、野の中に在り 燥髮 兒童のこと 宰帥 太宰權帥 閑廢 閑地に貶せられたること 銓衡 銓は量、衡は平、人物の銓衡をいふ也 爲鬼爲蜮 詩經註に蜮は短孤なり、沙を含んで以て人影を射ると反側の人に比せるなり 寢廟 五車韵端に天子の居る處を路寢といふ、と蓋し正廟をいふ 岐嶷 高く聳えたること

○謁菅右府祠廟有作

都府樓唯看瓦色。觀音寺獨聽鐘聲。相公此句燥髮誦。今日始向此際行。想見傑構堆畫甍。華鯨雄吼法王城。宰帥虛名實閑廢。思罪却掃掩柴荊。儒生衰黻眞罕事。久矣銓衡論門地。洞知沈痼須良藥。銳意蟠根試利器。酬知何暇恤人言。奮搏自折凌雲翅。爲鬼爲蜮奚足尤。群雞一鶴宜相忌。國瘁天數豈與公。鑿鑑已矣又形弓。世態幾回浮雲變。獨有威德傳無窮。寢廟棟宇彌岐嶷。祀典于今群兆億。顧視府樓空斷礎。寺餘數椽亦傾仄。行人田間拾缺瓦。猶





存相公看時色。

(自註)三善清行勸公乞退公不納逐及於禍、宇多擢公以抑相家之權相家所不欲非唯同列者忌也

注意 山陽一度筆を忠臣の事に染むれば、潑墨淋漓滿腔の熱誠を披瀝し來る、楠河州の詠ぜる詩の如き、將又、菅公を謳へるものゝ如き、比々然らざるはなし、宜なる哉、日本外史一度出づるや尊王の大義炳乎として明かに、維新改革の遠因を爲したるのみならず、子孫亦動王の誠を盡して國事に殫れたることや、かの徒に筆硯を弄して虛名を貪るに汲々たる者と素より同日の談に非ず。

讀方 都府樓唯瓦色を看、觀音寺獨り鐘聲を聽く、相公の此の句燥髮誦す、今日始めて此際に向つて行く、想見す傑構畫甍堆きを、華鯨雄吼す法王城、宰帥の虛名實に閑廢、罪を思ひ却掃うて柴荊を掩ふ、儒生の衰黻眞に罕事、洞知す沈痼須良藥に須つを、知に酬ゆる何ぞ人言を恤ふるに足らんや、奮搏自折す凌雲の翅、鬼と爲り蜮と爲る何ぞ尤むるに足らん、群雞一鶴宜しく相忌む、國瘁る天數豈公與らんや、鑿鑑已んで又形弓、世態幾回か浮雲變じ、獨り威德無窮に傳

ふるあり、」寢廟棟宇彌よ岐嶷たり、祀典今に兆億群す、顧みて府樓を看れば空しく斷礎、寺は數椽を餘して亦傾仄す、行人田間缺瓦を拾へば、猶存す相公看時の色。

○望寶滿山城址

誰嬰宋壁挫荊兵。不怪晉軍徐出旌。非餌孤城漁九國。老猴何得擊長鯨。

（自註）高橋紹運守此城當薩兵以峽太閤來

【註】晉軍　左傳に、楚、宋を伐つ宋急を晉に告ぐ、晉の文公之を救ひ楚の子玉を城濮に破る　老猴　猿面冠者秀吉を指す　長鯨　薩摩島津氏をいふ

【注意】一度史論にわたれば沛然として其の蘊蓄を傾倒し來る、之れ自ら山陽得意の技也

【讀方】誰か宋壁に嬰りて荊兵を挫かん　怪まず晉軍徐かに旌を出すを、孤城に餌して九國を漁するに非ずんば、老猴何ぞ長鯨を擊するを得ん。

○見温仙岳





【註】温仙岳　肥前島原に在り　黃櫨　アシの木をいふ　榮城　佐賀鍋島侯の城なり

【注意】讀んで此身自ら行旅の間にあるが如し、山陽の靈筆今更のことにあらじ。

【註】金虀玉膾　隋の時吳都松江の鱸を獻ず煬帝曰く、金虀玉膾は東南の佳味也、と　鹽藏　鹽漬にすること　先侯　鍋島先侯の事をいふ　筆力　牡丹子美の詩に「或は看る翡翠蘭苕に上るを、未だ擊せず鯨魚碧海の山一と」

【評】茶山曰く　起手毎に工な

黃櫨成列隴塍間。南望平平是海灣。未至榮城三五驛。忽從林際得温山。

【讀方】黃櫨列を成す隴塍の間、南望平平是れ海灣、未だ榮城に到らざること三五驛、忽ち林際より温山を得たり。

○至佐嘉諸儒見要會飲有鯨肉之供席上用所得韻戲作長句。

巨鬣掀潮噴雪花。萬夫攢矛海門譁。肥海捕鯨耳曾熟。何料鮮肉到齒牙。片片肪玉截芳脆。金虀玉膾曷能加。他日所食非眞味。鹽藏況經運路遐。君不見先侯戈鋋殪豕蛇。此物戢髻上鐵叉。多士方遭偃武日。

り。

【注意】今日吾々の膳に上す鯨肉も多くは鹽藏の者に係り眞味に非す、鯨肉の眞味の正に牛肉の壘を摩するものあるは余の曾て實驗せる處にして山陽の此の詩句は決して溢美にあらず。

【註】温仙岳名前に出づ　高郎山名　盈

取侑文酒愛柔嘉。羨君筆力能掣渠碧海，涯。恨吾酒量不加渠吸百川波。

【讀方】巨鱟潮を掀して雪花を噴く、萬夫矛を攢めて海門譁し、肥海鯨を捕ふる耳曾て熟す、何ぞ料らん鮮肉齒牙に到らんとは、片々たる肪玉芳脆を截ち、金蘆玉膾曷ぞ能く加へん、他日食する所眞味に非す、鹽藏況んや運路の遐なるを經るをや、君見ずや先侯の戈鋋豕蛇を殪し、此の物鱗を戢めて鐵叉に上るを多士方に偃武の日に遭ひ、取つて文酒を侑めて柔嘉を愛す、羨む君が筆力能く渠の碧海の涯を掣するを、恨む吾が酒量渠の百川の波を吸ふが如くならざるを。

○温仙，歌

温仙温且秀，高郎高且雄。温仙宜爲高郎，





盈。滿ち充ること古詩に「盈盈一水の間」とあり　凌波襪洛神賦に「波を凌いで微步すれば羅襪塵を生ず」と

【評】茶山曰く、小姑彭郎を拈起せるは詞人狡獪の處。

【註】陰陰暗きこと　黃鸝鶯也　鴃舌變語を云ふ　啁嘲罵り嘲る樣に聞ゆること　渠伊二字にて彼と讀む、楊萬里の詩に「千花用ゐず渠伊を牡丹をさす」を妬むを、此外春交誰に屬せん」と

婦。玉立對峙門望同」一水盈盈情脈脈。知他，岳神交飛越仙麓別起兩峰凹。尖然莫是凌波，襪。

【讀方】温仙温且つ秀、高郎高且や雄、温仙宜しく高郎の婦と爲るべし、玉立對峙して門望同じ」一水盈盈情脈脈、知る他の岳神交も飛越するを、仙麓別に起つて兩峯凹なり、尖然たるは是れ凌波の襪なる莫らんや。

○龜背嶺聞鶯

夏木陰陰擁兩坡。黃鸝喚客發嬌歌。喜他，鴃舌啁嘲，裏。獨有渠伊語不訛。

【讀方】夏木陰々兩坡を擁す、黃鸝客を喚んで嬌歌を發す、喜ぶ他の鴃舌啁嘲の裏、獨り渠伊が語訛せざる

あるを。

○自大村舟抵長與距長崎十里

海水如盆瑠璃碧。邑屋參差岸樹際。欲說琶湖與膳城。舟中少人知上國。吾行已歷萬重山。稅駕瓊浦在今夕。擔頭猶貯攝州酒。倒樽此際不復惜。繫纜沙尾喚漁舟。買得棘蠶長兩尺。

讀方 海水盆の如く瑠璃碧し、邑屋參差たり岸樹の隙、說かんと欲す琶湖と膳城と、舟中人の上國を知る少なり、吾行已に歷たり萬重の山、駕を瓊浦に稅ふ、こんせきこのさいまも此際復た惜まず、纜を沙尾に繫いで漁舟を喚ぶ、買





註 膳城江州膳所の城なり 上國上方の國なり 瓊浦長崎 沙尾洲の端なり 棘蠶 鯛をいふ

評 茶山曰く、蕭洒誦す可し

注意 酒を肩にして遊を爲す處、山陽の面目自ら躍如たりといふべく、兩尺の鯛を奢りて長崎着の前祝に取掛る處寧ろ詩人の童心を見るべし。

註 碧玦碧い玉なり 官樓奉行の家等を指す 蠻館外國人の家屋をいふ

注意 此れ先づ長崎市のアウト、ライン也、市の內容は將に以下の長崎謠に於て盡されんとす。

註 僦居賃借して居ること 檻首欄干の端なり 靚深楊雄甘泉の賦に「稍や暗く靚深なり」と註に靚は靜也とあり

注意 長崎酒なきに非ず、山陽の口に適したる酒なきなり

得たり蘇蠶長さ兩尺。

○到長崎

一分是海二分山。夾海山爲碧玦彎。官樓蠻館家萬戶。高低山色海光間。

讀方 一分は是れ海二分は山、海を夾む山碧玦の彎なを爲す、官樓蠻館家萬戶、高低の山色海光の間。

○僦居五首即武景文舊寓

小閣臨江口。斜陽消檻首。誰言欠靚深。吾喜弛擔負。鄰市買鮮魚。淺斟謀老婦。來倚已十日。無此一杯酒。

讀方 小閣江口に臨み、斜陽檻首に消す、誰か言ふ

註 故人 前に住居せし武景文を指す 鶺枝安 莊子にいふ「鷦鷯深林に巣へども、一枝の安に過ぎず」と、此より出づるをいふ 夜漫々 夜望み見て廣々としたるをいふ

注意 旅愁已にあり、今又故人曾寓の家に身を寄す此の詩ある所以なり。

註 琴書庇 家の、童僕貞と也易の文字也 長腰秔 未だ米の白かざる者俗の糠をいふなり 十起 周公一饋にして十起云々 飪 烹食論語に、飪を失すれば食はずとあり飪は羹也

評 茶山曰く、情狀想ふ可し

靚深を欠くと、吾ぼ喜ぶ擔負弛きを、鄰市鮮魚を買ひ淺斟老婦に謀る、碩に來つて已に十日、此に一杯の酒無し。

寓居視題字。故人親染翰。何圖鴻爪跡。復寄鶺枝安。舊識存老姥。曾飛有小欄。吟魂呼不起。月波夜漫漫。

讀方 寓居題字を見る、故人親しく翰を染む、何で圖らん鴻爪の跡、復鶺枝の安を寄す、舊識老姥存し、曾飛小欄あり、吟魂呼べども起たず、月波夜漫々。

纔得琴書庇。却喪童僕貞。旋置短脚鼎。親炊長腰秔。一餐趣十起。往往失飪烹。口復爲人累。回思愧平生。

讀方 纔に琴書の庇を得て、却つて童僕の貞を失ふ、





註 喝蘭 オランダ今、和蘭に作る 歌越 これ亦オランダなり 詩 茶山曰く、是れ長崎の詩なり。

注意 山陽の樹梢時に見し彩旗は憶ふに之れ後世和蘭人をして和蘭竟に滅びずの好辭を爲さしめたるものにあらざるなからんや

註 抵掌 相共に談ずること 曹騰 まどろむこと

注意 詩人は適意のみ、要は意を縱まゝにして矩を超えざるに在り。

旋て短脚の鼎を置き、親ら長腰の秔を炊ぐ、一餐即ち十起、往々飪烹を失す、口復人の累を爲す、回思して平生を愧づ。

北指喝蘭船。南觀歐越船。樓窓厘數尺。臥闌萬國天。互市居貨物。倉庫觀駢闐。一竿出樹杪。時見彩旗翩。

讀方 北喝蘭船を指し、南歐越の船を觀る、樓窓厘に數尺、臥して萬國の天を闌ふ、互市貨物を居き、倉庫駢闐を觀る、一竿樹杪に出づ、時に看る彩旗の翩へるを。

水窓夕多風。又納月色朗。客携酒與魚。風月共抵掌。一醉忽曹騰。不知客已往。斜影猶在窓。臥聽柔櫓聲。

註 圓山 今も尚ほ遊廓の在る處なり 讀書藥 讀書の臺

注意 夜更けて三絃の音を聽きたる者は、正に此詩の餘韻嫋然たるを知るべし。

註 凌霄花 和名ノウゼンカヅラなり

讀方 水窓夕に風多し、又月色の朗なるを納る客は携ふ酒と魚と、風月共に抵掌す、一醉忽ち瞢騰知らず客已に往くを、斜影猶ほ窓に在り、臥し聽く柔櫓の聲。

○潁川氏邀我寓其別莊臨圓山

山莊暫寄讀書藥、下視青樓連畫甍。庭樹缺處燈點點。夜深猶有按歌聲。

讀方 山莊暫く寄す讀書藥、下視す青樓畫甍に連なるを、庭樹缺ぐる處燈點々、夜深く猶ほ歌を按ずるの聲あり。

借得山莊便作家。胠篋散帙小生涯。午眠





注意 蟬聲の止むに依つて午眠を醒し、更に凌霄花の燃ゆるやうなるを見て睡後の意識を確實にす、世の讀書子之を暗じて可なり。

註 望樓 兵候(モノミ)臺のこと 弢 音刀弓の袋也 紅毛 當時西洋人を指して紅毛人といふ 鼓 大鼓なり 鼙々 鼙々と同じ 闞旄 羅紗の旗なり 猱 猿の類なり 豹韜 六韜に、豹韜篇あり 小醜 小人の類なり 憂目 莵 莊子に、仁人莵目して世の患を憂ふ、と註に閉ぢんと欲して閉ぢざるをいふとあり、心に憂を藏する眼容をいふなり 蟻慕午覺蟬聲。輟。照眼凌霄一架花。

讀方 山莊を借り得て便ち家と爲す、筐を胠き帙を散ず小生涯、午眠午ち覺めて蟬聲輟む、眼を照す凌霄一架の花。

○荷蘭船行

碕港西南天水交。忽見空際點秋毫。望樓號砲一怒暗。二十五堡弓脫弢。街聲如沸四喧嘈。說是西洋來紅毛。飛舸往迄聞鼓鼙。兩揚信旗防濫叨。船入港來如巨鼇。水淺船大動欲膠。官舟連珠纍幾艘。牽之而進聲鼙々。蠻船出水百尺高。海風漸々颭闞旄。三帆樹梔施萬條。設機伸縮如桔槔。

羶臊に虞垣の李渤に與ふる書今の人寸分の利を爭ひ絲毫の祿に走ること、群蟻の腥羶に附くが如しと　瓊瑤玉なり詩經より出づ

【評】茶山曰く、詩人碥に遊び靈漢の聞見に及ぶ少なり　此等の作差人の意を強うす、險韻を毎句に押す何等の詩膽ぞ

【注意】茶山は險韻を自在に驅使せるを見て山陽の詩膽に驚くと雖も、余は寧ろ結末の牛刀云々の處に至つて、山陽の膽大なるに呆れざるを得ず、荷蘭の如き素と之れ一小國而已、然れども當時に於ける荷蘭は今日の伊太利以上なり、而かも尚ほ牛刀を用ゆ可らずと爲す、豈に之れ一場の放言ならんや、以て彼が膽の大なるを見るべし。

漆黑蠻奴捷於猱升桅理條手爬搔下碇滿船齊噭咷疊發巨礮聲勢豪蠻情難測廟謀勞兵營猶不徹豹韜嗚呼小醜何煩憂目蒿萬里逐利在貪饕可憐一葉凌鯨濤譬如浮蟻慕羶臊毋乃割雞費牛刀毋乃瑤換桃

【評】崎港の西南天水交はる、忽ち見る空際秋毫を點ずるを、望樓の號砲一たび怒嗥せば、二十五堡弓戈を脱し、街聲沸くが如く四に喧嘈す、說くならく是れ西洋紅毛來ると、飛舸往き迓へて鼓鼙を聞く、兩ながら信旗を揚げて濫叨を防ぐ、船港に入り來つて巨鼇の如し、水淺く船大にして動もすれば膠せんと欲す、官舟連珠幾艘を累ね、之を率いて進む聲謦々たり、





蠻船水より出づる百尺高、海風浙浙爾旄を颭す、三帆桅に樹て、萬條を施し、機を設けて伸縮桔槔の如し、漆黑の蠻奴猱よりも捷なり、桅に升り條を理むる手爬搔し、碇を下して滿船齊しく噭咷す、巨鼇を疊發して聲勢豪なり、蠻情測り難く廟謀勞す、兵營猶ほ豹韜を徹せず、嗚呼小醜何ぞ憂目の蒿を煩はさん、萬里利を逐ふ貪饕に在り、憐む可し一葉鯨濤を凌ぐ、譬へば浮蟻の羶臊を慕ふが如し、乃ち鷄を割くに牛刀を費す毋れ、乃ち瓊瑤木桃に換ふる毋れ。

## ○佛郎王歌

佛郎王王起何處大西洋太白鍾精眼碧光天付韜畧鑄其腸鼇食歐羅東拓疆誓以崑崙爲中央國內游手收編行兵無妻

【註】佛郎王一世をいふ　太白星の名ナポレオンの眼光烱々たり之れ何人も知悉せる　韜畧武を用ゐる兵を使ふこと　崑崙支那崑崙

山趨々武威赫々たること玄黄黒く黄なるを子武趨々縮挺爲レ銃伸爲レ鎗銃退鎗進互撞搪所レ向無レ前血玄黄獨有レ鄂羅相頡頏潛遣諜賊懷レ劒鋩王覺故與之翺翔能刺刺レ我不レ能レ亡汝主何不レ旗皷當遣客即發

鄂羅露西亞遣レ客刺客を放つ絨旗ピロウドの旗日無レ芒日を遮りて光なし及レ國露國の境に侵入したること大雪莫斯科の大雪を指す梗塞杜絶の意阿黒阿米利加

金創刀傷銃創重閉左傳に、勇夫重閉す況んや國をや、と用心深きをいふ禍福如レ繩老子に曰ふ吉凶禍福は糾へる繩の如しと

評 茶山曰く、結び得て腐ならず。





注意 ボナパーテ、ナポレオン匹夫より起りて歐洲の天地を席捲し、威武當る可らず。一度モスコーに敗れ、再びウオーターローに利あらず、セントヘレナの孤島に適せられて憂愁の月日を送り遂に起たず、卒する時正に五十有三、實に我文政三年五月の事に屬す、山陽の是を記したるは那翁の沒後間も無く、訛轉亦隨つて多し、乃ちモスコーに敗れて降を露に乞ひたるが如く記せるは其の一、又那翁を米國に放ちたるが如く歌へるは其の二なり、然れども那翁にして若し靈あらば、絶東の大

又不レ見禍福如レ繩何可レ常窮兵黷レ武毎自殃方今五州休奪攘何知殺運被西荒作レ詩記レ異傳レ故鄉猶覺殺氣迸奚囊

異傳 佛郎王、王何の處に起る大西洋、太白精を鍾めて眼碧光、天韜略に付して其の腸を鑄る、歐羅を蠶食して東疆を拓き、暗ふに崑崙を以て中央と爲す、國内の游手收めて行を編す、兵に妻子なく武疌々、梃を縮めて銃と爲し併して鎗と爲す、銃退けば鎗進み互に撞搪す、向ふ所前無く血玄黄、獨り鄂羅有つて相頡頏す、潛に諜賊を遣して劒鋩を懷にす、王覺るも之と與に翺翔す能く刺せ我を刺さば亡ぐるは其の二なり、汝が主何ぞ旗皷もて當らざる、客を遣り即ち發す陣堂々、絨旗天を蔽うて日に芒なし、五戰國に及ん

文豪が歌へる一篇の此の哀歌に對して果して如何の感かある、後世の余輩亦此の哀歌に對して感慨無限なると同時に六十年前既に那翁の名が絶東詩人の口に上りたるを慶せずんばあらず。

で我武揚ろ、鄂羅魚釜湯に泣くが如し、何ぞ料らん大雪平地一丈強、王が馬八千凍え且つ僵ろ、運路梗塞して望むべからず、馬肉方寸日糧に充つ、王の曰く天佛耶を右けず、我衆を活さば降何ぞ妨げん、單騎敵に降る敵敢て戕ばず、之を阿黑に放ちて君臣慶ぶ、戊寅の歳吾崎陽に遊び、蠻醫に遭逢して其の詳を聞く、自ら言ふ陣に在りて金創を療し、馬を食みて死を免る今に忘れずと、君見ずや何の國か貪狼の如き有る麌からんや、勇夫重閉豫防を貴ぶ、又見ずや禍福何ぞ常ある可けん、兵を窮し武を黷さば毎に自ら殃す、方今五洲奪攘を休むも、何ぞ知らん殺運西荒を被ふを、詩を作り異を記して故郷に傳ふ、猶ほ覺ゆ殺氣奚靈に迸しるを。

## ○七星春歌





**註** 重碧 酒の碧味がゝりたる色をいふ 瀲灩 小波の漂ひ居ること 琥珀 玉の一種 李白の詩に「玉椀盛り來る琥珀光」とあも又酒の色に比せるなり 吾戸雖小 下戸のこと 泉釀 泉州産の酒 羅二十八宿 李賀の詩に「二十八宿心胸に羅ぬ」とあり、二十八星座也 北斗七星

**注意** 七星と名くる酒を飲んで腹に北斗を藏すと酒落を弄すると、李賀の所謂二十八宿を心胸に羅ぬとイヤに眞面目腐りたると・感興同日の談に非ず

伊丹酒名、崎港所レ致皆泉釀、伊丹獨有此一品、或招余供此、賦謝

重碧瀲灩漲長缾。何緣命名喚七星。腕擎琥珀光迸掌。訝他寒芒照畫檽。吾戸雖小嫌甜酒。常恨泉釀不可口。宴闌煩君更往賒。始覺萬愁付一帚。君不見我胸未能羅二十八宿。我腹堪藏北斗。

**讀方** 重碧瀲灩長缾に漲ざる、何に緣りて名を命じ七星と呼ぶ、腕琥珀を擎げて光掌に迸しる、訝む他の寒芒畫檽を照すかと、吾戸小なりと雖も甜酒を嫌ふ、常に恨む泉釀口にす可からざるを、宴闌に君を煩し更に往いて賒はしむ、始めて覺る萬愁一帚に付するを、君見ずや我胸未だ二十八宿を羅ぬる能はざる

註 松魚堅魚なり火雲夏の雲をいふ坤位西南の位置をいふ

評曰 此時の洋船は餘り歡迎すべきに非ず、金貨の流出は此當時を以て最も甚大の時期とす、

註 譙樓左傳に見ゆ城門なり兩藩鍋島黒田兩藩をいふ

評曰 德川氏の對外策此一事を以ても全豹を窺ふべし。

註 點瑠璃瑠璃の如き海上に點ぜること

も、我腹猶ほ北斗を藏するに堪へたり。

○長碕謠十解

火海松魚始上街。火雲稍作乳峯堆。連朝坤位風力熟。等待洋船入港來。

讀方 火海の松魚始めて街に上る、火雲稍く亂峯の堆を作す、連朝坤位風力熟す、等しく待つ洋船港に入り來るを。

入港西洋賈客船。譙樓信砲數聲傳兩藩。戍卒森旌戟萬炬如星夜不眠。

讀方 港に入る西洋賈客の船、譙樓の信砲數聲傳はる、兩藩の戍卒旌戟森たり、萬炬星の如く夜眠らず。

洋船豆大點瑠璃。未一炊間到大磯。館外





未一炊米の煮えざる間、東坡の文に見ゆ佛郎機佛蘭西砲入港の時祝砲を放つなり

註 金鼇芳柔鯛魚の芳しく柔かなるをいふ拇戰拳を戰はすなり成高手巧みなること吳下奴支那人をいふ支那人拳に長ずるを以て此くいふ

註 扇洲蘭舘の在る處即ち出島を云ふ盪槳舟を漂はすこと胡兒外國人

抛錨賀安穩。舳艫迭放佛郎機

讀方 洋船豆大瑠璃に點ず、未だ一炊せざるの間大磯に到る、館外錨を抛ちて安穩を賀す、舳艫迭に放つ佛郎機。

金鼇芳柔壓海腹。百杯泉釀瀉眞珠。客誇拇戰成高手。昨夜三贏吳下奴

讀方 金鼇芳柔海腹を壓す、百杯の泉釀眞珠を瀉ぐ客拇戰を誇りて高手を成す、昨夜三たび贏つ吳下の奴。

扇洲樓下盪槳遲。碧檻紅燈閃玉巵。試倚船窓呼姉妹。認他夜宴侍胡兒。

讀方 扇洲樓下槳を盪ばすこと遲く、碧檻紅燈玉巵閃めく、試に船窓に倚つて姉妹を呼ぶ、認む他の夜宴胡兒に侍するを。

註 艷妻 詩經中の文字なり 瓠犀 詩經に、齒は瓠犀（ヒサゴザネ）の如し、とあり瓠の核なり、乃ち齒をいふ

註 頤指中 言語通ぜざるより頤等にて意を通ずるをいふ 眼語 眼で物を言ふこと 洞房 閨房をいふ 靈犀 韓愈の詩に、身に彩鳳羽飛翼なく、心は靈犀一點の通ずるあり、と眼中の瞳子をいふ

註 積水 大海のこと 織女 一年一回七月七日の夜を以て牽牛と相逢ふ 郎船 夫を載せたる船也

朝朝擧案眉齊。一狎吳兒是艷妻。看取心情氷雪潔。鐵漿不肯染瓠犀。

讀方 朝朝案を擧ぐること眉と齊し、一たび吳兒に狎るれば是れ艷妻、看取せよ心情氷雪の潔を、鐵漿肯て瓠犀を染めず。

捧茗添香頤指中。雙雙眼語意何窮。洞房不用煩傳譯。自有靈犀一點通。

讀方 茗を捧げ香を添ふ頤指の中、雙雙の眼語意何ぞ窮らん、洞房用ゐず傳譯を煩はすを、自ら靈犀一點の通ずる有り。

盈盈積水隔音塵。穿眼來帆阿那邊。自慰吾儂勝織女。一年兩度迓郎船。





評趣 茶山曰く、是れ竹枝の眞趣

註 尤雲滯雨 尤は甚也滯は淹也西廂記中の文字也 春如海 春光洋々たるをいふ 眞臘香 東寒甫塞（東カンボチヤ）國に產する香料尤も宜し此國一名眞臘といふ

註 婆娑 影の動搖するをいふ 饔 朝餐を調ふること

注意 開港場の朝景色、往々余輩の實見に入るもの。

讀方 盈々たる積水音塵を隔つ、眼を穿つ來帆阿那の邊、自ら慰む吾儂織女に勝れるを、一年兩度郎船を迎ふ。

髻側釵橫夢一場。尤雲滯雨任他狂。眠醒罽帳春如海。銀鼎燒餘眞臘香。

讀方 髻側釵橫夢一場、尤雲滯雨他の狂に任ず、眠醒めて罽帳春海の如し、銀鼎燒き餘す眞臘香。

一港秋烟熨曉波。風吹旗脚影婆娑。越船時喚吳船語。似問今朝既饔麼。

讀方 一港の秋煙曉波に熨す、風旗脚を吹いて影婆娑たり、越船時に吳船を喚ぶの語、問ふに似たり今朝已に饔するや麼。

○長碕雜詩

註 藁街居留地 舩舟に窓戸あるものをいふ

評 茶山曰く、正始の音七八恐らくば鍛錬を欠ぐ。

注意 開港場の繁忙豈また孤吟酒尊を倒すの悠々者無しとせんや、而かも山陽肯て之をいふ、要するに自己と周圍の矛盾を感じたる也。

註 萍水 水に漂ふ浮草 蘇臺 姑蘇臺をいふ 虎邱山 蘇臺の附近に在る山名

藁街浮水碧莎館靠峯青。山約人煙密。市籠潮氣腥。兒童諳漢語。舟楫雜吳舩。誰信囂塵境。孤吟倒酒缾。

讀方 藁街水に浮んで碧く 莎館峯に靠れて青し、山人煙を約して密に、市潮氣を籠めて腥し、兒童漢語を諳じ、舟楫吳舩に雜る、誰か信ぜん囂塵の境、孤吟酒缾を倒すを。

○見姑蘇人楊兆元酒間賦贈

萍水相逢且舉杯。醉魂恍訝到蘇臺。看君眉宇秀如許。猶帶虎邱山翠來。

讀方 萍水相ひ逢ひ且つ杯を擧ぐ、醉魂恍として訝る蘇臺に到るかと、看よ君が眉宇秀づること許の如し、猶





註 蘭槳 木蘭の舟をいふ 宦遊 官用にて旅行せること 餘興 前に詳註を施せり

評 茶山曰く、實事を直叙して秀雅なること此の如し、藤園諸公と詩を應酬し泛叙虛設する者と眞僞迥に異なれり。

注意 興は凡て不盡の意を留むれば味特に長し、而かも二次の宴遊敢て妨げざるは異鄉舊侶に逢うて興懷容易に盡し難きものあるが爲なるのみ。

虎邱山翠を帶びて來る。

○劉溥卿因官事來倚同舟泛遊

山束蒼波萬瓦愁。蘭槳載酒酒如油。紅搖波影京倡袖。碧閃雲光蠻館樓。何料異鄉逢舊侶。不妨宦遊伴閑遊。晚涼更擬携餘興。亂月紗燈滿閣秋。

讀方 山蒼波を束ねて萬瓦愁ふ、蘭槳酒を載す酒油の如し、紅波影に搖く京倡の袖、碧雲光に閃く蠻館の樓、何ぞ料らん異鄉舊侶に逢はんとは、妨げず宦遊閑遊に伴ふを、晚涼更に擬し餘興を携ふ、月を亂す紗燈滿閣の秋。

○中秋

註 一尊尊は樽と同じ 長鋏戰國策馮驩の彈鋏歌に曰く「長鋏歸らんかな」と蓋し長鋏は長劍也

注意 實事を直叙するは茶山を始めとして山陽亦然り、此の詩の如き、單に中秋と題せるのみにして一讀能く開港場の中秋なることを思はしむるものあるは、之れ全く直叙の功也。

註 雲鬟香霧 美人の形容なり蓋し西亭が新娶の妻を指せるものなり

注意 上品なる詩人の揶揄といふべし。

註 嫣然 巧に微笑する貌 封夷 風の神也

故故 遲々といふが如し

評 茶山曰く、子成亦善く兒女の態を言ふ、頗る王敦桓溫に似たり。

風動微雲暑未收、一尊待月且登樓。瓦光明滅海山影、旗色依稀吳越舟。長鋏短衣久客成、蠻烟蜃雨又中秋。天涯醒醉同今夜、誰念飄零獨此州。

讀方 風微雲を動かして暑未だ收まらず、一尊月を待ちて且つ樓に登る、瓦光明滅す海山の影、旗色依稀たり吳越の舟、長鋏短衣久客と成り、蠻烟蜃雨又中秋、天涯の醒醉同じく今夜、誰か念ふ飄零して獨り此州にあるを。

## ○中秋後一日楊西亭館擧觀月

會聞西亭新娶

旅館良宵且宴娛紅燈綠酒小姑蘇對門、秋柳籠烟月。憶到雲鬟香霧無。

讀方 旅館良宵且く宴娛す、紅燈綠酒小姑蘇、對門の秋柳烟月を籠む、雲鬟香霧に憶ひ到るや無や。

## ○戲代校書袖笑憶江辛夷

余聞江名久矣、江今夏嘗來、阻風不至、水媚川爲呼江所狎校書侍酒、託致殷勤、酒間戲代叙其憶乃叙吾憶也

擧袖嫣然掩袖啼、玉釵敲斷酒醒時。相思何與封夷事、阻却郎船故故遲。

讀方 袖を擧げては嫣然袖を掩うては啼く、王釵敲斷す酒醒むるの時、相思何ぞ封夷の事に與らん、郎船を阻却して故故遲し。

## ○席上墨戲題

註 娉婷 美貌の形容詞にして美人也 江郎 江貫道をいふ 泥裡釘 江貫道は巨然を師とし其の皴法稍や變じて俗に泥裡拔釘と呼ぶに至る、即ち苔を畫くに長點を作り宛も釘の如きものあり然れども一種奥妙の處あり

註 泥犂 黄山谷好んで艶詞小曲を作る秀道人之を戒めて曰く、綺語の罪泥犂の獄に墮つと、蓋し地獄をいふ 水嬉 杜牧之の故事にして水戯をいふ

注意 此の言譯け少々暗い樣なり。

醉墨輸他烟黛青 和毫伸紙倩娉婷 知卿曾捧江郎研 得似渠儂泥裡釘

讀方 醉墨輸他烟黛青し、毫を和げ紙を伸すに娉婷を倩ふ、知る卿曾て江郎の研を捧ぐるを、渠儂泥裡の釘に似たるを得たり。

○綺人以狹斜爲命 見余詩時爲綺語認以爲眞往往勾誘余輙示此詩爲解

誰疑山谷墮泥犂 懶學樊川張水嬉 唯使心腸如鐵石 不妨筆墨賦氷肌

讀方 誰か疑ふ山谷泥犂に墮つるを、學ぶに懶く樊川水嬉を張る、唯心腸をして鐵石の如くならしめば、妨けず筆墨氷肌を賦するを。





註 艤船 酒杯をいふ 纖腰 美人をいふ

縞衣 詩經より出づ 妻のことなり

注意 忌憚なき告白なり呵々

註 苴杖 禮記に見ゆ、蓋し先人の喪に居ることを

評 賴杏坪曰く、儔侶の二字不敬余爲めに改作して訓戒す

未能茗椀換艤船 何復纖腰伴睡眠 家有縞衣待吾返 孤衾如水已三年

讀方 未だ茗椀艤船に換ふる能はず、何ぞ復た纖腰睡眠に伴はん、家に縞衣吾返るを待つあり、孤衾水の如きこと已に三年。

○余薄遊寫憂畫間詩酒陶滌夜 輙夢先人感而有作

九國山川遊未回 三年苴杖尚餘哀 誰言旅館無儔侶 夜夜音容入夢來

讀方 九國の山川遊未だ回らず、三年苴杖尚ほ餘哀、誰か言ふ旅館儔侶なしと、夜夜音容夢に入り來る。

衙鼓沈々夜正中、清吟人座畫欄東、
涼生旅舘孤燈雨、秋在高樓一笛風、
地縱近遊仍是客、身誇老健已成翁、
稍欣殘暑驅除去、明日湖航泛碧空

（趙　甌　北）

【卷之三終】





註 瓊港 長崎港 茫然 渺茫たること

若個邊 何れの邊といふ意

注意 山陽之れより崎陽を去つて肥後、薩摩等に到る、途中「泊天草洋」の詩もあれば兵兒謠も出で、詩囊漸く大ならんとす。

# 山陽詩鈔卷之四

賴襄子成著
蜂谷柳莊註

## 西遊稿下

○發長碕赴肥後

瓊港山圍萬戸烟。纔過嶺背海茫然。直西空闊雲黏水。於越句吳若個邊。

讀方 瓊港山圍む萬戸の烟、纔に嶺背を過ぐれば海茫然、直西空闊雲水に黏す、於越句吳若個の邊。

○舟過千鯲洋遇大風浪殆覆得上疇原宿漁戸賦此志懲

註 念六十六日なり 艤大舟なり 黒氣黒雲を いふ 盲風禮記月令に、中秋盲風至るとあり、蓋し疾風也 柁工船頭なり 護短短を蔽ふこと 一沓蹙沓は水の沸騰すること、萬里の水が一沸騰の波と爲ること 樸椒小木なり 漫白微かに白きこと 饘粥米の厚さをいふ 飾飯に同じ 餱鯖鳥の乾したる魚の乾したるを鯖と云ふ 宦は官也 販鬻商賣なり 汗漫漫遊なり 鯨燈鯨油の燈火也

賴子發碕港。八月日念六。便道赴東肥。臨岸買艤艇。說是千皺洋。波紋如細穀。解纜未半時。雲行稍捷速。指點温岳巔。黑氣如蓋笠。須臾海水立。盲風撼坤軸。柁工強談笑。護短諱敗衂。風力愈狂驕。鯨鼉交怒蹴。濤勢吳越來。萬里一沓蹙。舟爲之掀翻。繫泊欲向孰。舟人腕欲脫。搖櫓達島隩。叩門懇吏胥。僦丁負囊籠。崎嶇踰磯礁。蒙茸過樸樕。漫白見崩沙。深黑瞰絕谷。照昏有炬火。救饑無饘粥。勉旃度羊腸。猶勝葬魚腹。遠火認宿所。弛擔漁人屋。煖湯洗脚跟。下飾燒餱餱。驚定方成笑。痛覺却欲哭。遠道





注意 山陽奇禍に遇ふ、而かも造次顚沛の時に當つて膽落ち魂飛ぜず、溫岳の巔より一點の黑雲散じて海若怒り馮夷狂ふの情況は固より、船頭の橫着なる强ひて談笑に託し、自己の弱處を蔽ふの機微に至るまで、之を其の印象に止めたるは、實に感服の外なく、更に即夜にして險韵を探り縱橫に其の才華を奔して餘す處なきに至つては、決して凡才の業に非ず、若し夫れ鯨燈淋しく孤影に伴うの邊、絕代の文豪が曾逢の難を想起しつゝ筆を舐り紙を展べて、其の狀を盡すの光景に想到せば讀者また無限の感興に堪えざるものあらん。

胡爲來。非宦。非販鬻。汗漫自取苦。反顧眞悚恧。作詩抽囊筆。鯨燈伴單獨。

讀方 賴子崎港を發す 八月日念六、便道東肥に赴かんとし、岸に臨んで艤艇を買ふ、說く是れ千皺洋、波紋細穀の如し、纜を解き未だ半時ならず、雲行稍く捷速 指點すれば溫岳の巔、黑氣蓋笠の如し、須臾にして海水立ち、盲風坤軸を動す、柁工强て談笑し、短を護り敗衂を諱む、風力愈よ狂驕、鯨鼉交も怒蹴す、濤勢吳越より來り、萬里一沓に蹙る、舟之が爲に掀翻せられ、繫泊孰に向んと欲す、舟人腕脫せんと欲し、櫓を搖して島隩に達す、門を叩いて吏胥に懇ひ、丁を僦うて籠を負ばしむ、崎嶇磯礁を踰え、蒙茸樸樕を過ぐ、漫白崩沙を見、深黑絕谷に瞰む、昏を

照すに炬火有り、饑を救ふに饘粥なし、旗を勉めて羊腸を度る、猶は魚腹に葬らるゝに勝れり、遠火宿所を認め、擔を弛む漁人の屋、湯を煖めて脚跟を洗ひ、飰を下して腐鱸を燒く、驚定まつて方に笑を成し、痛覺えて却哭せんと欲す、遠道胡爲ぞ來る、官に非ず販鬻に非ず、汗漫自ら苦を取る、反顧すれば眞に悚惡、詩を作つて囊筆を抽き、鯨燈單獨に伴ふ。

○泊天草洋

雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮、萬里泊舟天草洋、烟橫蓬窓日漸沒、瞥見大魚波間跳、太白當船明似月。

講方　雲か山か吳か越か、水天髣髴青一髮、萬里舟



註 蓬窓 船の窓なり　太白 星の名

評 茶山曰く、北條子讓此の詩を以て西遊第一と爲す。

注意 歐米詩中海に關する詩多し、而かも此の如く簡潔にして詩の妙を發揮せるものに至つては、殆んど絶無といふも不可なし。



註 咏懷古跡 杜集に此の題あり蓋し古跡を咏すと雖も懷ふ所又殊なる也　提封 全國の兵こゝ皆其腰皆其の麓に在と　池潢 兵を池潢に弄す、とは漢の襲遂の語也、蓋し兒戲に似たるを　九節度 九節度使にしていふ、郭子儀等九節度鄭城を圍むや諸軍統帥なく城久しく下らざりき　飛輓 輜重を云ふ輓は車を引くこと　一旅 五百人を一旅と爲す　距堙 土山なり　楸 木の名　故

一岳突出壓大洋。全國提封皆其腰。中有危礁最斗絕。弄兵誰曾據池潢。彈丸煩擧九節度。兩歲飛輓糜餽糧。回看一旅取天下。巧拙如注異金丸。折戟沈沙二百年。距堙猶認屯人馬。最憐孤墓圍松楸。父老于今說故侯。崇文未捷遣劉雍。惜禽虎臣貽狗偷。

（自註）唐憲宗遣高崇文討賊戒曰、汝如不捷當遣を泊す天草の洋、煙は蓬窓に横ばつて日漸く沒す、瞥見す大魚の波間に跳るを、太白船に當つて明月に似たり。

○詠懷古跡短歌

侯寺澤志摩守、此時國除かるゝ、唐津の城主なり崇文下段山陽の自註に見ゆ、板倉内膳正をいふ、即ち松平伊豆守將に來り代たんとするを聞いて奮戰して死す虎臣詩經中の文字なり蓋し天草四郎家貞を云ふ

**解題** 此詩天草の亂ありし迹を過ぎて咏ぜるもの、賊は寛永十四年十一月に起り、翌年二月二十八日に滅ぶ、此の時板倉内膳正討伐に向しが、城久しく拔けず、幕府更に松平伊豆守を遣す、内膳正爲に恥ぢ奮戰して死す。

**註** 温山 温泉岳なり 碧玉環 碧い玉の環なり 兩烟鬟 温山、阿蘇、共に煙を噴く其の光景を鬟に比す

劉雍崇文奪戰勝歸。

**讀方** 一岳突出して大洋を壓す、全國の提封皆其の腰、中に危樵あり最も斗絶す、兵を弄す誰か曾て池濱に據らん、彈丸擊を煩はす九節度、兩歲飛輓餉糧を糜す、回看すれば一旅天下を取らんとす、巧拙注ぐに金丸を異にするが如し、折戟沙に沈む二百年、距堙猶ほ認む人馬を屯すを、最も憐む孤墓松楸圍むを、父老今に故侯を說く、崇文未だ捷たず劉雍を遣す、惜むらくは虎臣を禽へて狗偷を貽す。

○舟中所見

温山遙面阿蘇山。山脈逶迤碧玉環。滙得海波開一鏡。相臨自照兩烟鬟。

**讀方** 温山遙に阿蘇山に面す、山脈逶迤碧玉環、





**註** 故國 此處にては故人の居る國との意 丹樓 熊本城 雪泥 鴻雁跡を雪泥に託するをいふ 詳註前見 振鷺盟 文章詩歌の交を結ぶこと 苴杖 前に出づ 父執 父の友をいふ

海波に滙得て一鏡開く、相臨んで自ら照す兩烟鬟。

○熊府辛島教授招飲、先人之友也、賦此奉呈、幷贈在座諸儒

避風火海舍舟行。蘇岳相迎先眼明。銀杏挿天知故國。丹樓拔地見層城。雪泥聊託冥鴻跡。萍水新同振鷺盟。苴杖三年成往事。忽逢父執淚縱橫。

**讀方** 風を避けて火海舟を舍て行く、蘇岳相迎へて先づ眼明なり、銀杏天を挿んで故國を知り、丹樓地を拔いて層城を見る、雪泥聊か託す冥鴻の跡、萍水新に同うす振鷺の盟 苴杖三年往事と成る、忽ち父執に逢うて淚縱橫。

註 堤封 前に出づ、封を擊るの意 榛蕪 荊蘇等の茂り居ること、藤公肥後に封を受くる時、國内姦雄の跋扈するあるを云ふ 百雉 高さ一丈長三丈を雉といふ 雞林 朝鮮 雙雞 朝鮮の二王子臨海順和をいふ 存指 漢の高帝、韓王信を擊つや大寒に會ひ士卒指を墮す者十二三 惜鬚 清正の鬚を養へる外史に見ゆ 眇視跛輿 易に跛能く履み眇能く視るとあり 遺孤 論語に六尺の孤を託し百里の命を寄すと蓋し清正の子廣忠を指す

評 茶山曰く、肥後は文學の藪にして此の如き遺跡未だ著れず、賦咏却つて遠人をして先に鞭を着せしむ。

註 戚屬 藩翰譜に、清正の母は豐公の母と從妹たり、清正五歲の時豐公の母家に養はる、と記に霍去病は大將軍衛青の妹子也年十八大將軍に從ひ匈奴を征し嫖姚校尉と爲ると李黃漢將軍の名 張遼 魏の張遼文、吳を破つて功あるも遂に憚らる 生子 清正の子廣忠を云ふ、後出羽莊内一萬石の地に移さる 狗續貂 貂は毛冠を飾るに用ゆ、趙王倫位を奪ふや一味徒黨の者は賤卒に至るまで爵位を加へ、貂遂に足らず、狗尾を以て之れに代ふ、此處不肖を云 伏臘 鮑宣の故事、漢家滅びて尚ほ漢家の行事に據りたるをいふ

註 翠楠 楠氏を指す 黃花 は菊也乃ち菊池氏を云ふ

注意 南朝の末に至るまで菊池氏大義を九州に唱ふ、宛も菊花の霜に傲つて晚節を全うするに同じ。

○謁加藤公廟二首

堤封當日闢榛蕪。形勝居然虎負嵎。熊府城樓百雉。雞林毛羽捕雙雛。鐵戈冒雪纔存指。銅面衝風故惜鬚。眇視跛輿人競禱。靈威却不庇遺孤。

讀方 提封當日榛蕪を闢く、形勝居然虎嵎を負ふ熊府の城樓百雉を營み、雞林の毛羽雙雛を捕ふ、鐵戈雪を冒して纔に指を存し、銅面風を衝いて故と鬚を惜む、眇視跛輿人競うて禱る 靈威却つて遺孤を庇はす。

起身戚屬是嫖姚。早向邊城遠擧鎚。結髮軍皆知李廣。禁啼兒尚畏張遼。有巢寧料鳩因鵲。生子誰言狗續貂。空使遺民嚴伏臘。蘇山雲霧恨難消。

讀方 身を戚屬に起す是れ嫖姚、早く邊城に向つて遠く鎚を擊ぐ、結髮軍皆李廣を知り、禁啼兒尚ほ張遼を畏る、巢有り寧ぞ料らん鳩鵲に因るを、子を生む誰か言ふ狗貂を續ぐと、空しく遺民をして伏臘嚴ならしむ 蘇山の雲霧恨消し難し。

○南遊過菊池村

菊池村老兩三家。籬落秋風見暮鴉。世守芳根全晚節。翠楠未必勝黃花。

讀方 菊池村老ゆ兩三家。籬落秋風暮鴉を見る、世芳根を守つて晚節を全うす、翠楠未だ必ずしも黃花

に勝らず。

○自松橋上舟作促句詩

松橋驛畔僦舟乘、星斗滿天夜氣凝、臥舟腹如凍蠅。天明繫纜天草島。島民半以魚代稲炊飯買魚魚味好。南望海波閃紅暾。礁影起伏如浮鼇。說是薩州黑浪門。

註 松橋驛 肥後八代の北にあり 促句詩 詩の格にして三句に一換韵し三疊にして止むものをいふ 以魚代稲 農業の代りに魚業に從事せるをいふ 浮鼇 大なる龜の浮きたる樣なること

注意 前一段は夜船に上る時の況を叙し、第二段に於て天明け天草灘の光景を記す、而から第三段に至つて前途の光景を示す處、用意周到、其の體裁を得たり

讀方 松橋驛畔舟を僦うて乘る、星斗天に滿ちて夜氣凝る、舟腹に寒臥して凍蠅の如し、天明纜を繫ぐ天草島。島民半ば魚を以て稲に代ふ、飯を炊ぎ魚を買ふ魚味好し、南海波を望めば紅暾閃き、礁影起伏して浮鼇の如し、說く是れ薩州黑浪門。

○踰綱樹嶺





阿蘇山脈盡、南奔。右折羊腸扼海門。回望雲嵐如疊浪。那邊應是五家村。

註 五家村 平氏殘黨の隱家にして肥後大隅の國境に在り戶數現在三百餘

注意 阿蘇山脈は火山的副産物の堆積したる者にして南北に亘れること此の詩の如し。

讀方 阿蘇山脈盡く南奔す、右折して羊腸海門を扼す、回望すれば雲嵐疊浪の如し、那の邊應に是れ五家村なるべし。

○過肥薩界

一澗平分南北州。亂沙深草兩邊秋。曾無所屬唯溪水。幾股潺湲隨意流。

註 兩邊秋 南北州兩邊の秋なり 幾股 二三歩の間をいふ

注意 國境に在る清流は南北何れの國にも屬する無く隨意に流れたりといふ意なり。

讀方 一澗平分す南北州、亂沙深草兩邊の秋、曾て屬する所無く唯溪水、幾股の潺湲隨意に流る。

○入薩界遇雨

秋雨來不已。秋風吹倒人。程長苦日短。前

註 程長 旅程の長きこと 冥色 暮色のこと

**墟落**（村墟村落の熟字也）**蹄輪**（牛馬の蹄の跡）**笠糾舞**（詩經より出づ、註には笠糾は笠の輕く擧る也とあり）**斷齒**（齒の根なきふ此詩にては石の齒の樣になりたるをいふ）**阿嗔**（叱り怒ること）**桑弧**（男子の生るゝや蓬の矢と桑の弓とを以て四方を射る、四方の志を成さんとするなり）**北堂**（母のこと）

【評】茶山曰く、有韵の記文

路問頻頻已踰肥嶺坂。還緣薩海濱。冥色生墟落。道上少蹄輪。笠糾舞離首。簑袂濕透身。拔脚泥淖裡。又遭石齒斷。暗行至關下。關吏肆呵嗔。乞宿野人屋。雙膝屈不伸。破竈無烟氣。松肪照積塵。僵臥不可寐。起座獨吟呻。離國幾亭驛。擧目有誰馴。桑弧從素願。不必說其辛。耿耿每縈念。北堂有老親。屈指待我返。愆期已廿旬。汗漫竟何事。我鬢亦欲銀。寧能可中止。勢與騎虎均。路難我已分。何爲自逡巡。勉起裹吾足。鳴鵶已報晨。

【讀方】秋雨來つて已ます、秋風人を吹倒す、程長く日





【注意】情あり景あり、一篇好個有韵の紀行文なり、而かも雨中難路を踰えて野人の屋に一宿を乞ひ、旅愁禁ぜず、故山を偲ぶの邊に至るまで皆實景實情ならざるは無し、之れ賴翁の長技なり、讀み去り讀み來つて恰も西詩を讀むが如き感あるもの、蓋し實情實景以外に渉らざる此の長技に基く、之れ軈て今日の所謂寫生詩にして、西歐の傑作に比し敢て遜色なきもの、今日の三文々士須らく愧死して可也。

短に苦む、前路問ふこと頻々、已に肥嶺の坂を踰え、還た薩の海濱に緣る、冥色墟落に生じ、道上蹄輪少なり、笠糾舞して首を離れ、簑袂濕うて身に透る、脚を拔く泥淖の裡、又石齒斷に遭ふ、暗行關下に至る、關吏肆に呵嗔す、宿を乞ふ野人の屋、雙膝屈して伸さず、破竈烟氣無く、松肪積塵を照す、僵臥寢ぬ可らず、起座して獨り吟呻す、國を離れて幾亭驛、目を擧ぐれば誰有つて馴る、桑弧素願に從ふ、必ずしも其辛を說かず、耿耿每に念を縈らせば北堂老親有り、屈指して我返るを待つ、期を愆る已に廿旬、汗漫竟に何事ぞ、我鬢亦銀ならんと欲す、寧ぞ能く中止すべけんや、勢虎に騎すると均し、路難我已に分す、何爲れぞ自ら逡巡せる、勉起して吾足を裹めば、鳴鵶已に晨を報ず。

註 阿嵎嶺 薩摩に在り、其の一種なり、アグ子と訓む 鶻影 海鶻の飛ぶ影といふ意なり 低迷 低く〻飛べると

注意 登高の詩は古來難しとする處、而かも山陽之を能くする此の如し、彼正に登高の詩才を有すといふべし。

註 征衫 征衣なり 蠻酒 蓋し泡盛なり

注意 行人に酒を勸めて重陽に驚く、逆旅の狀情さもあるべし、

註 萱堂 慈母なり 西風 秋風なり 兩般 兩樣と同じ

注意 山陽の看る所を以てすれば望鄕の淚と家を望むの情とは全く同一ならざるが如しとは全く同一ならざるが如し

註 酒觴 酒杯 黃花 菊の花、重陽菊花を酒觴に泛べて飲むの俗あり 商略 商ハカリ略ることなり 登高 登高の詩古來難しとする處、而かも之を能くする者を登高の才といふ、即ち此の才あるものは果して何人ぞといふ意也

註 逆旅 旅宿 擔簦 雨傘肩の酒如 瀧 瀧は水名なり、左傳に「酒如瀧」とあり、肉如陵の如し 酬佳節 重陽を賀すと 瓊漿 ブランデーか葡萄酒の類なるべし 瓊津 長崎

## ○阿嵎嶺

危礁亂立大濤間、決眥西南不見山。鶻影低迷帆影沒、天連水處是臺灣。

讀方 危礁亂立す大濤の間、決眥して西南山を見ず鶻影低迷帆影沒す、天水に連なる處是れ臺灣。

## ○逢重陽三首

蟬聲夾路亂松長、偏愛征衫生晚涼。野店迎人勸蠻酒、報吾今日是重陽。

讀方 蟬聲路を夾んで亂松長し、偏に愛す征衫晚涼を生ずるを、野店人を迎へて蠻酒を勸む、吾に報ず今日是れ重陽。

短髮萱堂道路賒、空房蓬首更天涯。西風寄與兩般淚、回首望鄕還望家。

讀方 短髮萱堂道路賒なり、空房蓬首更に天涯、西風寄與す兩般の淚、回首鄕を望の還た家を望む。

吾生三十九重陽、幾處黃花泛酒觴。商略登高誰第一、薩山盡處望南洋。

讀方 吾生三十九重陽、幾處か黃花酒觴に泛ぶ。商略す登高誰か第一、薩山盡る處南洋を望む。

## ○宿仙代河

晚宿逆旅飾簦滿室歌呼酒如瀧、言是重陽正會客、不顧孤旅守寒燈。吾自有酒遠提挈、獨酌微吟酬佳節。瓊津友驢是瓊漿、汝酒似否此芳烈。缺月窺檐影婆娑、今

評 茶山曰く、獨語慣を洩す旅中時に此況あり情狀宛然。

注意 吾は孤旅寒燈を守るに拘らず隣室に歌謠に睡を擾さるゝことあるは日本旅館に短所にして殊に旅宿料理屋兼業の處に多しとす改めざる可らず。

註 霜候 霜の降る時候 應斑 最早處處枯れて居るならんとの意

注意 筑前筑後に春を迎へて今や方に薩摩に秋老いんとす山陽日に家鄉を思ふの情、將に此の如く切なるものあらんとするなり。

## 夜瓊津定如何。

讀方 晩に逆旅に宿し燈釐を卸す、滿室歌ひ呼んで酒漉の如し、言ふ是れ重陽正に客を會すと、顧みず孤旅寒燈を守るを、吾自ら酒あり遠く提挈す 獨酌微吟佳節に酬ゆ、瓊津友賸る是れ瓊漿 汝が酒此の芳烈に似たるや否や、缺月檐を窺うて影婆娑たり、今夜瓊津定めて如何。

## ○薩州重陽

客路重陽日、家鄉萬疊山。春歸方北筑、秋老又南蠻、濁浪玄門渡、炎沙白水關。故園霜候早、籬菊已應斑。

讀方 客路重陽の日、家鄉萬疊の山、春歸方に北筑、秋老又南蠻、濁浪玄門の渡、炎沙白水の關。故園





註 石曼子 明人島津氏を呼んで石曼子といふ、文正十五年五、五日秀吉千代川に陣するや、島津義久大に怖れ頭を剃り法衣を纏うて秀吉に降る、秀吉曰く、舊家なり、之を歡待し反す云々 樹下兒 木下藤吉郎を云ふ 海外鷹犬 秀吉征韓の役を起すや島津氏隨うて功あり 連枝 義久の弟義弘、兄に養はれて嗣と爲る、島津氏秀吉に降るの際、秀吉義弘をも許して恩を樹つ 混一 諸侯を統一すること 太平寺豐公の營ありし處にして義弘の降を納れし故迹なり 淵藪 一度逃れば捕へ難き處 老佛 明の太祖の孫懿文太子

霜候早し、籬菊已に應に斑なるべし。

## ○石曼子行

石曼子。樹下兒安辨孰雄孰是雌。蠶食九州如風雨。何事此處忽降旗。巨川滔滔扼海口。回看疊嶺衝北斗。如此山河棄不守。全國擧納豎子手。城家雞豕眞深怨。海外鷹犬何獨奮。連枝之際偏樹恩。啣報何暇懷恚忿。混一有機驅除先。寺名太平豈偶然。君不見西南由來淵藪苑。人傳個裡匿老佛。

（自註）石曼子樹下兒皆出明通記。明建文帝後呼老佛。其詩有牢落西南四十州句。

の子也、性聰敏善く書を讀む、即位の後叔父藤土兵を起し位を奪ふ、帝出でゝ僧となる、益し經歷は異なるも、義弘を指す

**註意** 老佛の詩は左の如し。

牢落す西南四十州、蕭然たる白髮已に頭に盈つ、乾坤恨あり家何にか在る、江漢情無し水自ら流る、長樂宮中雲氣散じ、朝元閣上雨聲收る、新蒲細柳年々綠なり、野老聲を呑み哭して休ます。

**註** 倒瀾倒れかゝる大波也 弱冠少年の時

肥山如怒浪薩山如倒瀾翠碧坡陀疊堤防道在山上不知山山脈南窮地勢窄左右顧視海波環弱冠曾踰橫河水八州之野何豐偉寧知二十餘年後雙脚來上蜻蜓尾。

**讀方** 石曼子、樹下兒、安んぞ辨ぜん孰れか雄孰か是れ雌なるを、九州を蠶食すること風雨の如し、何事ぞ此處忽ち降旗「巨川滔滔海口を扼し、回看すれば疊嶺北斗を衝く、此の如き山川棄てゝ守らず、全國擧げて納る豎子の手」城下の雞豕眞に深怨、海外の鷹犬何ぞ獨り奮ふ、連枝の際偏に恩を樹つ、嘲報何ぞ恚怨を懷くに暇あらんや、混一機有り驅除先んず、寺太平と名く豈偶然ならんや」君見ずや西南由來淵藪苑、人は傳ふ個の裡老佛を匿むと。

○狹裔行

家杏坪曰、薩摩、狹裔也、吾妻、偉裔也、古訓而塡今字耳、今覺其信然、故作此





ふ 蜻蜓尾日本を蜻蜓洲と云ふより薩摩は西僻なれば恰も其尾に譬へたるなり

**評** 茶山曰、後半恨むらくば前半に加かず。

**註** 寒蟹秋の虫 瓜架瓜を植ゑ付けたる棚なり

**註意** 寒蟹といひ、瓜架黃花

寒蟹唧唧雜蛙鳴。村驛秋風馬影斜。節過重陽菊未發、却看瓜架著黃花。

○途上

**讀方** 肥山怒涙の如く、薩山倒瀾の如し、翠碧坡陀として堤防に疊なり、道は山上に在りて山を知らず、山脈南に窮り地勢窄る、左右顧視すれば海波環る弱冠曾て踰ゆ橫河の水、八州の野何ぞ豐偉なる、寧んぞ知らん二十餘年の後、雙脚來り上る蜻蜓の尾。

を着すといふ、此の如きは字句の矛盾に非ずして實に薩南氣候の實況也。

註 竹策竹の鞭なり 果下小馬也東夷傳に、朝鮮果下馬を出す、註に高さ三尺、果樹の下尚ほ乘ずべしとあり

評 茶山曰く、子成能く風土を言ひ人をして宛も其境を見せしむ、從前の詩家必ず用意せざる所なり。

註 葛衣夏の衣帷子也 側肩累跡非常に狹苦しきをいふ 便儇輕快なり 嬌軟愛嬌あり柔和なること 蹴踏正韵に行うて謹敬なりとあり、

讀方 寒蟾唧々蛙鳴に雜る、村驛秋風馬影斜な り、節は重陽を過ぎて菊未だ發せず、却つて看る瓜架黄花を着するを。

## ○所見

薩南村女可憐生竹策芒鞋趁曉晴果下載薪皆牝馬一人能領數駄行

讀方 薩南の村女可憐の生、竹策芒鞋曉晴を趁ふ 果下の薪を載せたるけ皆牝馬、一人能く數駄を領し行く。

## ○麑洲逆旅歌

蛟蜃氣蒸萬家煙對岸影壓城闉京貨萬琛列肆鬻賈舶中雜琉球船吾來津樓卸行李九月葛衣暑未已豚肉竹筍旅飯





進退の謹愼なるをいふ 尺五一尺五寸、其僅なるを云ふ

評 茶山曰く、既に說く可らざるを道ひて却つて說く、愈よ不平無聊の態を見す、想ふ可し、然れども亦苦中樂處あるを知る。

注意 山陽長崎に在るや意氣豪壯、世の春と共に詩中亦綺語多し、然るに一度薩南に入るや、旅愁縹々徒に秋風寂寞の感あるは、これ果して何の爲ぞ、蓋し詩人時節を感ずるの深刻なるものあるに因るか將又薩南の變風遺に此の詩人をして避易せしめたるに因るか如何。

腥寄身倒肩累跡裡擧止便儇認攝商語言嬌軟知京妓蹴踏自憐一書生食時爭席出爭履萬里誰迫爲此行逆境未可說不平閑啓行筐抽書讀堆薪撑檐尺五明

讀方 蛟蜃氣蒸す萬家の煙、對岸の岳影城闉を壓す、京貨萬琛肆に列れて鬻ぎ、賈船中に雜ゆ琉球船、吾津樓に來つて行李を卸す、九月葛衣暑未だ已まず、豚肉竹筍旅飯腥く、身を寄す側肩累跡の裡、舉止便儇攝商を認め、語言嬌軟京妓を知る、蹴踏自ら憐む一書生、食時席を爭ひ出るに履を爭ふ、萬里誰か迫ひて此行を爲す、逆旅未だ不平を說く可らず、閑に行筐を啓いて書を抽き讀めば、堆薪檐を撑へて尺五明なり。

註 鍤（鋤なり） 淡婆姑（煙草なり唯字音を借れる也）

注意 薩藩の風習として士に平常農を爲す、今の屯田兵の如きなり。

註 窰陶（陶器製造をいふ） 高麗盆（高麗燒なり、薩摩に於て俘虜の作りたるものは今日の薩摩燒也）

注意 神后乃至秀吉征韓の時に於て俘虜は別に村を爲さしむ、恨らくば之れ速に日本化を行ふの道に非ず。

註 南客（琉球人なり） 牙牙（明瞭ならざる）

○薩摩詞八首

鄉兵團結百餘區帶箭人交荷鍤夫茅舍
槿籬差整肅家家多種淡婆姑

讀方 鄉兵團結す百餘區。箭を帶ぶるの人鍤を荷ふの夫に交はる、茅舍槿籬差や整肅、家々多く淡婆姑を種う。

路遇朝鮮俘虜孫窰陶爲活別成村可憐
埴得扶桑土造出當年高麗盆

讀方 路に遇ふ朝鮮俘虜の孫、窰陶活を爲して別に村を爲す、憐む可し扶桑の土を埴得て、造出す當年の高麗盆。

相逢南客市廛間言語牙牙雜漢蠻御墨





こと御墨京毫（支那の墨や筆）燕京（支那北京の都）

注意 山陽支那漫遊の意勃々たりしなるべし。

註 櫻山（櫻島中に在り） 瑠璃海の髻（髻山の形なり） 紫脣顏（紫色の山光をいふ）

注意 櫻島は薩人の誇りなり摩の風光を說く必ず櫻島を逸す可らず

註 劉郎（劉禹錫、煙波深き處是れ琉球、とは劉の詩句なり、山陽之を用ゆ。）

注意 曾て日清の間に琉球問題起る、樂ふに劉郎と山陽の詩句と互に引照せられしなるべし呵々。

註 一枕（邯鄲盧生の事をいふ） 中山（琉球の首京。毫諸價直。自稱兩度入燕京。

讀方 相逢ふ南客市廛の間、言語牙牙漢蠻を雜ふ、御墨京毫價直を諸んじ、自ら稱す兩度燕京に入ると

櫻山突出海灣間一碧瑠璃擎髻鬟鹿兒
城中家幾萬無窓不納紫脣顏

讀方 櫻山突出す海灣の間、一碧の瑠璃髻鬟を擎ぐ、鹿兒城中家幾萬、窓の紫脣顏を納れざるなし。

海門山外矯輕鷗鷗背長天一色秋憶得
劉郎舊詩句煙波深處是琉球

讀方 海門山外輕鷗矯ろ、鷗背の長天一色の秋憶ひ得たり劉郎の舊詩句、煙波深き處是れ琉球。

一枕仙遊萬斛珠賺他王子伴華胥中山

都龍陽美少年の名戰國策に出づ華胥夢のこと五色魚唐詩には貫珠とあり俗にいふ、イトヨリダイなり

【評】茶山曰く、詩思水の如く科つて盈さゞる無し、

【注意】薩南の俗男色を嗜む轉結故に言及す。

【註】下物酒の肴たいふ盤殽盤上の食物なり籜龍筍なり

【注意】泡盛の強烈に北客は顔熱するも南客は平氣なり、既に一驚を成す、更に十月の筍を見て再び驚くとなり。

【註】兵兒薩摩の少年各社を結び兵子組と云ふ骨腰なり客北肥後の加藤を云ふ、薩摩の俗謠に「肥後

應有龍陽泣唯愛扶桑五色魚

【評】一枕仙遊萬斛の珠、他の王子が賺して華胥に伴ふ、中山應に龍陽の泣くあるべし、誰愛す扶桑五色の魚。

南客醒顏北客紅幾杯琉酒太醇醲更驚下物尤難獲十月盤殽見籜龍

【評】南客は醒顏北客は紅、幾杯の琉酒太た醇醲、更に驚く下物尤も獲難さを、十月盤殽籜龍を見る。

○前兵兒謠

衣至骨袖至腕腰間秋水鐵可斷人觸斬人馬觸斬馬十八結交健兒社北客能來





の加藤が見えたなら玉に藥の御馳走申せ其で足られば首に刀の引出物。

【評】茶山曰く、是れ豈今時の詩ならんや。

【注意】此詩從來薩人の誇りと爲れる者、而かも茶山は以て今日の氣風に非ずと爲す、今日知名の薩人中仕を好める者果して孰れか左袒せんと欲す

【註】蕉衫芭蕉にて作りたる衣服操南音左傳に、楚鍾儀晉の捕ふる所と爲るや南音を操る、晉侯曰く、樂んで土風を操るは本を忘れざれば也、と遂に之を釋す、然るに今や官長却つて怒る以馬換妾

何以酬彈丸硝藥是膳羞客猶不屬饜好以寶刀加渠頭好好貨也

【評】衣肝に至り、袖腕に至る、腰間の秋水鐵斷つべし、人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る、十八交を結ぶ健兒の社、北客能く來らば何を以てか酬いん、彈丸硝藥是膳羞 客猶ほ屬饜せずんば、好し寶刀を以て渠が頭に加へん。

○後兵兒謠

蕉衫如雪不受塵長袖緩帶學都人怪來健兒語言好一操南音官長嗔蜂黃落蝶粉褪倡優巧鐵劍鈍以馬換妾髀生肉眉斧解剖壯士腹。

異聞錄に曰ふ、酒徒鮑生好んで聲妓を蓄ふ、外弟に韋生なるものあり、駿馬を好む、一日兩人好む所を以て互に交換す云々

**髀生肉** 髀は股の肉なり、長く馬に騎らざるを以て、股の處に肉を生ずるを云ふなり

**眉斧** 美人の眉

**注意** スパルタの強を以てするも士風一度錢を愛し色を好むに至つて萎靡遂に振はず遂に亡國の悲境に沈む、日本のスパルタたる薩南の健兒亦此の時漸く其覆轍を蹈まんとするものありしと雖も、幸に島津成彬公等の士風挽回に努むるありて竟に覆沒するに至らず、却つて維新の功業多く薩南の健兒に因りて成就されたるが如きは實に異數とせずんばあらず。

**讀方** 蕉衫雪の如く塵を受けず、長袖緩帶都人を學ぶ、怪み來る健兒詰言好きを、一たび南音を操つて官長嗔る」蜂黃落ち、蝶粉褪す、倡優巧に、鐵劍鈍る」馬を以て妾に換ふ髀肉を生ず、眉斧解剖す壯士の腹。

## ○雜詩二首

國故多高木。天秋未隕霜。嶽煙連市黑。海氣抱城黃。猪肉盤肴脆。蛇皮絃索張。取醺蠻酒勁。不識是他鄉。

**讀方** 國故高木多し、天秋にして未だ霜を隕さず、嶽煙市に連りて黑く、海氣城を抱いて黃なり、猪肉盤肴脆く、蛇皮絃索張る、醺を取る蠻酒勁し、識らず是れ他鄉なるを。





**註** 呂宋 レスン島なり 流虬 琉球 裘 冬の衣

**注意** 地は蜻蜓の尾を壓し、城は鮫鰐の頭に凭る、地形既に雄なり、又南呂宋を望み西琉球に接す、景象既に大なり後世人物の輩出せる固より其の處なるのみ。

**註** 飛燐國 肥前肥後の國 流鬼 琉球なり、

**評** 杏坪曰く、飛火は春日野のみ、當に迷燐と爲すべし。

**注意** 此際老茶山を思ふ 會心の友は唯一あるのみ。

地壓蜻蜓尾。城凭鮫鰐頭。浮雲橫呂宋。惡浪撼流虬。寒草常春夢。賈船或越舟。羈旅猶有喜。十月未披裘。

**讀方** 地は壓す蜻蜓の尾、城は憑る鮫鰐の頭、浮雲呂宋に橫ばり、惡浪琉虬を撼す、寒草常に春夢、賈船或は越州、羈旅猶ほ喜あり、十月未だ裘を披かず、

## ○途中寄懷茶山翁

征帆已歷飛燐國。旅食還同流鬼蠻。解道七言風土記。羈誰呼致老茶山。

**讀方** 征帆已に歷たり飛燐國、旅食還同うす流鬼蠻、道を解す七言風土の記、誰に憑つて呼致せん老茶山。

## ○鮫島伊知地二子邀飲余於港

註 櫻洲櫻島なり津樓港に臨める樓なり

注意 山河千里の異郷に舊醉侶と逢ひ青眼互に一笑を交ゆ此一笑蓋し無限有意味の一笑なり、

註 鬢絲鬢髮なだ詩句なり 惆悵句嘆き悲んだ詩句なり

櫻洲山色水烟涵、日落津樓酒半酣、廿歲江門舊醉侶、相逢一笑薩城南

上酒樓伊曾識余於江戸者

讀方 櫻洲の山色水烟涵す、日落ちて津樓酒半ばなり、廿歲江門の舊醉侶、相逢うて一笑す薩城の南。

○題小杜停車圖

林風映發鬢邊絲、憶起紅潮暉玉肌、綠葉曾題惆悵句、秋霜又有勝花時。

讀方 林風映發す鬢邊の絲、憶起す紅潮玉肌を暉すを、綠葉曾て題す惆悵の句。秋霜又花に勝るの時あり。





註 田百谷小田良平、京都に寓し後改めて溥山と號す 巨勢巨勢金岡、清和延喜の朝に仕へて大納言と爲り菅公と友とし善し仁和中勅を奉じて賢聖の障子を畫く、傭前の人顧陸晉の顧愷之宋の陸探微佐家藤原經隆土佐守に任じ從五位下に叙せらるる之れ土佐家の元祖也文延中の人にして子行光、孫光重、曾孫廣周、廣周の子光信、俱に皆畫名あり 狩氏狩野正信、大炊介と稱す、相州小田原の人、畫を善す、子古法眼元信畫を善くすること父に過ぐ 北宗畫に南北二宗の別あり 末流畫史に云ふ、狩野永德の孫探幽、筆墨飄逸、傳彩簡易、狩野氏の風一變す、當世の人其の糟粕を嘗めて規矩を失す、と 骫骳屈曲せること 圓老圓山主水號は應擧初め狩野氏の門に

○觀田百谷摹古畫引

邈矣巨勢傳顧陸、佐家世守文獻足狩氏、近學明北宗、末流骫骳厭衆目、圓老慧眼爛電光、一掃陳腐出機軸、渲染直師造化工、畫苑終獲中原鹿、踵起對壘唯吳翁、數筆傳神更敏速、法門一開便空疎、爭擷殘膏與賸馥、豈無輕妙鏡浮花、不見沈着石沒鏃、媚今易得萬犬應、學古寧到千兎禿、入室操戈自有人、後勁今見田百谷、一齊不勝衆楚咻、曰舍家雞貴野鶩、慨然擔登再闘南、南薩人家多藏蓄、苦向蠹餘求師資、詎能牛後甘奴僕、吾亦觀畫夙好同搜

入り後其風を一變して京都四條に住す、世に四條派と稱す

**爛電光** 王戎の眼爛々として巖下の電光の如しと

**機軸** 新機軸を出すこと

**吳翁** 吳春、月溪と號す初め蕪村應擧等の門に入る、既にして一變自ら一家を爲す、其畫艶なりと雖も稍や俗なり

**空疎** 淺見寡聞也吳春い畫法學び易し

**殘膏賸馥** 殘りたる肉や賸されし香をい

**石沒鏃** 李廣草中の石を見て虎と爲し之を射て石に中つ、石鏃を沒す、筆力の勁きをいへるなり

**萬犬應** 一犬虛に吠えて萬犬實を傳ふ

**千兎禿** 東坡志林に、禿筆千枝、墨磨すること萬錠、と

**入室操戈** 弟子の師よりも勝るをいふなり

**衆楚咻** 孟子に、一齊人之を教へ衆楚人之を咻す

**尋奇蹟極幽隩萍蹤相値麗洲城旅館秋燈連榻宿君技已過餘子肩何難安坐饕梁肉遠道胡爲而來哉可知虛心盈其腹心摹手追吸精華譬之買玉而還櫝平生五斗愧折腰不辭鞠躬借畫幅志篤學勤終有成拔戟成隊非君孰留歌別君吾何心寄聲好事倒筐篚**

【講方】 遡矣巨勢顧陸を傳ふ、佐家世守文獻足る、狩氏近ごろ明の北宗を學び、末流骸骨衆目厭ふ、圓老の慧眼電光爛たり、陳廣一掃して機軸を出す、渲染直に師とす造化の工、畫死終に中原の麁を得たり、踵起對壘せるは唯吳翁、數筆神を傳ふ更に敏速、法門





**家雞野鶩** 晉の庾翼少時王右軍と名を齊うす後右軍進むや、庾公の小兒輩家雞を厭うて野鶩を愛す

**圖南** 莊子より出づ薩摩に入れると

**蠹餘蠹魚** の食ひ餘しなり

**牛後** 蘇秦の語、寧ろ雞頭たるも牛後に附すなれ

**買玉還櫝** 韓非子より出つ、昔し楚の人にして珠を鄭に賣るものあり木蘭の櫝を爲り、綴るに珠玉を以てし飾るに玫瑰を以てす、鄭の人其の櫝を買うて其の珠を還す、櫝は物を藏する箱の類をいふ

**拔戟成隊** 左傳より出づ、一族職を樹て一家を爲すをいふなり

【評】 茶山曰く、余曾て一詩を作り百谷に贈らんと欲す、今此を覽るに余が言はんと欲する所皆先づ言盡せり、況んや筆力縱橫、余が瀋澁の比に非

一ひ開けて空疎に便なり、爭ひ攝る殘骨と賸馥と、豈輕妙鏡花を浮ぶる無からんや、見ずや沈着石鏃を沒す、今に媚びて得易し萬犬の應、いにしへを學んで寧んぞ千兎の禿するに到らんや、室に入りて戈を操る自ら人有り、後勁今見る田百谷、一齊衆楚の咻きに勝へず、曰く家雞を舍てゝ野鶩を貴ぶと、慨然簦を擔うて再び南を圖る、南薩の人家藏蓄多し、苦に蠹餘に向つて師資を求む、詎ぞ能く牛後奴僕に甘んぜん、吾亦畫を視る夙好同じ、奇蹟を搜尋して幽隩を極む、萍蹤相値ふ麗洲城、旅館秋燈榻を連れて宿り、君が技已に過ぐ餘子の肩、何ぞ安座して梁肉に饕くに難からん、遠道胡爲ぞ來るや、知る可し心を空うして其腹を盈すを、心摸し手追うて精華を吸ふ、之れ玉を買うて櫝を還すに譬ふ、平生五斗腰を折るを愧つるも、辭せず鞠